高知県立大学健康長寿研究センター

活動報告書

Wellness and Longevity Research Center 2024

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS ×

高知県立大学 University of Kochi 健康長寿研究センター Wellness and Longevity Research Center

令和６年度　健康長寿研究センター活動報告書
目次

003　ご　挨　拶

004　Ⅰ　㊗知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動

004　1.健康長寿体験型セミナー presented by 高知県立大学健康長寿研究センター(対面講座)
004　①健康長寿体験型セミナー in 南国市「熱中症を予防しよう」
007　②健康長寿体験型セミナー in 宿毛市「熱中症予防！貯筋で残暑を乗り切ろう」
③健康長寿体験型セミナー in 四万十町
「熱中症を予防しよう ― ９月やけんど、まだ、暑いぞねー」※開催中止
009　④第 41 回　本山町公開講座　夜學（お昼の特別講座）
「健康体操」～体操を日常に取りいれて、転びにくくなる身体を作っていきましょう!～
013　⑤安芸シルバー短期大学（公開講座）「高齢者が元気になる介護予防」
～体操を日常に取りいれて、転びにくくなる身体を作っていきましょう！～
015　2.高齢者に対する効果的な熱中症予防教育の開発
021　3.土佐市連携事業
021　①とさっ子健診プロジェクト
023　②土佐市地域ケア会議推進プロジェクト
025　③土佐市両親学級
028　4.健康長寿文庫

029　Ⅱ　㊗知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動

029　1.高知県介護職員喀痰吸引等研修事業
031　2.高知県中山間地域等訪問看護師育成講座
049　3.入退院支援事業
078　4.高知県キャリア教育推進事業
091　5.糖尿病保健指導連携体制構築事業

098　Ⅲ　㊗知県の医療機関、社会福祉施設等との健康長寿を推進する活動

100　1.高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会
106　2.高知医療センター包括的連携事業　医療コンフリク・トマネジメント研修
113　3.高知医療センター地域医療連携研修会　合同開催
117　4.病院前妊産婦救護に関するシミュレーション　BLSOin 高知
118　5.専門職者のキャリアサポート「学習支援の極意を学ぶ！」
124　6.第 13 回みさとフェア
126　7.令和６年度包括連携料理教室　減塩食レシピの考案

125　Ⅳ　㊎知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

128　1.看護相談室（リカレント教育等）の広報活動
130　2.社会福祉学部リカレント教育講座
136　3.フィジカルアセスメント研修
139　4.令和６年度新任期行政栄養士研修会（1 ～ 2 年目）
141　5.中堅期（前期）保健師能力育成研修会
143　6.高知県新任期保健師研修会

147　Ⅴ　㊎知県の健康長寿および地域共生社会の調査・研究および社会実装に向けた活動

147　1.ウェル・ビーイング向上に資する厚生評価に関する研究
149　2.健康長寿研究のためのロジスティクス

151　Ⅵ　㊎知県の地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関する活動

151　1.高知市三里地区サロン活動の継続支援プロジェクト
　　～参加者の主体性を大切にしながら健康づくりを応援する～

159　Ⅶ　健康長寿に係る研究等一覧

159　1.健康長寿に係る研究等一覧

160　Ⅷ　付録

ご　挨　拶

高知県立大学地域共生学研究機構 健康長寿研究センター長　久保田 聰美

高知県立大学は、2024年度より既存の地域教育研究センターと健康長寿センター、総合情報センターを新たな研究機構として再構築し、分野横断的・共創的な研究を推進し、研究成果の社会還元機能を強化し、高知県における地域共生社会を支援する「地域共生学研究機構」がスタートしました。新機構スタートと同時に、池田 光徳センター長から、新たな健康長寿研究センター長の任を引き継いだ久保田 聰美です。

まず、新センター長としての最初の任務は、これまでの活動ポリシーである5領域を新機構の方針を見据えた再構成です。これまでの5領域とは、① 高知県の皆様に対し健康長寿を啓発する活動、②高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動、③高知医療センターとの包括的連携を推進する活動、④高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動、⑤高知県の健康長寿を研究する活動です。この5領域の中でも新しいセンター名にもあるように、⑤ 高知県の健康長寿を研究する活動を強化し、下記の新しい活動ポリシーを定めました（下線部は特に強化していく活動）。

1．健康長寿社会を推進する調査・研究及び社会実装の提案に関すること
2．健康長寿を目指す県・市町村との連携に関すること
3．医療機関・社会福祉施設などの健康長寿に関連する機関との連携に関すること
4．健康長寿に携わる専門職等の教育・研修に関すること
5．地域共生社会の実現に係る施策・事業の科学的評価に関すること
6．地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関すること

上記の活動ポリシーを基に実施した事業や活動内容をまとめた、高知県立大学健康長寿研究センター令和6年度活動報告書が完成しましたのでお届けいたします。今年度の報告は、年度途中でのポリシー変更もあり、これまでの形式を踏襲した事業実施報告も多いのが実情ではありますが、今後は、個々の事業や教育・研修の成果や効果を科学的に検証・評価し、地域共生社会の実現に重要なリンクワーカーやボランティア・市民のリカレント教育や育成に努めてまいります。

引き続き、皆さまのご支援、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

高知県立大学健康長寿研究センターの活動目標

高知県立大学健康長寿研究センターは、高知県の健康長寿課題を解決することを目的として、次のような活動を行います。
㊐知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動
㊐知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動
㊐知県の医療機関、社会福祉施設等との健康長寿を推進する活動
㊐知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動
㊐知県の健康長寿および地域共生社会の調査・研究および社会実装に向けた活動
㊐知県の地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関する活動

高知県立大学健康長寿研究センター YouTube チャンネル

Ⅰ　㊒知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動

1. 健康長寿体験型セミナー presented by 高知県立大学健康長寿研究センター(対面講座)

①健康長寿体験型セミナー in 南国市「熱中症を予防しよう！」

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時　令和６年７月 31 日（水）14 時～ 16 時
開催場所　南国市社会福祉協議会３F 多目的ホール
対　　象　地域住民
参加者数　35 人
教 職 員　看護学部 助教　加藤 昭尚、助教　塩見 理香、助教　髙橋 真紀子／健康栄養学部 教授　近藤 美樹、准教授　島田 郁子、助教　隅田 有公子／社会福祉学部 講師　辻 真美、助教　乾 由美
事務局　谷 映美、森田 吹生、松下 哲子、由比 由紀（計 12 人）
学生スタッフ　社会福祉学部２人

⑴　事業概要

高齢者の暮らしを支える地域包括支援センターや保健師さんが考える「地域の健康課題」から、その地域に見合ったセミナーを企画・実施している。

セミナーには地域の皆さんやサポーターたちと共に健康長寿を学び、考え、具体的に生活に取り入れていくことができる活動体験（口腔体操、フレイル予防法など）がある。

⑵　活動成果

前半は、貯筋の大切さや転倒予防の講義と毎日行える体操を紹介し参加者と共に実施した。後半は握力測定・背筋測定・ストレスチェック・栄養指導・新聞棒体操の体験ブースを設置した。

【講演】
①貯筋の大切さについて　②貯筋と熱中症予防の関係性　③日常生活においての季節ごとの留意点
④体操前の体調チェック　⑤体操の効果について
【健康体操】
①新聞棒体操　②ボール体操

⑶　活動評価

参加者の年齢層は 70 ～ 90 歳代後半まで幅広く、真夏日が続く時期の開催であるため参加者の体調に配慮しながら進めた。

日常生活でも「気温が高い時間は外出を避けている」「水分を持ち歩いている」など自身の健康保持増進に興味関心を持つ方が多く、体験ブースも好評であった。

新聞棒を作成し、セミナーで学んだ体操を自宅で行いたいとの声も多く、日々の生活に繋がる健康体操が提案できたのではないかと考える。

⑷ 体験型セミナーの様子

①教員による講演の様子

②熱中症予防カレンダーの紹介

③新聞棒体操

④ボール体操

高知県立大学 健康長寿研究センター

健康長寿体験型セミナー in 南国市

「熱中症を予防しよう！」

2024

7/31(水) 14時～16時(受付13時30分～)

会場：南国市社会福祉センター3階（南国市日吉町2丁目3-28）
駐車場：社会福祉センター南側駐車場

- 握力測定
- 血管年齢測定
- 脳年齢測定
- 栄養バランスチェック（栄養相談）
- 熱中症予防カレンダーの配布

参加費は無料です

内容

講演　14：00～15：30
体験コーナー　15：30～16：00
※体験コーナーの内容は変更になる場合があります

新聞棒作成
お手軽筋力体操♪

講師

健康長寿研究センター　社会福祉学部 辻 真美・乾 由美
熱中症予防チーム　健康栄養学部 島田 郁子

【お申込・お問合せ】

社会福祉法人 南国市社会福祉協議会

TEL 863-4444

申込み〆切：令和6年7月3日（水）

健康長寿体験型セミナー presented by 高知県立大学健康長寿研究センター（対面講座）

②健康長寿体験型セミナー in 宿毛市「熱中症予防！貯筋で残暑を乗り切ろう」

社会福祉学部 准教授　島田 郁子

開催日時　令和 6 年 9 月 13 日（金）13 時 30 分～ 15 時 30 分
開催場所　宿毛文教センター
対　　象　地域住民
参加者数　92 人
教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美、特任教授　森下 安子、特任助教　上岡 千夏／健康栄養学部 教授　近藤 美樹、准教授　島田 郁子、助教　隅田 有公子／社会福祉学部 講師　辻 真美、助教　乾 由美
事務局　森田 吹生、福重 彩音、松下 哲子、由比 由紀、高芝 有美、長山 真子、 津野田 雄三、中澤 雄也、小原 真佳、山中 夢翔（計 18 人）

⑴ 事業概要

高齢者の暮らしを支える地域包括支援センターや保健師さんが考える「地域の健康課題」から、その地域に見合ったセミナーを企画・実施している。

セミナーには地域の皆さんやサポーターたちと共に健康長寿を学び、考え、具体的に生活に取り入れていくことができる活動体験（口腔体操、フレイル予防法など）がある。

⑵ 活動成果

参加者は全員 60 代以上で 92 人もの参加があった。今回は参加者の一人一人に令和 5 年度作成の熱中症カレンダーをバージョンアップ (レシピは写真を大きく、また熱中症対策も複数月にまたがって掲載するなど工夫) させたカレンダーを配布した。カレンダーを使いながらの講義を行い、アンケートの結果、講義の満足度が非常に高く（とても思う、ある程度思う、合わせて 95％）参加者のほとんどが、講義の内容を熱心に聞いてくれたことがわかった。

ほとんどの参加者がエアコン、扇風機で暑さをコントロールしていることがわかった。しかし、脱水症は季節に関わらず起こるリスクもあるためその点も理解してもらうことに努めた。アンケートからは、今日から実践したいこととして室温調整、水分摂取等が書かれており、一定の成果はあったと考える。

講義後は、各ブースで新聞棒作りや食事相談、血管年齢測定などを体験してもらい、スタッフとの交流を楽しんでもらった。

⑶ 活動評価

参加者からは「新しい予防法を知り、良かったです」「常に気をつけて暑さを乗り越えて行こうと思います」といった感想をいただいた。熱中症カレンダーの配布と講義（説明）、体験コーナーの組み合わせで参加者にとって体と頭をしっかり動かす機会となったと考えられる。

⑷　体験型セミナーの様子

①教員による講演の様子

②参加者の様子

③新聞棒体操

④熱中症カレンダー

健康長寿体験型セミナー presented by 高知県立大学健康長寿研究センター（対面講座）

④第 41 回　本山町公開講座　夜學（お昼の特別講座）
「健康体操」～体操を日常に取りいれて、転びにくくなる身体を作っていきましょう！～

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時	令和 6 年 8 月 27 日（火）13 時～ 14 時 30 分
開催場所	本山町プラチナセンター
対　　象	本山町、本山町老人クラブ連合会
参加者数	16 人
教 職 員	社会福祉学部 講師　辻 真美
	事務局　谷 映美、松下 哲子（計 3 人）

⑴　事業概要

本事業は、本学の地域教育研究センターが、本学と包括連携協定を締結している本山町及び本山町老人クラブ連合会とともに、大人を対象に、年間を通して開催している「夜學」のお昼の特別講義の一つとして、健康長寿研究センターが開催している体験型セミナーの手法を用いて、実施した。

内容は、高齢者が運動不足や身体機能の低下が指摘される課題に着目し、転倒予防を目指した健康体操とした。本山町の町民の皆様が、安全かつ継続的に自宅において体操に取り組めることを目的とする。

なお、本事業は、健康長寿研究センター公式 YouTube チャンネルにおいて令和 2 年度より動画配信している「第一弾おうちで健康長寿体験型セミナー」の転倒予防体操の内容と連動している。

⑵　活動成果

前半はテーマに基づく講座を行い、休憩後、後半は体操を実演・紹介した。

○講演（45 分）
・健康長寿研究センターの紹介
・熱中症を予防しよう‘熱中症予防カレンダーの活用術’
・体操の効果と気をつけること
・体操前の体調チェック

○立ち上がりや歩行に大切な筋肉を使った体操の実演、紹介（45 分）
・手作り新聞棒を使った体操
・やわらかボールを使った体操
（自宅で自主トレバージョンとサロン活動でのバージョンを実演）

⑶　活動評価

アンケート回答者の全員が、講座を楽しく学べて、テーマもよかったとされた。テーマに関する自由記述からは、「とても楽しくさせて頂きました」や「年齢とともに筋肉が少なくなっているのが気になっていました。これから毎日体操を続けていきたいと思います」等の記述がみられた。

また、「新聞棒体操をみんなに広めて貯筋したい」や「地域のミニデイ」といった場で活用していきた

いというコメントも頂いた。

参加者の年齢層で多かったのは 70 代が 7 人、80 代と 60 代が 3 人、30 代が 1 人だった。

実演中はもとより、休憩中もスタッフや参加者同士が笑顔で話をしたり、日頃頑張っていることを伝え合ったり、声を掛け合ったりする交流の場が生まれていた。

講座後の意見交換時には、本山町に移住された方が自ら手を挙げて自己紹介をされていた。公開講座の場が地域の方々とのつながりのきっかけになっていると感じた。

⑷ 講座の様子

①教員による講座の様子

②社会福祉協議会による体操のお手本

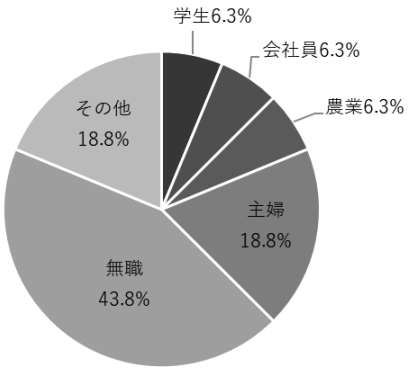
③新聞棒体操

④レクリエーション（ボールの奪い合い）

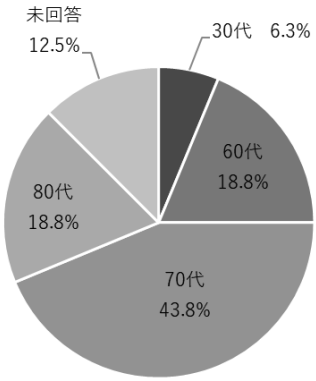
第 41 回　本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座「参加者アンケート」

開催日時：令和 6 年8 月 27 日(火)
参加者：16 人
回答者：14 人

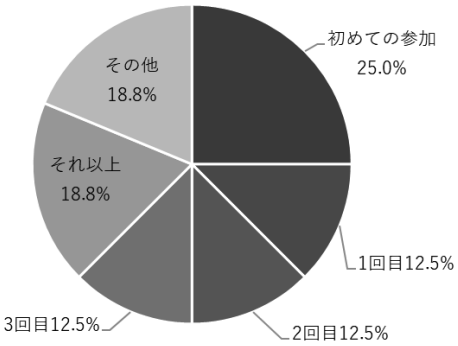
Q1　あなたの職業を教えてください。



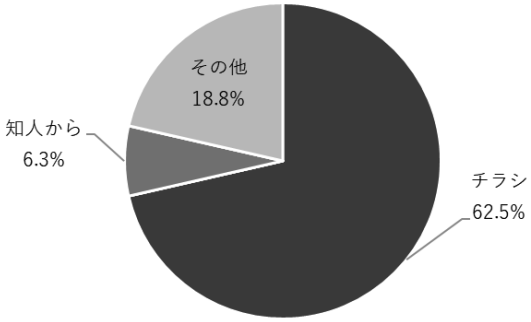
Q2　あなたの年齢を教えてください。



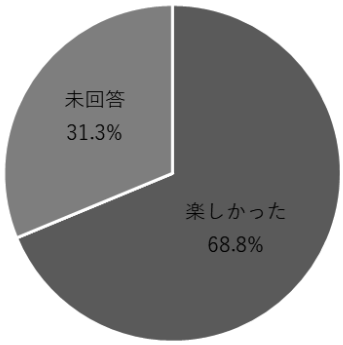
Q3　今回の参加について



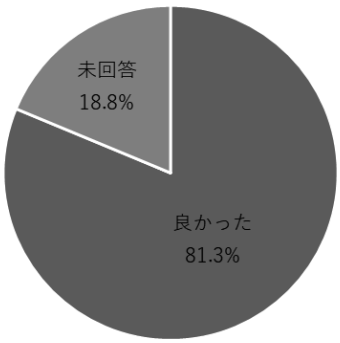
Q4　今回の講座についてどこで知りましたか？



Q5　本日の講義は楽しく学べましたか？



Q6　本日のテーマはいかがでしたか？



第 41 回　本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座「参加者アンケート」

Q7　テーマの感想をお聞かせください。

・体も心もリフレッシュも出来、最高以外のなにも有りません。本当に有難うございました。
・棒やボールを使った運動を体験できて良かったです。
・はじめは来る時、いやいや来ましたけれど、とても楽しくさせて頂きました。
・新聞棒体操、みんなに広めて貯筋したいと思います。
・年齢と共に筋肉が少なくなっているのが気になっていました。これから毎日体操を続けていきたいと思います。
・楽しく笑顔でおしえていただき、私も楽しく出来ました。
・見ているのと簡単そうでも、実際にやってみると難しくて楽しく運動させていただきました。
・健康になりました。
・楽しく今日のことを思い出してはげみます。
・大変楽しく学ばせてもらいました。
・地域のミニデイで使えるので。

Q8　お気づきの点

・また、お会いしたいです。
・はじめて来たけれど又来たくなりました。
・棒体操も楽しく家でもかんたんにできると思いました。
・ありがとうございます。
・ピンマイクがあるといいですね。

健康長寿体験型セミナー presented by 高知県立大学健康長寿研究センター（対面講座）

⑤安芸シルバー短期大学（公開講座）「高齢者が元気になる介護予防」
～体操を日常に取りいれて、転びにくくなる身体を作っていきましょう！～

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時	令和 6 年 11 月 22 日（金）10 時 30 分～ 12 時
開催場所	安芸市健康ふれあいセンター元気館（健診待合ホール）
対　　象	安芸市シルバー短期大学受講者
参加者数	50 人
教 職 員	社会福祉学部 講師　辻 真美
	事務局　中澤 雄也、福重 彩音、松下 哲子（計 4 人）

⑴　事業概要

安芸市シルバー短期大学は、シルバー世代の方々が心身ともに健康で明るく、豊かで充実した生活を創造し、学識を高め社会見聞を広めることを目的に健康づくりや時事に関する講座を行っている。包括連携協定を締結している安芸市の依頼を受け、今年度は 3 講座を本学が担当し、そのうち 1 講座を健康長寿研究センターが担当した。

本講座では、高齢者が運動不足や身体機能の低下が指摘される課題に着目し、転倒予防を目指した健康体操をした。安芸市等のシルバー世代の皆様が、安全かつ継続的に自宅において体操に取り組めることを目的とする。

なお、本事業は、健康長寿研究センター公式 YouTube チャンネルにおいて令和 2 年度より動画配信している「第一弾おうちで健康長寿体験型セミナー」の転倒予防体操の内容と連動している。

⑵　活動成果

前半はテーマに基づく講演を行い、休憩後の後半は体操を実演・紹介した。

○講演（45 分）
- 健康長寿研究センターの紹介
- 冬も脱水症を予防しよう　熱中症予防カレンダーの活用術・筋肉と脱水について
- 体操の効果と気をつけること
- 体操前の体調チェック

○立ち上がりや歩行に大切な筋肉を使った体操の実演、紹介（45 分）
- 手作り新聞棒を使った体操
- やわらかボールを使った体操

⑶　活動評価

体調確認や水分補給への言葉かけを意識して伝えると、全員から大きなうなずきがあり、熱心に最後まで講義と体操に参加されていた。また、自宅だけではなく、自然と参加者同士のコミュニケーションが生まれるよう、ペアや集団で楽しめるプログラムも取り入れた。

講座終了後、3 年前から本講座に参加いただいている 96 歳の方から「新聞棒体操で気をつけることや

効果について改めて勉強し直した。今日、覚えた体操はサロン活動に取り入れていきたい。」とのコメントを頂いた。その方の元気の秘訣は、他者の役に立つことを率先して行うことであった。地域交流の企画も行い、その企画は大盛況だったと話してくださった。

体操を通して人との繋がりを創出し、ひいては地域づくりにも貢献できることの可能性を感じた。今後も、高齢者の心身の両面によい効果が生まれるような体操内容やアレンジを検討し、住民の方にご提案していきたいと考えている。

今年度も大学で作成した手作りの新聞棒と熱中症予防カレンダーを全参加者に持ち帰ってもらうことができ、住民の健康維持の貢献につなぐことができたと考える。

⑷ 公開講座の様子

①教員による講座

②新聞棒体操

③ボールの取り合い

④ボール回し

2.高齢者に対する効果的な熱中症予防教育の開発

健康栄養学部 准教授　島田 郁子

開催日時　令和６年７月 31 日（水）～

開催場所　令和６年７月 31 日（水）体験型セミナー南国市（35 人）
令和６年９月 ２ 日（月）土佐町とんからりんの家（29 人）
令和６年９月 ５ 日（木）奥福井公民館（10 人）
令和６年９月 13 日（金）体験型セミナー宿毛市（92 人）
令和６年９月 26 日（木）体験型セミナー四万十町（中止）

対　　象　地域住民

参加者数　166 人

教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美、特任教授　森下 安子、特任助教　上岡 千夏／健康栄養学部 教授　近藤 美樹、准教授　島田 郁子、助教　隅田 有公子／社会福祉学部 講師　辻 真美、助教　乾 由美
事務局　谷 映美、森田 吹生、福重 彩音、松下 哲子、由比 由紀、高芝 有美、長山 真子、津野田 雄三、中澤 雄也、小原 真佳
教務・学生支援課　山中 夢翔（計 19 人）

外部講師　高知学園短期大学 看護学科 准教授　小原 弘子氏
高知学園大学 健康科学部 管理栄養学科 准教授　廣内 智子氏

学生スタッフ　社会福祉学部生２人

⑴　事業概要

前年度に引き続き、地域在住高齢者を対象に、熱中症予防教育を実施した。住居内で日常的に生じる熱中症（非労作性熱中症）の発生を予防することを目的に講座を実施し､教育媒体としてカレンダーを作成、配布した。カレンダーは昨年のものをさらに充実させ、熱中症予防のコラム、猛暑でも食べてもらいたい簡易な料理を掲載した。

⑵　活動成果

1)熱中症予防教育の検討

昨年度実施に関わった健康栄養学部・社会福祉学部の教員と健康長寿研究センター担当職員、実施後転出した教員２人が中核となるメンバーであったため、今年度も引き続き熱中症予防カレンダーの作成、熱中症予防教育を担当した。カレンダーについては、日々の体調管理を書き込める欄に加え、水分摂取の工夫、部屋の温度調整の工夫、熱中症に負けない一年間を通じた身体づくり（運動や栄養摂取方法)、熱中症予防に向けたレシピを掲載したものを、ひと月につき見開き１ページに変更し、カレンダーのサイズも昨年度より大きいものにした。あわせて料理の写真も大きくし、高齢者に取って見やすく、わかりやすいものを心掛けた。

2)体験型セミナー（熱中症予防教育）の実施

南国市、土佐町、高知市、宿毛市で実施。「熱中症予防カレンダー」を活用して熱中症予防のポイントの解説など、予防教育を実施した。高知市（福井）と土佐町以外は体験コーナーもあわせて開設し、新聞棒作成や食事診断、血流測定など参加者全員が熱心に取り組んでいた。

⑶　活動評価

昨年度に引き続き、短時間でわかりやすい講座を実施した結果、参加者の日々の生活において活発な熱中症に対する予防活動が見られ、健康維持に関心が高い人たちが参加していることが伺えた。本講座の参加者が親しい人や近所の人に熱中症の怖さや対策を伝えることが期待される。また､コロナ禍が落ち着き、高齢者の運動も含めた交流の場になっている。カレンダーは昨年度からバージョンアップさせ、字体も大きくわかりやすい内容にしたところ、95%の方が、カレンダーが役に立ちそうだと回答されるなど、好評を得た。

＜アンケート結果＞

・足を動かすことが良かったと思います。
・大変勉強になりました。
・熱中症予防カレンダーで教わった料理を応用して似たような物は出来ると思うが、同じものは難しいと思う（材料等）
・熱中症への理解が深まった。カレンダーをできるだけ利用したい。
・楽しく学習できました。
・本日はありがとうございました。お料理も作ってみようと思います。
・常に気をつけて暑さを乗り越えて行こうと思います。

※南国市体験型セミナーの活動評価は４ページに記載

⑷　熱中症予防教育の様子

①南国市体験型セミナー

②土佐町とんからりんの家

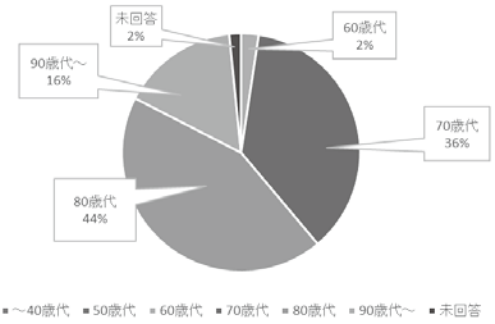
③奥福井公民館

④宿毛市体験型セミナー

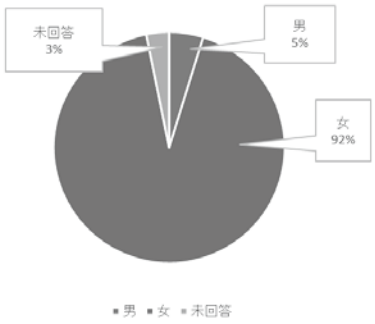
高齢者に対する効果的な熱中症予防教育の開発「参加者アンケート」

開催日時：令和 6 年 7 月 31 日（水）～
参加者：131 人
回答者：126 人

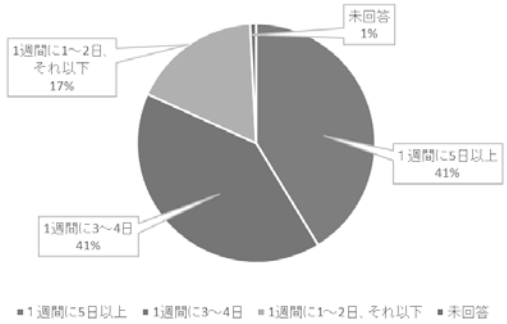
Q１　年齢



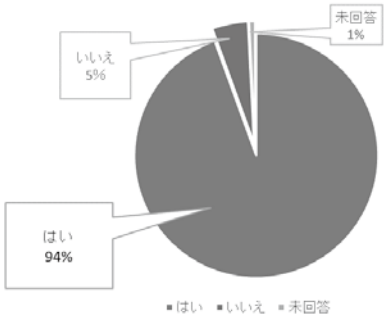
Q２　性別



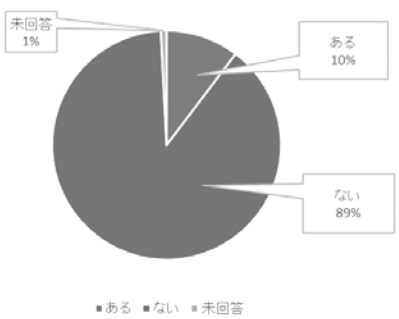
Q３　外出の頻度



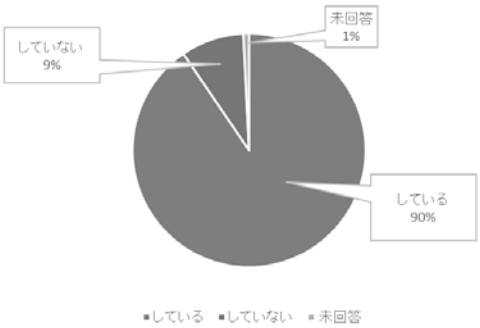
Q４　体に不調を感じた時や体調に不安がある時に相談できる人はいますか



Q５　熱中症の経験はありますか

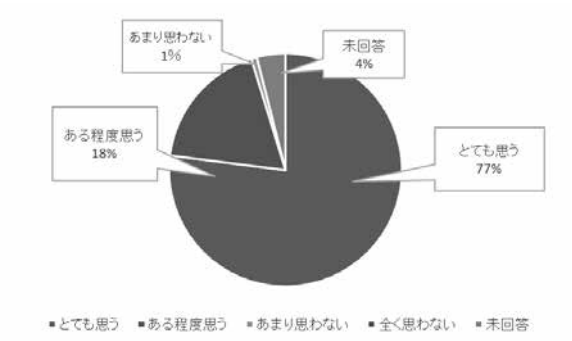


Q６　普段、脱水症や熱中症についての情報得るようにしていますか

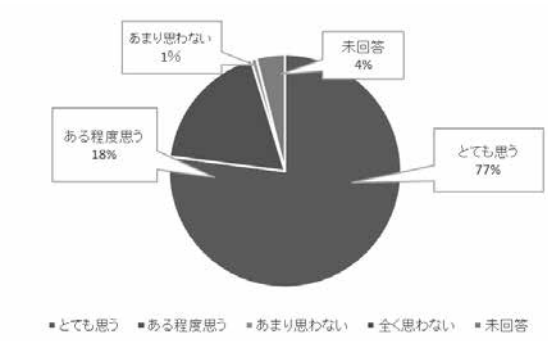


高齢者に対する効果的な熱中症予防教育の開発「参加者アンケート」

Q７　今日の講義はこれからの生活に参考になるものでしたか



Q８　熱中症カレンダーは役に立ちそうでしたか



\レシピ付き/

おいしく暑さを乗り切ろう

熱中症予防カレンダー

2024年7月～2025年6月

高知県民のみなさまへ

近年、熱中症と、その予防策が全国的な課題となっています。特にご高齢の方が発症する熱中症の背景には、室温が上がってもエアコンなどを使用せず、風通しが悪く湿度の高い室内で過ごしていることや、水分が不足し、気づかないうちに生じた脱水症がきっかけとなって発症していたことがあげられます。

高知県立大学健康長寿研究センターでは、昨年度から主にご高齢の方を対象とした熱中症予防教育に取り組んでいます。この活動を通して、日々の生活に熱中症予防を取り入れる意識付けになったと好評をいただいており、今年度も引き続き、ご高齢の方が、熱中症にならずに暑い夏を乗り切れるよう「熱中症予防カレンダー」を作成しました。このカレンダーには、熱中症予防に役立つ食事や、日々の暮らしの中で活かせるちょっとした工夫を載せています。熱中症は夏に発症するイメージがありますが、梅雨どきなど夏以外にも危険が潜んでいます。また冬場も暖房などで室内が乾燥し、身体から水分が失われやすくなります。そのため、一年間を通して熱中症を防ぐためのアドバイスも掲載しました。

この「熱中症予防カレンダー」が、高知県民のみなさまにとって、食事・水分摂取、運動という健康に向けた取り組みの一助となれば幸いです。

高知県立大学健康長寿研究センター　熱中症予防チーム

●高知県立大学　島田郁子(健康栄養学部)、辻真美・乾由美(社会福祉学部)、由比由紀・谷映美(事務局)
●研究協力者　小原弘子(高知学園短期大学看護学科)、廣内智子(高知学園大学管理栄養学科)

健康長寿
研究センター
キャラクター
ウルクさん

高知県立大学

トマトツナそうめん

材料（2人分）

そうめん…180〜200g
トマト…大1個
大葉…4〜6枚
ツナ缶…1缶
A
- そうめんつゆ（ストレート）…100ml
- バジル…適量

レシピ

1 大葉は軸を切り落として千切りにする。
2 トマトは1cm角に切る。
3 ボウルに2、ツナ油漬け、Aを入れて混ぜる。
4 鍋にお湯を沸かし、そうめんを茹でる。お湯を切り、流水でもみ洗いし、氷水に入れてよく冷やす。
5 器に水気を切った4を盛り付け、3をかけ、大葉をのせる。

料理のコツ・ポイント

そうめんの茹で時間はパッケージに記載されている時間を目安にしてください。
トマトは小さく切るほど麺とよく絡んで美味しくできます。

日中だけでなく 眠るときも気をつける

夜もエアコンを上手に使い 寝室も涼しくしましょう

ー晩中弱めにエアコンを入れたままにして、良い環境でぐっすり眠りましょう
日中の日照りのために天井が熱くなっているので、風向きを上にしておきましょう

首に保冷剤をまくことや 冷却まくらの使用もお勧めです

水分摂取の目安

2024 8

コラム

熱中症予防のための 4つの心がけ

1. 冷房を入れて 室温28度以下 にしましょう
2. 昼は首に保冷剤、夜は冷却まくら を使いましょう
3. 西向きの窓には、すだれやカーテンを掛け 直射日光をさけましょう
4. 服は風通しのよいもの を選びましょう

高知県立大学 健康長寿研究センター

日	月	火	水	木	金	土
28	29	30	31	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

3.土佐市連携事業

①土佐市連携事業　とさっ子健診プロジェクト

健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行

開催日時　令和６年８月 25 日（日）、８月 26 日（月）　分析は通年実施
開催場所　土佐市保健福祉センター
対　　象　小学５年生、中学２年生
参加者数　96 人
教 職 員　健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行／看護学部 助教　田之頭 恵里、
助教　徳岡 麻由
事務局　森田 吹生（計４人）
学生スタッフ　看護学部生６人／看護学部研究科生４人

⑴　事業概要

土佐市と本学との間で締結されている連携事業に関する協定のもと、平成 24 年より協力している。肥満傾向児や、壮年期の健診受診率やがん死亡率の水準を踏まえて、学童期からの健康意識の向上を目的に、小学５年生・中学２年生を対象とした生活習慣病予防健診が実施されている。

本年度は、開始より 10 年以上経過したことから、データベース化による健診結果の健康政策への利活用を念頭に、過去の受診者の健診データと生活習慣データの関連の分析を進めた。また、健康行動や社会経済的状況、家族の状況との関連を検討する必要があることから、過去の受診者を対象とした追跡調査を実施し、結果の解析を進めた。

また、子どもが適度な身体活動を行って健康的な生活を実現する一助とすることをねらい、健診当日にスウェーデン体操の実技体験を開催した。

⑵　活動成果

健診当日には市が実施する生活習慣病予防健診に加えて、受診者ならびに保護者を対象に健康行動やウェル・ビーイングに関する質問紙調査を実施した。また、過去の受診者ならびに保護者を対象に同様の質問紙調査を実施した。合わせて 180 人の有効回答が得られた。統計分析の結果、夜更かし（小学５年生は 22 時以降、中学２年生は 23 時以降の就寝）により、脂質代謝（中性脂肪）や糖代謝（HbA1c）の項目で有所見となるリスクが有意に高くなった。また、平日に朝食を欠食することにより肥満度が上昇する影響が見られ、これは身体活動の不足や家族の経済的豊かさを考慮しても変わらない結果であった。

スウェーデン体操の実技体験には約 30 人の児童・保護者の参加が得られ、日頃の運動習慣がある子どももない子どもも、健康の上で効果的な身体活動を楽しみながら体験されていた。

⑶　活動評価

分析の結果は土佐市健康づくり課と共有し、分析結果とそれに基づく生活習慣形成のアドバイスを記事とした「とさっ子だより」が作成され、市内小中学校の全児童・生徒に配布され、分析結果が健康的な生活習慣を目指す普及啓発に活用された。

また、研究成果は日本公衆衛生学会総会（http://jsph83.umin.jp/index.html）ならびに日本看護科学学会学術集会（https://jans44.org/）で発表されたほか、論文にまとめられて公刊された。

⑷　健診の様子

①質問紙調査実施風景

②スウェーデン体操実技体験

土佐市連携事業

②土佐市連携事業　土佐市地域ケア会議推進プロジェクト

看護学部 特任教授　森下 安子

開催日時　通年
開催場所　土佐市保健福祉センター
対　　象　土佐市地域包括支援センター
参加者数　延べ 165 人
教 職 員　看護学部 特任教授　森下 安子、助教　竹中 英利子、助教　源田 美香（計３人）

⑴ 事業概要

【事業目的】

１．土佐市が平成 25 年度後期より行っている「地域ケア会議」の効率的な方法の確立に向けた会議運営に関する助言、作成した会議に使用するアセスメント様式をもとに会議内容の課題分析の支援を行う。

２．地域ケア会議におけるケース検討において課題の明確化、高齢者の介護予防を促進するための対応方法について看護の視点から助言をする。

【事業内容】

地域ケア会議は土佐市の事業所が担当している要支援１、要介護１のケースについて２回検討する。第１回目の検討では、ケースについての報告をうけ看護師、保健師、薬剤師、理学療法士、歯科衛生士、介護福祉士などが専門的な視点でケースの情報の分析、ケアの方向性などについて助言をする。つづいて、第１回目の会議から３か月後に開催する第２回目のモニタリング会議では、事業所より第１回目の会議の内容をうけての情報の追加、介入の成果、今後の課題について報告をうけ、さらに情報の分析を行い今後のケアの方向性を協議する。

また、各回のケース検討終了後には専門職間で土佐市の介護上の課題とその対応策について、地域ケア会議の運営方法の工夫について協議する。

⑵ 活動成果

担当教員１～２名で出席し、地域ケア会議における看護アドバイザー、土佐市の介護上の課題とその対応策について、地域ケア会議の運営方法の工夫について協議した。

参加実績：計７回

令和６年 ７ 月 ３ 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和６年 ８ 月 ７ 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和６年 10 月 16 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和６年 11 月 ６ 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和６年 11 月 20 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和７年 １ 月 ８ 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和７年 ２ 月 19 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分

⑶ 活動評価

各ケースでは、第１回目の検討会では脳卒中、循環器疾患などをもちつつ認知症に対応する家族介護者の負担緩和を図るアプローチについての対応困難が挙げられていた。各事業所は認知症の方に有効なアプローチについては習熟しているため、特に疾患の症状変化、異常を早期発見するためのポイント、家族の言動の解釈、家族の強みを活かした介護負担感を緩和するためのアプローチについて助言を行った。第２回目のモニタリング会議では、第１回目で検討したアプローチの実際と成果について報告をうけ、継続している課題と対応策、地域にあるフォーマル、インフォーマルなサービスの活用などについて担当する事業所と多職種で協議し、支援の成果について助言するとともに今後の支援の方向性を共有した。

会議運営に関しては、昨年度は、ケース検討資料に検査データが含まれていない場合が多く症状の把握、予測について十分な検討に至らないことが課題であった。そのため、全ケースにできる限り直近の検査データを含めてもらうことで身体情報に関するアセスメント、このため、具体的アプローチの検討がより深められるようになった。継続課題として、症状管理などに関する医療との連携、自宅、病院、デイサービスなど療養者が過ごす場で関わる専門職の見解を踏まえた個別性のある居宅サービス計画を作成することが課題となっており、看護アドバイザーとして対応策についての助言が求められた。

土佐市連携事業

③土佐市連携事業　土佐市両親学級

看護学部 助教　徳岡 麻由

開催日時　令和６年８月 18 日（日）８時 30 分～ 12 時
開催場所　土佐市保健福祉センター１階　集団検診室
対　　象　土佐市在住の初産婦とご家族
参加者数　20 人
教 職 員　看護学部 助教　徳岡 麻由、助教　前田 愛友香
外部講師　土佐市健康づくり課保健師
学生スタッフ　看護学部生２人

⑴　事業概要

両親学級の開催は、親役割への準備性を高め、育児技術の習得や出産後の生活イメージを具体化し家族発達を促進する役割をもつ。土佐市では、出産後の育児困難や産後うつ症状の出現予防として、妊娠期からの継続した支援の必要性から両親学級を開催しており、包括連携している本学との連携事業の一つとして、「土佐市両親学級」が開催されている。両親学級を通して両親と家族を理解し、地域での生活の実際や健康課題を知り、教育研究に活かしている。また、学生が対象と関わる中で、対象の妊娠の受け止めや子どもへの思い、出産への準備性の高まりを学ぶ貴重な機会を得ている。学生は地域での健康教育に参加する機会が少ない現状があり、地域の健康教育の実際を知ることで妊婦と家族への対象理解を深め、地域での対象の生活や家族の発達、健康を促進する看護について理解を深める機会となっている。内容は産後メンタルヘルスに関する説明（保健師）、妊娠中の栄養（栄養士）指導への参加、親役割、子育て生活プランの話し合いへの参加、③沐浴指導のサポート、④授乳のポジショニング体験、新生児の抱っこ体験のサポートである。

⑵　活動成果

1. 担当保健師、助産師との打ち合わせ

事前に参加する教員が土佐市の助産師、保健師と Web で打ち合わせを行い、主に教員と学生が担当させていただく新生児の抱っこ、授乳体験や沐浴の物品を確認し、大学から持参するよう計画を立てた。当日は 10 組の妊婦、家族が参加する予定であることから、それぞれの対象に学生と教員が寄り添えるような環境調整を行った。妊婦の妊娠週数を鑑み、家族と協力しながら沐浴を行うことができるような沐浴槽の配置、物品の準備を考え、安心安全に体験できるようプログラムを組み立てた。

2. 学生へのオリエンテーション

両親学級に向けて事前にオリエンテーションを実施した。沐浴はそれぞれの学生が１組の両親のそばで実施の補助や説明を行うことができるよう、手順の確認や安全に実施するための注意点を確認した。赤ちゃんの抱っこ体験や授乳体験についても安全に実施するための手順を確認し、参加する妊婦さんの人数分の新生児人形を準備した。

3. 準備と実施

当日は両親学級開催前に実際の会場を確認し、沐浴の準備物品やお湯はり、温度の確認を行った。新生

児人形はすぐに抱っこできるよう準備し、子育て生活プランを話し合う際も抱っこが体験できるよう準備した。参加者は土佐市在住の初産婦と夫、計 10 組 20 人であった。沐浴は、１組ずつそれぞれの沐浴ブースに分かれ実際に体験し、安全や工夫を話し合い１つ１つの手順を確認しつつ実施した。具体的に自宅ではどのような場所で、誰が、どんな方法で沐浴をするか、両親が学生と共にイメージしながら取り組む様子が見られた。手順通りにやることが正解ではなく、新生児に合わせて徐々にコツがつかめることを知り、「イメージが深まりました」と話される両親の様子も見られた。

育児生活プランでは各家庭が１枚のシートに現在の家庭生活での役割分担についてどの様に考えているか等を話し合い、産後の新生児との生活を具体的にイメージしながら、役割について話し合う機会となっていた。両親が学生に「赤ちゃんの外出はどのくらいからよいのか」など質問がある場面もあり、確認しながらともに考え、理解を深めている様子であった。

赤ちゃんの抱っこは、等身大の新生児人形を抱っこしながら「結構重い」や、「首がぐらぐらして怖い」など、夫婦でコミュニケーションをとりながら産まれてくるわが子をイメージする様子が見られた。学生・教員は両親に寄り添いながら、「もうすぐですね」「楽しみですね」などと声をかけ、親役割や家族発達を促進する関わりに努めた。

⑶ 活動評価

産後うつは増加しており、母親のメンタルヘルスへの支援は喫緊の課題である。保健師による産後メンタルヘルスに関する説明、栄養士による栄養指導への参加を通して産後のメンタルヘルスに興味関心をもち知識を得ることは、産後の心身の健康を見据えた重要な支援となる。参加の 10 組の両親は産後の気持ちの変化やコミュニケーションについて学び、考える機会となっていた。学生も、地域で実際にどのような産後メンタルヘルスへの支援が展開されているか、その実際を知り、サービスの概要や目的を理解することに繋がった。

子育て生活プランへの話し合いは、両親がシートを学生や専門職と共有し、不安なことを専門職に相談する場面もあり、学生は親となる人が出産に向けてどのように準備性を高めているかを知り、学ぶ機会を得ることができた。また、実際に沐浴を体験して両親は育児技術を獲得し、出産後の親役割をイメージすることに繋がった。学生は助産看護実習で対象者を受け持ち、沐浴指導を行う機会があるため、母親や家族のニーズを捉えた支援につながるヒントを得ていた。また、自宅に帰り実際にどのように沐浴をするかをイメージできるような関わりについて考える機会となっていた。

授乳体験はポジショニングや児の栄養方法を知る機会となり、具体的に児の栄養方法や、授乳クッションの使い方をイメージできるような声掛けを意識し関わった。母親は体験を通して、１度の授乳行動の大変さを体験し、父親や周囲から得たいサポートについて考える機会となっていた。学生は新生児の栄養方法に対して母親がどのような思いを抱いているのか、妊娠中の母親に聞く機会を得て、児や育児に対しての思いや考えを学ぶことができた。

新生児の抱っこ体験は、１組の両親に１人以上の学生や教員、担当保健師が寄り添い、細やかに抱っこのサポートを行い、育児役割について共に考え、相談を受けながらすすめた。学生を含め多くのサポーターの見守りのもと、抱っこの練習や相談環境を調整できたことは、対象にとっての満足感に繋がったと考える。

今後の課題として、土佐市と協働しながら効果的な両親学級を開催すべく、開催時期や回数、プログラムの内容や運営方法等の検討を重ねることが必要である。また学生が、地域社会の実際のサービスとの連続性の中で、サービス実施までの準備や評価までの一連の流れを理解する機会につなげたい。多職種間の連携や継続性のある事業展開について学び、現場と結びつけて視野を広げることができる教育についても、引き続き検討していきたい。

⑷　両親学級の様子

①沐浴体験の様子

②メンタルヘルスに関する説明

③子育て生活プランの話し合い

④沐浴体験の様子

4. 健康長寿文庫

⑴ 事業概要

高知県立大学の池キャンパス図書館の収蔵書は、「看護・福祉・栄養」に関連した専門書を中心に所蔵されており、一般啓発書は多くなかった。そこで健康長寿研究センターは、平成 22 年度から同図書館に「健康長寿文庫」を整備し、県民の方々に役立つような本を選定し、順次収めている。「健康長寿文庫」は、池キャンパス図書館内にコーナーが設けられており、受付カウンター近くには最新年度に収蔵された本が配架されている。各年度の収蔵数は下記のとおりである。

平成 22 年度	155 冊	平成 30 年度	103 冊
平成 23 年度	169 冊	令和 元 年度	128 冊
平成 24 年度	153 冊	令和 2 年度	150 冊
平成 25 年度	197 冊	令和 3 年度	119 冊
平成 26 年度	154 冊	令和 4 年度	72 冊
平成 27 年度	147 冊	令和 5 年度	87 冊
平成 28 年度	123 冊	令和 6 年度	20 冊
平成 29 年度	80 冊	（合計）	（1,857 冊）

⑵ 活動成果

健康長寿研究センター運営委員が「健康長寿文庫」を選定し、書籍には推薦コメントを添えて展示をした。

⑶ 活動評価

池キャンパス図書館に特設コーナーを設置し、教員からの推薦コメントを添えたこと、また、永国寺キャンパス図書館では企画展示「健康長寿文庫を紹介します！」が開催され、多くの県民の方々が健康啓発に関する書籍に興味を持ち、書籍を手に取る機会となったと考える。

⑷ 写真

①永国寺キャンパス図書館　企画展示

②永国寺キャンパス図書館　企画展示

③池キャンパス図書館　展示

Ⅱ　㊕知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

1. 高知県介護職員喀痰吸引等研修事業

看護学部 准教授　川上 理子

開催日時　＜第１回＞
令和６年 ７ 月 13 日（土） ９時 30 分～ 16 時
令和６年 ７ 月 14 日（日） ９時～ 16 時
＜第２回＞
令和６年 10 月 12 日（土） ９時 30 分～ 16 時
令和６年 10 月 13 日（日） ９時～ 16 時
＜第３回＞
令和６年 11 月 30 日（土） ９時 30 分～ 16 時
令和６年 12 月 １ 日（日） ９時～ 16 時
＜第４回＞
令和７年 ２ 月 15 日（土） ９時 30 分～ 16 時
令和７年 ２ 月 16 日（日） ９時～ 16 時

開催場所　高知県立大学看護学部棟　C220・C209・C211

対　　象　介護福祉士、障害者（児）サービス事業所及び障害者（児）施設等（医療機関を除く。）で福祉サービスに従事している介護職員、特別支援学校の教員、保育士等（以下「介護職員等」という。）、特定の者に対してたんの吸引等の行為を行う必要のある者

参加者数　第１回：０人　第２回：３人　第３回：３人　第４回：４人　計 10 人

教 職 員　看護学部 准教授　川上 理子、助教　竹中 英利子、助教　源田 美香

⑴　事業概要

在宅医療の推進により、介護や医療的ケアが必要ながらも在宅療養を選択する方を支えるため、たんの吸引等の実施が可能な介護職員等の養成が求められている。高知県では、平成 23 年から介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養（以下「たんの吸引等」という。）実施のための研修を行っており、本学では同年より高知県からの依頼により研修を実施している。

今年度も本学にて基本研修を開催した。基本研修は、各回２日間で、講義研修（８時間）と実技研修（２時間）で構成されている。講義内容は、重度障害児・者の地域生活等に関する講義、痰の吸引等を必要とする重度障害児・者等の障害及び支援に関する講義、緊急時の対応及び危険防止に関する講義、経管栄養に関するものである。各回とも全講義研修終了後に筆記試験を実施し、合格となる 90 点以上（100 点満点）の受講者に実技研修を行った。実技研修では、モデル人形（高研吸引・胃瘻モデル：LM-097B）を用いて喀痰吸引（鼻・口・気管切開部）と経管栄養注入（液体栄養・半固形栄養）を行い、手順の確認とイメージ化を行った。

⑵　活動成果

第１回は受講者がいなかった。第２回目以降は、２日間の講義研修を終えた受講者 10 人（※うち第４

回受講者１人は筆記試験未受験）のうち９人が筆記試験に合格し、実技研修を受け、基本研修を修了することができた（合格率 90%）。

⑶ 活動評価

受講者は、訪問介護など療養者の自宅で支援している方、放課後等デイサービスや保育園など療養者が通う場で支援している方など様々であった。

講義研修では、安全に喀痰吸引･経管栄養を実施するための基礎的知識について、テキストだけでなく、モデル人形や動画を用いて理解が深まるように工夫した。また、吸引器や人工呼吸器、カフアシスト、気管切開カニューレ、胃瘻チューブなど実物に触れる機会を設けた。特に吸引器は、療養者によって使用機種が様々であることを想定し、携帯式、足踏み式、吸入機能付きなど複数の機種を実際に見て、特徴を理解できるように努めた。受講者は、実際に関わる療養者をイメージしながら熱心に学習され、たんの吸引等が生命維持に重要な行為であるだけでなく、療養者の尊厳を守り、望む場所で生活できる可能性を広げるものであると学んだ。また、家族や医療者、その他療養者を支える多職種との連携についても学ぶことができた。

実技研修では、モデル人形を用いて、喀痰吸引（鼻・口・気管切開部）と胃ろうまたは経鼻胃管からの経管栄養（液体栄養・半固形栄養）を経験した。実践を想定して積極的に質問をしながら難しい部分を繰り返し行い、手順を確認することができた。

今後、たんの吸引等が可能な介護職員が増えることで、医療的ケアが必要であっても在宅での生活が可能になる、日中の活動の場が増えて社会参加が可能になる、家族の介護負担の軽減など、様々な効果が期待される。

今年度は受講者数 10 人と例年よりやや少なく、（令和５年度 18 人、令和４年度６人）。受講者がいない回もあった。在宅医療が推進される中、医療的ケアを提供できる人材育成は重要であり、新しく医療的ケアを必要とする療養者を受け入れるため、事業所が一丸となって体制を整え、研修をすすめているところもある。高知県では、介護に関わる人材不足が深刻な地域もある。通常業務の負担が増えることが予想される中、研修に参加しやすくなるよう、日程や地理特性を考慮して開催場所を検討しながらの継続が必要と考える。

2.寄附講座「高知県中山間地域等訪問看護師育成講座」

看護学部 准教授　森下 幸子

開催日時　【前期 訪問看護スタートアップ研修】
- 令和６年５月８日（水）～令和６年７月 24 日（水）（９時 30 分～ 16 時 30 分）
- 開講：令和６年４月 23 日（火）
- 中山間枠（サードコース）、全域枠修了証書授与：令和６年７月 24 日（水）
- 中山間枠（スタンダードコース）修了書授与：令和６年９月 17 日（火）

【後期 訪問看護スタートアップ研修】
- 令和６年 10 月２日（水）～令和６年 12 月 18 日（水）（９時 30 分～ 16 時 30 分）
- 開講：令和６年 10 月１日（火）
- 中山間枠（サードコース）、全域枠修了証書授与：令和６年 12 月 18 日（水）
- 新卒枠、中山間枠（セカンドコース）、全域枠修了書授与：令和７年３月 17 日（月）

開催場所　高知県立大学池キャンパス　共用棟 A301 他

対　　象　訪問看護ステーションに勤務する新任・新卒訪問看護師及び病院等に勤務する看護師

参加者数　17 人：新卒枠１人、中山間枠６人（スタンダードコース３人、セカンド１人、サードコース２人）、全域枠 10 人（通年コース１人）

講師・教職員　【高知県立大学】副学長　池田 光徳、看護学部 特任教授　森下 安子、教授　田井 雅子、教授　竹崎 久美子、准教授　畠山 卓也、准教授　川上 理子、准教授　有田 直子、准教授　田代 真理、准教授　森下 幸子、講師　山中 福子、助教　上村 明咲、特任助教　井上 加奈子　健康栄養学部 助教　隅田 有公子
事務局：三本　雅宣、森田 吹生、福重 彩音、千頭 小百合（計 17 人）
【高知医療センター】山﨑 みどり氏、片岡 薫氏、岡村 かのこ氏（計３人）
【外部】小野 哲郎氏（高知県健康政策部在宅療養推進課）、松本 務氏（あおぞら診療所高知潮江）、有田 佳史氏（高知県歯科医師会）、堤 智子氏（高知学園短期大学非常勤講師）、伊藤 悠人氏（高知県薬剤師会）、小原 弘子氏（高知学園短期大学）、山本 詩帆氏（訪問看護ステーションちかもり）、下元 佳子氏（ナチュラルハートフルケアネットワーク）、氏原 由理氏・仙頭 正輝氏（高知県社会福祉協議会）（計 10 人）
【修了者フォローアップ研修】市川 英明氏（かもだの診療所）、竹崎 陽子氏（高知医療センター）、二宮 園美氏（神戸訪問看護ステーション）、和田 庸平氏（訪問看護ステーションなかやま楽校）、窪内 真巳子氏、文 裕恵氏（あおぞら診療所高知潮江）（計６人）

(1) 事業概要

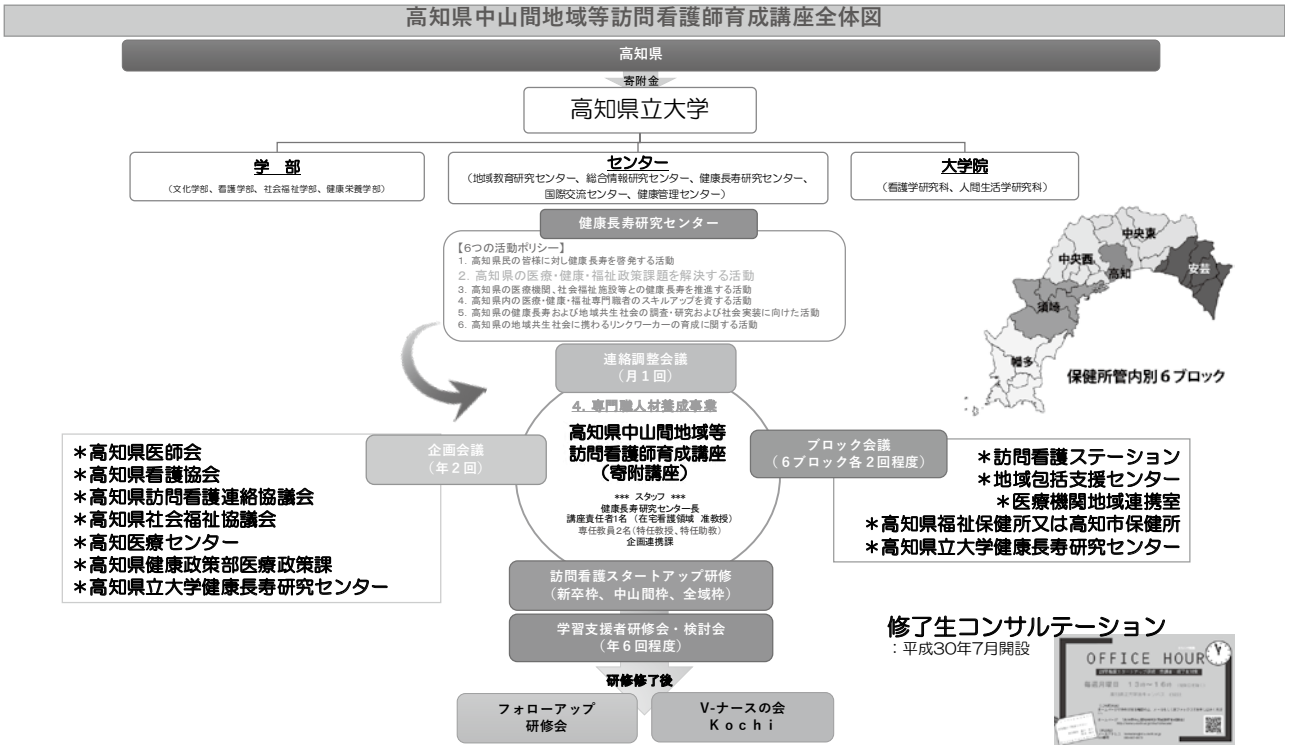
本講座は、平成 27 年度から県内の中山間地域等の訪問看護師の確保・育成・定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、「中山間地域等における新任・新卒訪問看護師育成プログラム」を開発し、大学の教育力・学習環境を活かして、中山間地域等の訪問看護ステーション（以下訪問看護 ST）と協働し、新任・新卒訪問看護師育成に取り組んでいる。事業展開は、高知県医師会、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知医療センター、高知県社会福祉協議会、高知県と連携し、大学内では看護学部、社会福祉学部、健康栄養学部の協力のもと、高知県の地域包括ケアシステムの核となる質の高い

看護実践力をもつ訪問看護師の育成、中山間地域等の訪問看護推進ならびに連携強化を目指している。また、本講座の研修等は中山間地域等からの受講促進を目的に、対面とオンラインを併用し、欠席時のオンデマンド受講に対応できるよう ICT 活用を推進している。

大学内では、寄附講座責任者（在宅看護学准教授)、教員、事務局（企画調整課）の教職員が、連絡調整会議を月に１回開催し、本講座の企画、運営、実施、評価に関わる全ての検討を行った。

主な事業内容は、１）新任・新卒訪問看護師育成プログラム企画・運営・評価、２）学習支援者研修会・検討会の開催、３）実地研修（OJT）における同行訪問・コンサルテーション、４）ICT を活用した継続的な学習支援・学習評価、５）福祉保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議の開催、６）参画団体による企画会議（年２回）の開催、７）修了者フォローアップ研修の開催、８）修了者ネットワークの推進、９）修了者のコンサルテーション、10）協力機関との役割調整・支援体制の構築、11）広報活動等である。

図１：実施体制



⑵　活動成果

１）訪問看護スタートアップ研修の概要

本研修は、本講座の目的を達成するための研修として位置づけており、目的、目標、カリキュラム、研修の特徴、対象者、講師、自己評価、修了要件は以下のとおりである。

①研修目的

新任・新卒訪問看護師が訪問看護に必要な基本的な知識・技術を習得し、在宅（生活の場）における個別性のある看護の提供、地域の多職種連携を促進し、単独で訪問看護ができる実践力を獲得することである。

②研修後の到達目標

医療資源が少ない中山間地域等地域等において医療と生活を統合した看護提供が必要であることを踏まえて、新任・新卒訪問看護師に必要な基本的能力 14 項目（表１）に基づいた学習課題 11 項目（表

2）と研修後の目指す姿（表３）を設定している。

表１：基本的能力

① 基本姿勢	⑥ 自己啓発	⑪ 在宅看護過程
② 倫理	⑦ エンパワメント	⑫ リスクマネジメント
③ コミュニケーション力	⑧ 家族支援	⑬ 情報管理
④ 人間関係・連携能力	⑨ 在宅看護知識・技術	⑭ 組織運営・管理
⑤ 教育指導	⑩ 感染管理	

表２：学習課題

① 社会情勢や訪問看護制度に基づく訪問看護の概要・特性・役割の理解
② 在宅療養者の心身状態の的確なアセスメント方法の理解と習得
③ 訪問看護に必要な基本的な訪問看護技術の習得
④ 訪問看護実践に必要なコミュニケーションスキルの習得
⑤ 在宅療養者と家族の状況に応じた療養生活実現のための看護計画の立案と実施・評価
⑥ 訪問看護の場の特性や療養者・家族の個別性に応じた看護の展開
⑦ 多職種協働や継続看護のためのマネジメントの理解とスキルの習得
⑧ リスクマネジメントの理解と実施
⑨ ステーション組織の一員として、組織へのコミットメントと役割遂行
⑩ 訪問看護師として自分を活かすための自己研鑽
⑪ 訪問看護師としての倫理的感受性の獲得

表３：研修後の目指す姿

１）単独で訪問看護ができる

２）個別的な看護過程の展開と訪問看護計画書・報告書が作成できる

３）24 時間の携帯当番を担うことができる

４）チームの一員としての役割を果たすことができる

③研修カリキュラム

学習課題を習得するために、研修カリキュラム（政策･制度、在宅ケアシステム論、訪問看護概論、ケアマネジメント論、訪問看護展開論・対象論・方法論）は 35 科目、138 時間（23 日）の講義・演習で体系化した。さらに地域の理解を深めるために「生活困窮者の支援（1.5 時間）」の特別講義を開催した。１科目は１コマ（１コマ＝３時間）とし、学習の目的、学習目標（到達目標）、内容をシラバスに明記した（表 4）。シラバスは省略。

表 4：研修カリキュラム

	科目名	時間
在宅看護と保健医療福祉政策	在宅看護に関わる保健医療福祉政策の動向	3
	在宅看護に関わる看護政策の動向	3
在宅ケアシステム論	在宅ケアシステム	3
	ステーションの運営と管理、リスクマネジメント	3
訪問看護概論	在宅療養者を支援する看護概論	3
	在宅療養者を支援する訪問看護の展開	3
訪問看護対象論	訪問看護の対象のとらえ方	3
	在宅の対応困難な家族のケア	3
ケアマネジメント論	ケアマネジメント	6
訪問看護展開論	在宅療養者の看護過程	6
訪問看護方法論	訪問看護師に求められるコミュニケーションスキル	6
	在宅におけるフィジカルアセスメント	6
	在宅療養者の日常生活への支援	6
	スキンケア・ストーマケアが必要な在宅療養者の看護	6
	在宅における薬剤管理	3
	在宅療養者の急変時の対応	3
	呼吸療法の必要な在宅療養者の看護	6
	排泄ケアが必要な在宅療養者の看護	3
	栄養アセスメントと食事の支援	3
	摂食・嚥下の支援が必要な在宅療養者の看護	3
	訪問看護における感染管理	3
	在宅リハビリテーション	6
	輸液管理が必要な在宅療養者の看護	3
	皮膚疾患と褥瘡治療	3
	慢性疾患をもつ在宅療養者の看護	3
	難病疾患をもつ在宅療養者と家族の看護	3
	在宅医療論	6
	医療的ケアを必要とする小児の在宅看護	3
	認知症をもつ人の在宅療養者の看護	3
	精神疾患をもつ在宅療養者の看護	3
	在宅看取りを支えるエンド・オブ・ライフ・ケア	3
	在宅がん緩和ケアの実践	3
	在宅療養者の歯科疾患と口腔ケア	3
	地域と医療の連携	3
	事例展開・特別講義	9

④研修の特徴

本研修は、少人数制、受講者の経験と学習習得状況に応じた個別プログラム、高機能シミュレーターを用いて訪問場面を再現した学習環境、専任教員による継続的なサポート、ICT を活用した研修が大きな特徴である。

具体的には、受講コースは目的に応じて新卒枠、中山間枠（新任スタンダードコース、新任セカンドコース、新任サードコース）、全域枠（通年コース含む）に分かれており、受講者の実践能力に応じてコース選択が可能である。研修は前期、後期の年 2 回開講し、15 人程度の少人数制である。医療資源や介護サービスの少ない中山間地域等の特性を踏まえ、フィジカルアセスメントや急変時対応はシミュレーショントレーニングを行い、グループディスカッションやロールプレイ等の演習、事例展開を多く取り入れ、成人学習、経験学習理論を基盤に、主体的な学びを支援している。また、受講者の経験や習得状況に応じて事前学習、補充学習、深化学習を提案・実施し、大学での学びと訪問看護 ST や病院等職場での実践と振り返りが円滑に行えるよう支援を行なっている。今年度は、遠隔地からの受講、仕事との両立といった受講者の受講ニーズ、感染症の拡大状況に応じて、オンライン・オンデマンド研修を併用した。

⑤研修で用いる主な記録用紙と評価方法

記録用紙は、訪問看護 ST の概要を理解するための「訪問看護ステーションの概要」、在宅看護過程を展開するための「利用者基本情報」、「アセスメントシート」、「訪問看護関連図」、「訪問看護計画書」、「訪問看護手順書」、研修と OJT の進行や評価のための「看護技術チェックリスト」「OJT 評価シート」、「同行訪問記録」、「振り返り用紙」、単独訪問の見極めを行なうための「単独訪問チェックリスト」を用いた。ふり返り用紙は実践（経験）の言語化、客観的な振り返りと論理的な情報や思考の整理につながっている。研修評価方法は、「自己評価目標達成シート」を用いて、35 科目ごとの学習目標（157 項目）の到達度に関する自己評価を「非常に思う」から「まったく思わない」の 5 段階で行い、学びや振り返り、今後への活用性は自由記載としている。自己評価は、学習目標に対する自分自身の到達度を明らかするものであり、適切に評価・記入がされる必要があるため、研修前に記入方法のオリエンテーションをし、受講者が研修の学びから経験を振り返り、これからの自己の課題に気づき主体的に学習に取り組めるよう支援している。

⑥研修の実施体制

研修は講座責任者 1 人（准教授）、講座担当教員 2 人（特任教授 1 人、特任助教 1 人）と事務局（企画調整課）が中心に運営した。研修講師は在宅看護学、慢性期看護学、小児看護学、精神看護学、がん看護学、リハビリテーション、在宅医療、薬剤管理、歯科疾患、栄養管理、地域連携、皮膚創傷、摂食嚥下、感染管理の専門領域から推薦された者で、学内講師は看護学部 9 人、健康栄養学部 1 人、学外講師 12 人であった。職種は医師、歯科医師、歯科衛生士、薬剤師、理学療法士、専門・認定看護師及び看護師であった（表 5）。

表 5：研修講師内訳

所属機関			科目数
高知県立大学	専任教員		13
	看護学部	在宅看護学	4
		小児看護学	1
		総合・がん看護学	1
		精神看護学	2
		慢性看護学	2
		老人看護学	1
		専門基礎医学	1
	社会福祉学部	医療福祉学	0
	健康栄養学部	臨床栄養学	1
包括連携	高知医療センター	摂食・嚥下障害看護認定看護師	1
		感染管理認定看護師	1
		皮膚・排泄ケア認定看護師	1
外部	高知県	健康政策部在宅療養推進課課長	1
	在宅療養支援診療所	医師	1
	高知県歯科医師会	歯科医師・歯科衛生士	2
	高知県薬剤師会	薬剤師	1
	高知県社会福祉協議会	権利擁護センター兼地域・生活支援課	1
	ナチュラルハートフルケアネットワーク	理学療法士	1
	訪問看護ステーションちかもり	在宅看護専門看護師	1
	高知学園短期大学	在宅看護学	1

⑦研修対象者

研修対象者は看護師（准看護師含む）で、中山間枠は高知県内中山間地域等の訪問看護 ST に採用され原則２年未満の者、全域枠は高知県内で訪問看護に従事している者及び訪問看護に従事することを希望する者、病院・施設で入退院支援に従事している者とした。新卒枠は看護師養成機関を卒業もしくは修了し、県内の訪問看護ステーションに採用された者とした（詳細は募集要項等を参照）。

⑧研修スケジュール

中山間枠、全域枠、新卒枠のそれぞれの研修スケジュールを表 6、表 7、表 8 に示す。

表 6：中山間枠スケジュール

	4 月 10 月	5 月 11 月	6 月 12 月	7 月 1 月	8 月 2 月	9 月 3 月
月	先輩と同行訪問			先輩と同行訪問		
火	AM 前週の振り返り PM ケースプレゼンテーション			AM 前週の振り返り・ 事例展開コンサルテーション PM ケースプレゼンテーション		
水	AM 講義・演習 PM 講義・演習			先輩と同行訪問		
木	AM 講義・演習 PM 講義・演習			先輩と同行訪問		
金	先輩と同行訪問			専任教員との同行訪問 振り返りカンファレンスなど		

表 7：全域枠スケジュール

	4 月 10 月	5 月 11 月	6 月 12 月	7 月 1 月	8 月 2 月	9 月 3 月
月						
火				希望者は大学での ケースプレゼンテーション に参加		
水	AM 集中講義・演習 PM 集中講義・演習					
木	AM 集中講義・演習 PM 集中講義・演習					
金						

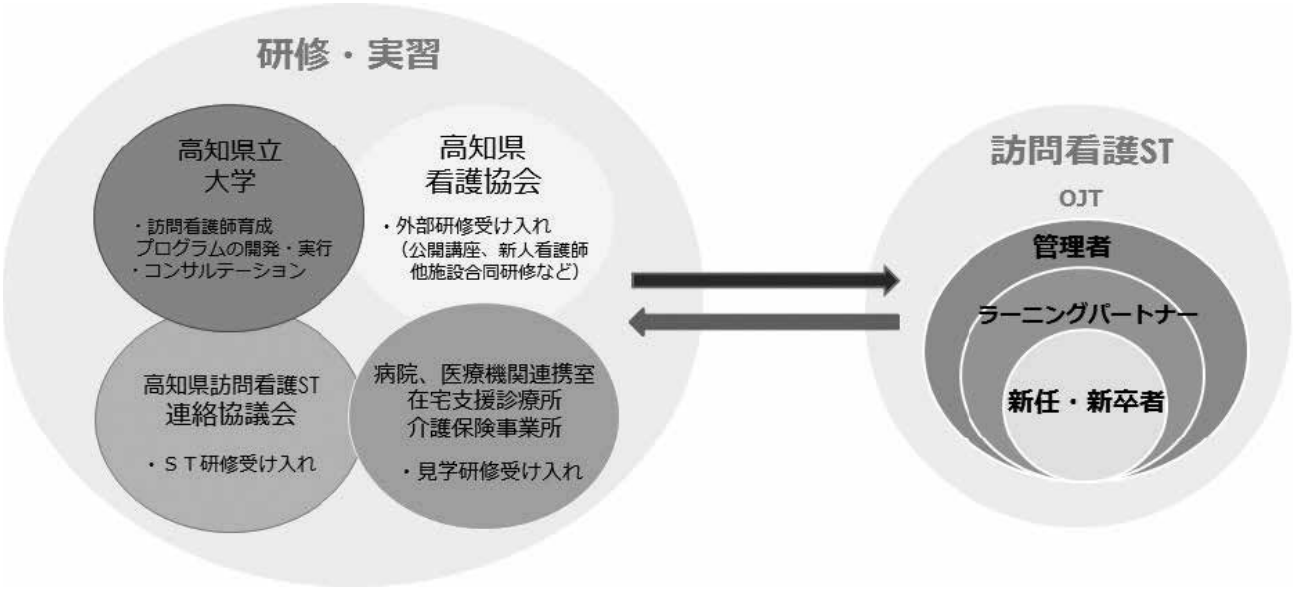
表 8：新卒枠スケジュール

		4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
OJT	訪問	同行訪問 →											
		時間差訪問 →											
						複数名訪問 →							
		単独訪問 →											
	その他	職場内新人研修 等	車運転看護記録等			手順書作成	計画書・報告書作成	単独訪問見極め					
大学	研修	4月開講:講義・演習 週3日 →					週2日 →		週1日 →				
	新卒枠	振り返りカンファレンス(週1回:大学、後半以降は週1回訪問看護ST) →											
		技術チェック		OJT・技術チェック			OJT・技術チェック			OJT・技術チェック			OJT・技術チェック
			地域調べ	フィジカルスキルチェック研修①	フィジカルスキルチェック研修②		新卒経験者との研修			フィジカルアセスメント①	フィジカルアセスメント②		フィジカルアセスメント③
			グループリフレクション 知識・技術の補充学習			ケースプレゼンテーション → 受け持ち事例の展開(4 ～ 6 例) →							
外部	実習	高知医療センター手技向上研修		福祉機器の見学				医療センター病棟研修 10月~14日間			居宅支援事業所、介護老人保健施設地域連携室		

⑨学習支援のしくみ

学習支援は、5 人以下の小規模な訪問看護 ST において、新任・新卒訪問看護師の育成が促進されるよう、各組織のなかで役割を分担し、教員は訪問看護 ST の管理者や学習支援者（ラーニングパートナー）と連携し、講義・演習、OJT（実地研修）を通して支援している。ラーニングパートナーは新任・新卒者の学習を支援する者で、雇用された訪問看護 ST の管理者、先輩、同僚等だけでなく、本講座の教員、実習等を受け入れる外部の訪問看護 ST、病院、在宅支援診療所、居宅介護支援事業所等の学習支援協力者も含んでいる（図 2）。

図 2：学習支援のしくみ



⑩学習支援者の役割と支援方法

訪問看護 ST の管理者及びラーニングパートナーの役割と支援方法は、表 9、10 のとおりである。

表 9：訪問看護 ST 管理者の役割と支援方法

訪問看護ステーション　管理者	
役割 ・ステーション全体で新任看護師を支援できる環境を整備する ・ラーニングパートナーの勤務と学習を両立できる体制を整える ・新任看護師育成に対するモチベーションを維持するためのスタッフの支援を行う ・訪問看護師育成プログラムの計画、実施、評価の統括を行う	**支援方法** ・訪問看護師育成プログラムの月ごとのスケジュールを作成する ・訪問事例の選定と同行訪問・時間差訪問の計画を立てる ・学習課題の解決、進捗状況の把握、スケジュール調整を行う ・プログラムの進捗状況や新任看護師の学びをステーション内で共有する場を設ける ・新任看護師の学習支援と学習環境調整を行う

表 10：ラーニングパートナーの役割と支援方法

訪問看護ステーション　ラーニングパートナー	
役割 ・個々の新任看護師を受け持ち、育成にあたる ・社会人、組織人、先輩訪問看護師として、ロールモデルとなる	**支援方法** ・利用者ごとのケア方法の確認と、同行訪問時の指導、振り返り、記録の確認をする ・経験や技術の習得状況を確認し、支援する ・OJT 評価シートを用いた面接、振り返りカンファレンスを行う ・コミュニケーションをとおしたメンターシップをはかる ・学習支援の進捗状況を他のスタッフと共有する ・新任看護師の学習を促し、学習環境調整を行う

⑪実地研修（OJT）

中山間枠および新卒枠受講者（以下新卒者）は、研修期間中は週 1 日、大学において、訪問看護同行記録や振り返り用紙を記入、個人面談を行い、実践した看護の振り返りから課題を抽出し行動目標の立案を行った。実地研修中には、教員が訪問看護 ST に出向き、新卒者の単独訪問への同行や管理者や先輩看護師とともに週 1 ～ 2 週に 1 回 30 分間程度の振り返りカンファレンスを開催した。

2）学習支援者研修会・検討会の開催

新卒者および中山間枠受講者の所属する訪問看護 ST の管理者や学習支援者を対象に、学習支援者研修会・検討会を 7 回開催した（表 11）。

学習支援者研修会では、新卒・新任者の経験や学びを促進するための考え方や方法等をテーマに取り上げ、訪問看護 ST での学習支援の状況、課題の共有や意見交換を行った。第1回は、新卒訪問看護師育成の考え方と本研修の学習支援について、第2回は経験学習を促進するリフレクション、第3回は学習支援に活かすコーチング・コミュケーションスキル、第4回以降は学習支援の評価、今後の課題や対応、訪問看護 ST での学習支援の課題、OJT の進め方、学習支援体制の工夫等について共有した。看護教育課程でコロナ禍を経験した新卒訪問看護師は領域によっては病棟実習が経験できず、対象理解や主体的な患者とのコミュケーションに自信が持てないといった特徴がみられた。臨床経験をもつ新任訪問看護師はこれまでの医療機関等の実践経験等の違いに戸惑い、生活者や地域の視点をもち対象者やそのご家族を理解し、個別性のある看護、多職種連携などこれまでのやり方や考え方が通用しない、新たな職場への適応にジレンマを抱えることもある。個々の実践経験を活かしながら、在宅看護の考え方や対応方法を再構築していくために、大学で実践を振り返り、ケースプレゼンテーションなどで在宅看護のアセスメントや介入方法の視点などを話あうことが重要であることが共有された。

表 11：学習支援者研修会・検討会の開催日程

	日　時	内　容	参加者数
第1回	令和 6 年 4 月 11 日（木） 15 時 25 分～ 16 時 35 分 対面	①高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金について ②研修：新卒・新任訪問看護師の育成について ③訪問看護スタートアップ研修の学習支援のしくみ、学習支援体制と大学の役割、訪問看護ステーションの役割と準備について ④訪問看護スタートアップ研修を活用した新卒訪問看護師育成の実際 ⑤意見交換	学習支援者　3 人 新　卒　者　1 人 教　　員　2 人 高　知　県　1 人
第2回	①令和 6 年 6 月 5 日（水） 18 時～ 19 時 30 分 対面とオンラインによる ハイブリット開催	①高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金について ②研修：経験学習を促進するリフレクション ③現場と大学における新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者　5 人 教　　員　2 人 高　知　県　1 人 事　務　局　1 人
第3回	令和 6 年 8 月 5 日（月） 18 時～ 19 時 オンライン研修	①研修：学習支援に活かすコーチング ②研修 3 ～ 4 か月後の状況―新卒・新任者育成の課題や対応 ③ 8 月以降の新任訪問看護師育成の OJT の進め方	学習支援者　2 人 教　　員　2 人
	令和 6 年 8 月 8 日（木） 18 時～ 19 時 オンライン研修		学習支援者　2 人 教　　員　2 人 高　知　県　1 人
第4回	令和 6 年 9 月 17 日（火） 18 時～ 19 時 20 分 対面とオンラインによる ハイブリット開催	①研修 6 ヶ月目の評価 ②高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金について ③現場と大学の協働による新卒・新任訪問看護育成の課題や対応	学習支援者　4 人 教　　員　3 人 高　知　県　1 人
第5回	令和 6 年 11 月 25 日（月） 16 時～ 17 時 対面	①高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金について ②研修：経験学習を促進するリフレクション ③現場での訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者　1 人 教　　員　2 人 高　知　県　1 人
	令和 6 年 12 月 13 日（金） 13 時 35 分～ 14 時 35 分 対面式	①新卒研修 9 か月の状況―学習支援と評価、課題や対応 ②現場と大学における新任・新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者　2 人 教　　員　2 人
第6回	令和 7 年 1 月 16 日（木） 11 時 5 分～ 11 時 55 分 対面	①新卒研修 10 か月の状況―学習支援と評価、課題や対応 ②現場と大学における新任・新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者　2 人 新　卒　者　1 人 教　　員　2 人
第7回	令和 7 年 3 月予定	①大学での学習支援のまとめ（実績・評価・課題） ②現場と大学における新任・新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	未定

3）修了者フォローアップ研修

研修内容はフットケア、糖尿病とセルフケア支援、ポータブルエコー、中山間地域の訪問看護、ACP と看取り支援、エンゼルケア、複雑なニーズをもつ療養者と家族支援をテーマに、訪問看護管理者、在宅看護・慢性期看護専門看護師、皮膚排泄ケア・緩和ケア特定認定看護師、在宅療養支援診療所医師など経験豊富な講師から実践的な講義・演習を受け、アンケートの満足度も高く今後に活かすための学びに繋がってい

た（表 12)。新卒 1 年目には新卒フィジカルアセスメントフォローアップ研修を 4 回開催した（表 13)。

表 12：新卒 2 年目修了者フォローアップ研修の開催日程

日時・場所	研修方法	研修テーマ・内容	対　象	実績
令和 6 年 5 月 11 日（土） 13 時 30 分～ 15 時 30 分 看護学部棟 C 112	対面研修	「高めよう在宅看護技術～フットケア～（演習)」 講師：あおぞら診療所高知潮江　文 裕恵氏	新卒・中山間修了者	12 人
令和 6 年 9 月 7 日（土） 13 時 30 分～ 15 時 30 分	オンライン研修	「糖尿病をもつ在宅療養者のセルフケア支援」 講師：高知医療センター 慢性疾患看護専門看護師　竹崎 陽子氏	新卒 2 年目 修了生	10 人
令和 6 年 10 月 19 日 (土) 13 時 30 分～ 16 時 看護学部棟 C112	対面研修	「使ってみようポータブルエコー 訪問看護師ができるアセスメント(演習)」 講師：かもだの診療所 院長　市川 英明氏	新卒 2 年目 修了生	6 人
令和 6 年 11 月 30 日 (土) 13 時 30 分～ 15 時 30 分	オンライン研修	「中山間地域における訪問看護」 講師：訪問看護ステーションなかやま楽校 所長　和田 庸平氏	新卒 2 年目 修了生	14 人
令和 7 年 2 月 8 日（土） 13 時 30 分～ 16 時 30 分	対面研修	「在宅における ACP と看取り支援、 エンゼルケア（演習)」 講師：緩和ケア特定認定看護師 窪内 真巳子氏	新卒 2 年目 修了生	12 人
令和 7 年 3 月 1 日（土） 13 時 30 分～ 15 時 30 分	オンライン研修	「複雑なニーズをもつ在宅療養者と家族の支援」 講師：公益社団法人兵庫看護協会 神戸訪問看護ステーション 在宅看護専門看護師　二宮 園美氏	新卒 2 年目 修了生	7 人

表 13：新卒 1 年目フィジカルアセスメントフォローアップ研修の開催日程

	日　時	内　容	参加者数
第 1 回	令和 6 年 7 月 2 日（火） 14 時～ 15 時 30 分 看護棟 C112	新卒フィジカルアセスメントスキルチェック① ・内容：長期寝たきり療養者のバイタル測定 ①療養者・家族へ説明、配慮ができる ②正しく体温・脈拍・呼吸・血圧測定が出来る ③全身の観察ができる	1 人
第 2 回	令和 6 年 10 月 15 日(火) 13 時 30 分～ 15 時 看護棟 C110・C209	新卒フィジカルアセスメント① ・内容：便秘と脱水状態にある療養者への対応 ①アセスメントに必要な情報を収集できる ②収集した情報を用いてアセスメントができる ③アセスメント結果から必要な対応を考えることができる	2 人
第 3 回	令和 6 年 12 月 17 日(火) 13 時 30 分～ 15 時 看護棟 C110	新卒フィジカルアセスメント② ・内容：COPD をもつ療養者への対応 ①アセスメントに必要な情報を収集できる ②収集した情報を用いてアセスメントができる ③アセスメント結果から必要な対応を考えることができる	3 人
第 4 回	令和7年3月11日（火） 13 時 30 分～ 15 時	新卒フィジカルアセスメント③ ・内容：がん終末期の療養者への対応	未定

4）修了者ネットワークの推進

修了後は、年度や地域を超えて「V- ナースの会 Kochi」を作り、交流会や研修会を開催していたが、

2020 年度以降は修了者フォローアップ研修に集約して行った。

5）修了者対象のコンサルテーション

原則、毎週月曜の午後を修了者対象のオフィスアワーとし、適宜、電話、メール、面談等で相談対応を行った。相談件数は5件で、内容は就職に関するキャリア相談、研究支援などであった。

6）福祉保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議の開催

中山間地域における訪問看護推進ブロック会議は、高幡（須崎）、中央西福祉保健所管内の2ヶ所で開催し、保健所管内における各市町村の在宅医療・訪問看護の現状と課題、訪問看護師育成に関する課題や期待について情報共有や意見交換を行った（表 14）。

現状と課題では、高齢化や深刻な人材不足により看護師だけでなく、ケアマネジャーや訪問介護員も減少しており、職種を超えた連携が必要不可欠となっている。かかりつけ医の高齢化に伴い、夜間休日等の対応における訪問看護師の負担が増加している。遠方でも精神科訪問は地域外からの訪問が増加した一方で、単独世帯や老々介護、看取りに対応できる医師の不在等により在宅での介護や看取りが減少し、施設入所者が増加している。自宅の老朽化等に伴い、住み替えを余儀なくされるケースもある。外来受診者の減少により在宅に出向く病院（医師）が増加、医療機関と訪問看護ステーションは ICT を活用し情報共有している。

訪問看護師育成への期待や意見では、中山間の特徴を知り、そこで生活している人の暮らしを知ること、観察力や判断力、コミュニケーション力が培われるような教育、様々な生き方を受け入れる柔軟力が必要、（ICT が発達しているからこそ対面で）コミュニケーションを直接とること、介護職・福祉職等他分野との交流により多角的な視点をもつことなどのご意見をいただいた。

また、訪問看護の人材確保のためには、ICT の活用、ストレスや不安をフォローするための体制づくり、ワークライフバランスのとれた体制作り、セカンドキャリア看護師の育成が必要、管理者へのサポートも必要である等といった意見が出された。

教育・研修方法については、中山間地域はオンラインだけでなくオンデマンドも受講しやすいという意見をいただいた。

表 14：訪問看護推進ブロック会議の開催日程

ブロック	日時・場所	内　容	参加者数
高幡	令和 6 年 10 月 18 日（金） 14 時 30 分～ 16 時 30 分 須崎福祉保健所	(1) 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 (2) 須崎福祉保健所管内の在宅医療、訪問看護の現状と課題について（報告と確認） (3) 新任・新卒訪問看護師教育について	委　員10人 教　員 2 人 事務局 1 人
中央西	令和 6 年 12 月 6 日（金） 14 時 30 分～ 16 時 30 分 中央西福祉保健所	(1) 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 (2) 中央西福祉保健所管内の在宅医療、訪問看護の現状と課題について（報告と確認） (3) 新任・新卒訪問看護師教育について	委　員14人 教　員 2 人 事務局 1 人

7）参画団体による企画会議の開催

中山間地域等訪問看護師育成プログラムの運用にあたり、高知県医師会、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知医療センター、高知県社会福祉協議会、高知県の関係協力団体による、高知県中山間地域等訪問看護師育成講座企画会議を年 2 回開催した（表 15）。当講座の事業報告、新任・新卒訪問看護師育成の課題や対策、新卒訪問看護師手技向上研修、修了者フォローアップ研修、中堅期訪問看護師研

修、新任訪問看護師短期研修プログラム、次年度事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成について意見交換が行われ、次の課題について方策を検討した。

①研修受講者の確保について

令和６年度も新卒枠、中山間枠の一定数の確保ができ、全域枠では医療機関の連携室や病棟からの受講もあった。しかし、研修枠やコースの受講状況を分析し、中山間地域以外の訪問看護 ST からの受講者数が少なく、新規開設した訪問看護 ST からの申し込みがないことから、高知市、南国市周辺の訪問看護 ST や新規開設 ST からの受講を促進するために、全域枠の通年枠は翌年受講も可能にする、オンライン受講科目を設けるなど受講のしやすさ、応募のハードルを下げていく工夫を検討した。

②新卒・新任訪問看護師の育成について

新卒訪問看護師の１年目プログラムについては、今後も大学の研修、振り返りと訪問看護 ST での OJT と振り返り、定期的な学習評価を行いながら継続する。２年目については看護技術の向上、病棟での看護を学ぶ研修を高知医療センターの協力を得て実施していく。また、訪問看護 ST の教育力向上については大学と ST が連携を図り、学習支援者研修会・検討会で新任・新卒者育成の課題と対応を検討し支援を継続する。

③中堅期訪問看護師研修への取り組み

高知県の要請を受け、令和２年度より中堅期の訪問看護師を対象に訪問看護各論を前期・後期で公開講座とし今年度は 12 科目へと増やした。令和６年度は受講延べ人数 22 人（実人数９人）となり、看護職経験は３年７ヶ月～ 32 年６ヶ月年（平均 15.9 年）、訪問看護経験は１ヶ月～ 10 年（平均 2.8 年）で、訪問看護経験２年以内の者が 44％を占めていた。受講動機は、「訪問看護に関する研修を受講したことがないから」や「即戦力として現場に立つための知識不足を感じたから」、「精神疾患を持つ方の在宅での看護について学びたい」等であった。

社会の動向を踏まえた訪問看護の位置づけ、訪問看護の役割・機能を学び、幅広い疾患・年齢の利用者へのケアが出来るように体系的に学べるような支援が必要と考えられるが、新任訪問看護師が所属する ST における看護師常勤換算人数は 4.9 人であり、小規模 ST では長期の研修の受講が困難な現状がある。

④新任訪問看護師短期研修プログラムの取り組み

今年度より、主に小規模訪問看護事業所を対象とし 19 科目を前期･後期で公開講座として開始した。受講延べ人数 48 人（実人数６人）で看護職経験は５ヶ月～ 21 年７ヶ月年（平均 14.34 年）、訪問看護経験は０ヶ月～１年８ヶ月（平均４ヶ月）であった。受講動機は、「訪問看護が初めてのため」や「訪問看護で勤務するにあたり、必要な知識を学びたい」、「訪問看護についてさらに知識を深めようと思ったため」等であった。

中堅期訪問看護研修は訪問看護経験２年以上を要件として募集したが、今年度も訪問看護経験２年未満が 44％を占めていた。そのため来年度は中堅期訪問看護研修と新任短期研修プログラムを一本化し、履修できる科目を見直す予定である。

⑤各関係団体の役割の確認（表 16）

令和２年度以降、看護学生と新卒訪問看護師の雇用を希望する訪問看護 ST とのマッチング支援について、看護学生のガイダンスは高知県と高知県立大学が担い、新卒訪問看護師の情報収集は高知県が行い、訪問看護 ST の新卒者の雇用希望調査、インターンシップ受け入れ、看護学生と新卒訪問看護師の雇用する訪問看護 ST とのマッチング支援は訪問看護連絡協議会が実施している。高知県看護協会、高知県医師会、高知県社会福祉協議会、高知医療センターの役割についても継続することを確認した。

表 15：企画会議の開催日程

	日　時	場　所	参加者数
第 1 回	令和 6 年 9 月 18 日（水） 18 時 30 分～ 20 時 30 分	高知県立大学池キャンパス　本部・健康栄養学部棟 A219 対面開催	10 人
第 2 回	令和 7 年 2 月 10 日（月） 19 時～ 20 時 45 分	高知県立大学池キャンパス　本部・健康栄養学部棟 A219 対面開催	10 人

表 16：関係機関の役割

組織・機関	役　割
高知県医師会	1）新卒訪問看護師の在宅療養支援診療所、地域連携実習の受け入れ 2）訪問看護師育成の教育プログラムへの助言
高知県看護協会	1）看護協会主催の新人、継続研修の参加を促し、新任・新卒者雇用訪問看護 ST と共に訪問看護師育成を支援 2）研修会等のあらゆる機会等を通じて訪問看護育成に関する啓発の実施 3）ナースバンク登録看護師にも訪問看護 ST 選択の可能性の確認や相談、研修の案内等の実施 4）看護学生のインターンシップの受け入れ 5）新任・新卒訪問看護師の就職受け入れを希望する訪問看護 ST のナースバンクへの求人登録を支援し、すでに出ている求職票のなかからマッチングへの支援を実施する
高知県訪問看護総合支援センター	1）新任・新卒訪問看護師確保のための看護教育機関等への啓発や広報活動の実施（病院説明会、就職ガイダンス、パンフレット配布など） 2）新任・新卒訪問看護師の就職受入れ可能な訪問看護ステーションに関する情報の集約と情報提供（HP 掲載） 3）高知県が把握した、訪問看護ステーションに就職を希望する看護学生のニーズを受けて、受入れ可能な訪問看護ステーションの情報提供とマッチング支援を実施 4）看護学生のインターンシップの受入れ窓口 (高知県訪問看護連絡協議会) 5）希望に応じて他の訪問看護ステーションからの研修受入れ
(訪問看護 ST)	1）新任、新卒看護師を訪問看護 ST に雇用し、中山間地域等訪問看護師育成補助金事業、訪問看護スタートアップ研修参加の検討 2）訪問看護師育成のための学習環境を整備し、訪問看護 ST も学習支援者として OJT を推進 3）訪問看護師育成プログラムの評価、検討
高知県社会福祉協議会	1）中山間地域での在宅医療、訪問看護推進のための助言 2）訪問看護師育成の教育プログラムへの助言 3）研修への講師派遣協力
高知医療センター	1）訪問看護スタートアップ研修へ講師派遣等の協力・支援 2）新卒等に必要な研修の受け入れ（退院支援など）協力 3）訪問看護師育成の教育プログラムへの助言 4）フォローアップ研修への協力・支援（2020 年度追加）
高知県	1）訪問看護推進に関する広報（パンフレット配布や県広報媒体への掲載等） 2）高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金事業の実施 3）看護教育機関への訪問看護師育成・確保に関する事業説明の実施、新卒での訪問看護従事希望者の情報収集
高知県立大学	1）新任・新卒訪問看護師育成のための訪問看護師育成プログラムの開発と運用、評価及び修正 2）訪問看護 ST での OJT 促進のための学習支援者研修会を開催、6 ヶ月～ 1 年間の継続的な学習支援体制の構築 3）新卒訪問看護師確保にむけた必要な就職促進の支援（看護学部）

8）その他

・パンフレット・チラシの作成と広報

令和７年度に向けて、①高知県中山間地域等訪問看護師育成講座パンフレット、②訪問看護スタートアップ研修募集要項、③新卒訪問看護師パンフレット、④Ｉターン・Ｕターンパンフレット、⑤病院向けの病院・施設で働く看護師募集チラシを更新し、高知県内の病院・診療所、訪問看護 ST、福祉保健所、地域包括支援センター、地方公共団体、看護学校に配布した。

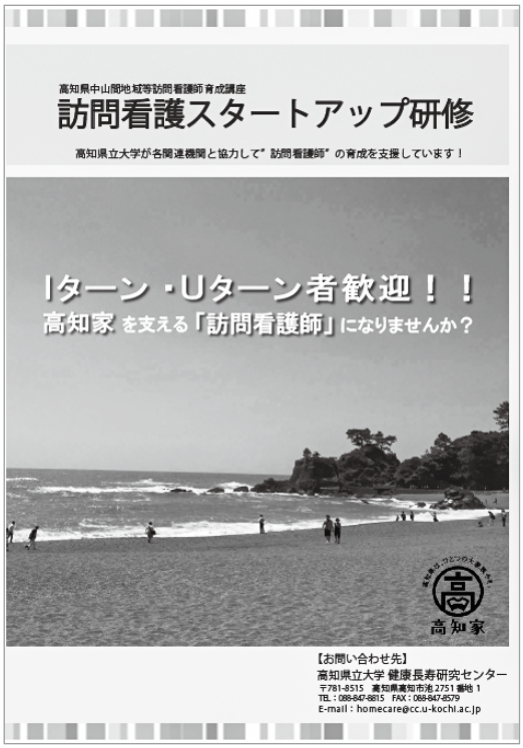
また、県からラジオ、テレビを通じた広報行動を行った。

①

②

③

④



⑤

⑶ 活動成果

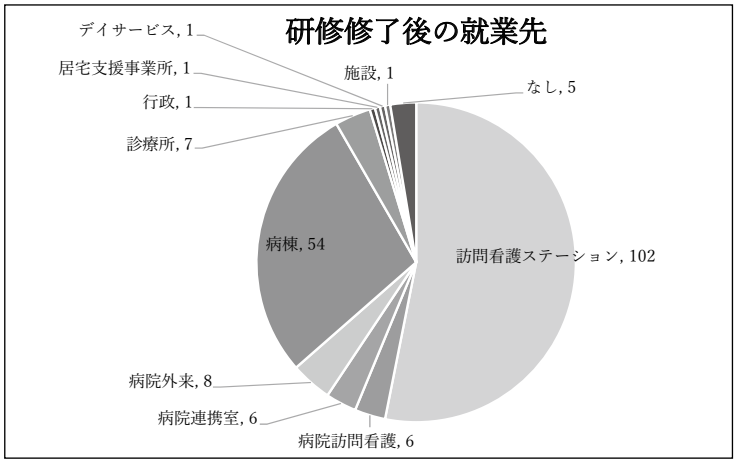
1）受講者数及び内訳

令和６年度の研修受講者は、前期、後期合わせて、新卒枠１人、中山間枠６人（スタンダード３人、セカンド１人､サード２人)､全域枠 10 人の合計 18 人であった。平成 27 年からの訪問看護スタートアップ研修受講者数は 193 人となり、新卒枠 18 人（訪問看護 ST12 事業所、うち１名辞退)、中山間枠 48 人（訪問看護 ST18 事業所)、全域枠 127 人（訪問看護 ST21 事業所、病院・診療所等 28 施設）で、中山間地域からの受講は 70 人となった（表 17)。受講者の年齢は 20 ～ 69 歳（平均 39.3 歳)、男性 12 人、女性 181 人であった。看護師経験年数は０～ 38 年（平均 13.9 年)、訪問看護師経験月数は０～ 78 ヶ月（平均３年２ヶ月）であった。受講開始時の所属先は訪問看護 ST103 人、病院・診療所・行政等 84 人、所属なし６人であった。所属先等の地域（保健所管内別）は安芸 13 人、中央東 47 人、高知市 75 人、中央西 24 人、須崎 11 人、幡多 23 人であった。また、研修修了後の就業調査では訪問看護 ST の就業が継続されていた。

表 17：受講者の内訳

所属	新卒枠（12 ヶ月）		中山間枠（6 ヶ月）		全域枠（3 ヶ月）				合計
所属	訪問看護 ST		訪問看護 ST		訪問看護 ST		病院・診療書他		
地域	中山間地域	以外	中山間地域	以外	中山間地域	以外	中山間地域	以外	
H27			5	1	1	1	2	1	11
H28 前期	0	1	3	2	0	1	0	4	25
H28 後期			3	0	1	2	3	5	
H29 前期	2	4	1	0	0	0	3	5	28
H29 後期			0	0	2	4	2	5	
H30 前期	1	2	0	0	1（通年）	3	0	5(通年1)	21
H30 後期			0	0	3	2	0	4	
R 1 前期	1	1	2	2	0	0	1（通年）	2	20
R 1 後期			2	2（サード）	1	1	1	4	
R 2 前期	1	1	2	0	0	1	0	4(通年2)	9
R 2 後期			1	1	0	0	1	3	6
R 3 前期	0	0	2（セカンド・サード）	2	0	1	0	4(通年1)	9
R 3 後期			0	0	0	3	0	5	8
R4 前期	0	2	0	2（サード）	0	1	0	4(通年1)	8
R4 後期			1（スタンダード）	1（スタンダード）	1	2	3	4	12
R5 前期	0	1	1（スタンダード）	3（スタンダード・サード）	0	2	0	5	12
R5 後期			2（サード）	1（サード）	0	0	0	3	6
R6 前期	0	1	2（スタンダード）	2（スタンダード・サード）	1	1	0	3(通年1)	10
R6 後期			1（セカンド）	2（サード）※1名コース変更あり	0	1	1	3	7
合計	5	13	28	20	11	26	16	74	193

図 3：新卒者の修了後の就業状況



2）中山間地域等訪問看護師育成プログラムの評価

令和 6 年度受講者 17 人の訪問看護スタートアップ研修 35 科目 157 項目の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの 5 段階で評価した自己評価点の平均は 3.9 ± 0.7 であった。また、新卒枠 1 人、中山間枠スタンダードコース 3 人、セカンドコース 1 名の修了時の目指す姿及び学習課題の自己評価は、ほぼ全員が「かなりできた・まあまあできた」と捉えており、大学での研修や振り返り、現場での OJT を通して単独訪問を実践し、訪問看護 ST の一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。

平成 27 年～令和 6 年度の 10 年間のプログラム運用において、新卒・新任訪問看護師と訪問看護 ST が捉える学びや成長・成果と、学習支援の課題では新卒者の課題と学習支援の課題について明らかとなった。学びや成長には、日々の訪問看護経験と振り返りを通して、気づき、判断する、実践し評価することを繰り返しながら【訪問看護師としての実践能力を獲得】し、定期的な知識やスキルの評価を行い、【自分なりにできるという自信】を得ていた。徐々に訪問件数が増え、知識やスキル不足、時間管理、ヒヤリハットなどを経験し、困難さにぶつかり、自分で模索し先輩や仲間に支えられながら【困難を乗り越える力を獲得】し、受け持ち事例からは生活者視点と家族支援を理解し、訪問看護の役割は何かといった【訪問看護師としての看護観の育み】や【目標とする訪問看護師像の確立】、中山間地域で生活することを支えるための【地域連携の理解と関係構築】につながっていた。特に、新卒訪問看護師の学びや成長は、訪問看護 ST 全体の学びの波及と看護実践の拡大につながっていた。学習支援の課題では、新卒者は教育と実践の違い、看護技術習得の焦り、先輩の指導や方法の違いへの戸惑い、コミュニケーションの課題、自己評価と他者評価が一致せず、自己の目標を見失いそうになるなど様々な課題を抱えていた。臨床経験のある新任者も同様に、コミュ二ケーション、臨床判断、個別的な看護展開などこれまでのやり方や考え方が通用しないなど、経験や価値の再構築し、新たな職場への適応を支援する必要性があることがわかった（表 18)。事業所の管理者や学習支援者も、新任･新卒者を理解し、コミュニケーションをとり、一人ひとりをどう一人前に育成していくのか、時には自分の看護観や臨床経験を見直しながら育成にあたり、管理者は利用者・ご家族、関係者への説明、シフトの調整、安全の確保、人件費の負担などもあることがわかった。これらの課題に対して、受講者の特性や成長に合わせた目標設定と対応、訪問看護 ST の教育体制への支援、新卒者や修了者のフォローアップ研修、大学でのリフレクションや自己学習の支援の強化、人材を育てる地域づくりへの支援に取り組む予定である。

表 18：学習支援の課題

事業所の運営管理上の課題	・勤務調整の困難とスタッフの負担増大 ・労務管理上の問題への対応 ・時間外勤務の発生 ・効率的な訪問スケジュールと同行訪問の調整 ・情報共有のしづらさ ・事業所内の雰囲気の変化 ・利用者との人間関係の変化 ・安全上の配慮（ケア・交通・事故） ・新卒育成への責任感（スタッフとしての受け入れ）
受講者が抱く困難	・教育と看護実践との違い（主体的な学びへの戸惑い） ・知識技術習得の焦り ・自己評価と他者評価の不一致 ・研修目的と受講者が求めるもののズレ ・他者と比較することによる自信の低下 ・仕事と研修の両立・精神や体調面の不安 ・先輩との考え方の違い、コミュニケーションの難しさ ・ステーションでの居場所、役割の獲得
学習支援体制の課題	・教育支援への期待と実際の不一致 （実践現場のスピード感、期待するスキル獲得とのずれ他） ・受講者の学習到達度、学習課題に関する情報共有不足 ・訪問看護 ST 管理者や学習支援者との学習目標、方法の合意形成

3）今後の課題と対応

①新任・新卒訪問看護師及び研修受講者の確保

令和 6 年度も新卒枠、中山間枠の一定数の確保ができ、全域枠では医療機関の地域連携室、病棟から応募があり、全体では訪問看護 ST、医療機関から合計 17 名の受講があった。

受講者からは、「在宅看護の奥深さや連携の重要性などを知ることができた。」や「“ その人らしい生活を支える ” とは何かについて考えることがでた」「在宅医療について考え、『住み慣れた地域で安心して生活できる。人生の最期を迎える』ことを支えるための訪問看護の役割やシステム、訪問看護のあるべき姿など多くのことを学ぶことができました。」「自分自身の看護を振り返り新しい気づきにつなげることができた。」「研修での学びを退院支援や多職種カンファレンスで生かしていきたい」「看護のブランクがあり不安があったが同期の支えもあり、あっという間の研修期間だった」との感想が聞かれている。今後も新任・新卒訪問看護師と病院看護師等がともに学びあうことで、訪問看護実践力の向上や入退院支援や地域連携に活かすことができるプログラムとして PR していきたい。

②プログラムの自己評価、振り返り、学習支援からのカリキュラム評価

平成 27 年度以降、研修の学習目標に対する目標達成評価シートを統計的分析、振り返りや学習支援内容の質的分析を実施し、平成 30 年度から研修内容を 35 科目、138 時間に変更した。令和 2 年度からは地域共生社会へ向けた施策の流れから全体のカリキュラムを見直し、科目数及び時間数は据え置き、訪問看護方法論により地域の理解を促すために「生活困窮者への支援」を特別講義として開講している。目標達成自己評価シートの分析からは自己評価ではあるが学習目標の到達はできている。今後もオンラインを併用した研修を継続し、訪問看護の臨床判断や実践力獲得のための教授方法や内容を検討していく予定である。

③新卒訪問看護師及び修了者のフォローアップ研修の検討

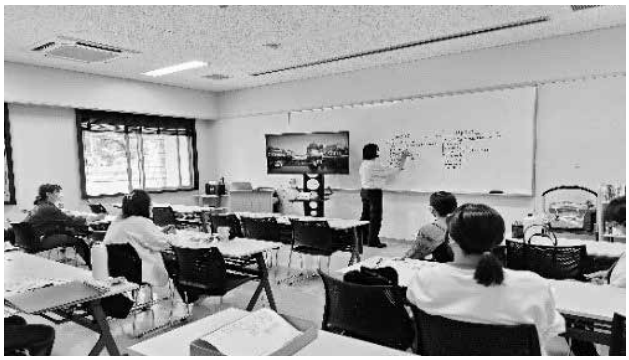
新卒１年目は、「新卒訪問看護師のキャリア」をテーマに先輩や仲間と交流を持つ機会をつくり、定期的なフィジカルアセスメントフォローアップ研修を継続し、コミュニケーション、フィジカルアセスメントのスキル、臨床判断と実践力を高める研修を継続する。新卒２年目は病院機能の理解、看護技術習得を目的に、高知医療センターの病棟研修を検討していく予定である。

修了者フォローアップ研修の参加数は延べ 61 人（実人数 47 人）と多くの参加があった。訪問看護ラダー体系にそった継続研修、最新実践研修などテーマ、講師を検討し、オンラインを併用し、訪問看護キャリアを支援する学びの体系化を取り組んでいきたい。令和４年度開設した公式ラインの登録者数も順調に伸びており、修了者への研修案内や申し込みの簡素化に取り組んでおり継続していく予定である。

（4）研修の様子

①開講式の様子

②修了式の様子



③講義の様子

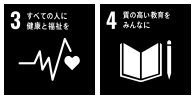
④演習（フィジカルアセスメント）

⑤新卒フィジカルアセスメント

⑥修了者フォローアップ研修

3. 入退院支援事業

看護学部 特任教授　森下 安子



開催日時　通年
開催場所　高知県内全域
対　　象　高知県内の病院、施設、福祉保健所、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所等
参加者数　831 人
教 職 員　健康長寿研究センター長　久保田 聰美／看護学部 特任教授　森下 安子、助教
竹中 英利子、助教　源田 美香、特任助手　横川 奈知／社会福祉学部 教授　西内 章、
助教　乾 由美
事務局　三本 雅宣、谷 映美、中澤 雄也、福重 彩音、松下 哲子、千頭 小百合（計 13 人）
外部講師　伊藤 悠人氏（管理薬剤師）、阿部 恭宜氏（薬剤師）、下元 佳子氏（理学療法士）、
井上 健朗氏（東京通信大学 人間福祉学部 人間福祉学科 准教授）、廣内 智子氏
（高知学園大学 健康科学部 管理栄養学科 准教授）（計５人）
学生スタッフ　看護研究科 大学院生（計４人）

⑴　事業概要

入退院支援事業は、中央西福祉保健所の依頼を受け平成 22 年度から地域病院協働型入退院システム構築に取り組んだ実績から発展し、平成 28 年度からは高知県の基金事業として位置づけられている事業である。

本事業は平成 28 年度に本学が策定した「地域・病院・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン（以下、ガイドライン）」（ガイドラインは改定、洗練化を行っており、現在は Ver. 3 である）の普及・啓発を推進するとともに、ガイドラインを活用して病院の入退院支援体制の構築及び、入退院支援・退院調整における院内外の横断的な調整役を担う「相談支援事業」や地域のコーディネーターとなる人材育成や病院内外が協働する入退院支援を推進する管理者、看護管理者育成などの「研修事業」、および自施設で入退院支援体制の改善に取り組むことを目指す「モニタリング事業」の３事業を展開している。

また、今年度は昨年度と同様に高知市内への波及・定着化及び今まで相談支援事業に関わった医療機関等への活動の発展・拡充に向けた事業展開や支援を行った。

相談支援事業では事業参加病院については、地域包括ケア病棟を持つ近森オルソリハビリテーション病院を選定した。事業参加病院とその地域で運営メンバー会議を実施し、各病院と地域の退院支援の「入退院支援における優先課題」を抽出し、「目指す姿」を決定、病院機能や地域特性を踏まえた退院支援の仕組みづくりを目指し、支援を行った。来年度に向けて、抽出した優先課題解決に向けて具体的な入退院支援の流れを入れた「入退院支援可視化シート（以下、可視化シート）」を病院と地域で共に検討・作成する。今後、その作成した可視化シートに基づき事例展開を重ね、可視化シートの定着・洗練化を行っていく。

また、令和５年度の事業参加病院である高知病院と高知西病院においては、可視化シートを活用して退院支援を行う中で、病院・地域が共に考える課題の抽出ができ、可視化シートの洗練化を行った。

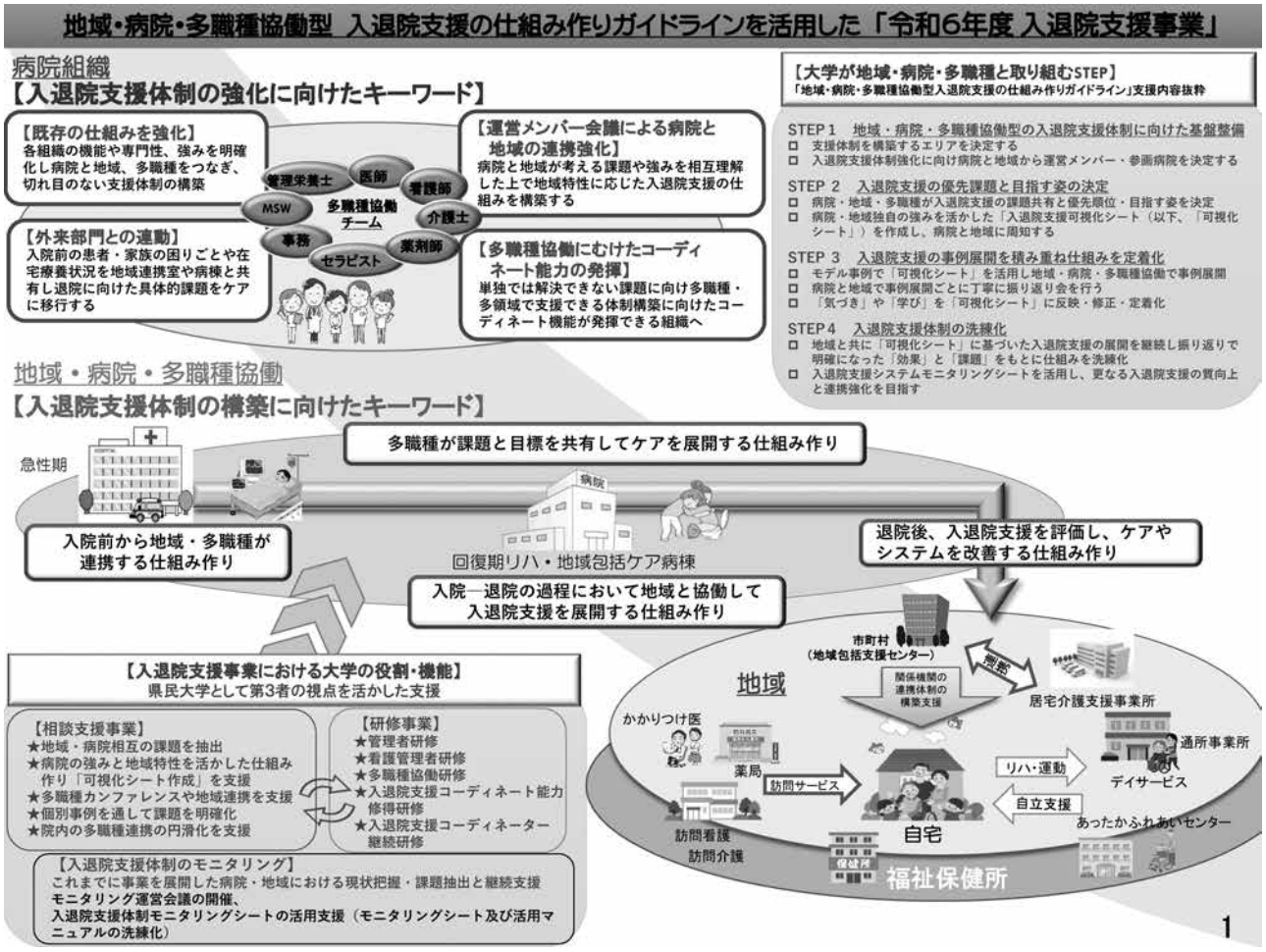
研修事業では、感染予防の対策を十分とり、対面にて【管理者研修】【看護管理者研修】【多職種協働研修（全５回）】【入退院支援コーディネート能力修得研修（全３回）】を実施、四万十市と高知市の２会場で【入退院支援コーディネーター継続研修】を実施した。

また、本年度までに入退院支援事業に参加した事業参加病院や地域が事業終了後の入退院支援推進に向けた実践活動を共有する事で、更なる発展と、今後の課題解決に繋げることを目的とした大交流会を継続して開催した。さらに、各施設の現状を大学として客観的に評価し、フィードバックするモニタリング運営会議を 12 の医療機関で開催し、課題解決やさらなる発展に向け、支援を行った。

さらに、今年度は、地域からの情報を各専門職の支援計画に有効に活用する視点について示す「入退院支援マニュアル」を作成し、「地域・病院・多職種協働型入退院支援の仕組み作りガイドライン」、「入退院支援システムモニタリングシート活用マニュアル」の３種類のガイドライン、マニュアルを整備した。

⑵ 活動成果

≪全体図≫



1．研修事業

【管理者研修】開催場所：高知城ホール

内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
・高知県の挨拶 （高知県健康政策部在宅療養推進課 課長補佐　市村 岳二氏） ・入退院支援の推進における病院や病棟改革に向けた管理者の役割機能について ・①高知県地域医療構想に基づく入退院支援事業の位置づけ （高知県健康政策部在宅療養推進課 チーフ　大崎 亮彦氏） ②入退院支援事業の概要と年間スケジュールについて （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ③入退院支援における管理者の役割について （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） ・事業参加病院から「入退院支援について」 ①高知医療センターも継続的に入退院支援の強化に取り組んでいます （ゲストスピーカー：高知医療センター 副院長兼地域医療センター長 令和４年度事業参加病院） ②組織的に取り組む多職種連携入退院支援 （ゲストスピーカー：いずみの病院 看護部長　令和3年度事業参加病院） ・グループワーク	令和６年６月 10 日（月） 10 時～ 16 時 30 分	33 人

≪到達目標≫

入退院支援における病院や病棟改革の推進に向け、管理職の役割や機能を理解できる

●令和６年診療報酬改定や地域保健医療計画が意味する方向性をもとに、地域における自院の立ち位置を見極める視点を持つ

●入退院支援の質が病院の質を左右するという認識を持ち、自院とその地域における入退院支援システム構築に向けた推進力となれる

●地域連携・退院調整部門だけでなく、現場の中間管理職と協働しスタッフを巻き込み、組織全体（多部門・多職種）の取り組みへと発展するためのリーダーシップが発揮できる

≪アンケート結果≫

■自施設の地域・病院・多職種による入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・「入退院支援における管理者の役割について」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・事業参画病院から『入退院支援について』:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク :「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪アンケート抜粋≫

・地域連携室だけでなく患者さんのケアに関わるすべての職種が、その方やそれを支える家族の在宅生活に対する意向やそれまでの生活、課題を共有する為に他職種カンファレンスの重要性がある、またその内容について周知することが大切である。外来患者さんのケアマネジャーやご家族に入院前からの関わりが大事であることを外来看護師他に伝え関わりを持っていく、また、退院後の生活にも目を向け、支援がよかったかのフィードバックをすることが大事である。

・時代背景に沿った対応が重要であることを痛感した。そのためには診療報酬改定等情報を得て現状分析が重要だと思った。入退院支援における窓口を明確にし、それを職員全体に周知、徹底し誰に聞いても窓口がわかるようにしておく必要性を感じた。

・可視化シートが共通のツールとしてとても有効だと再認識した。当院でも可視化シートを作成しているが、充分に活用できていないため、活用を推進していきたいと思う。また、入院前の関わりを含め可視化シートのアップデートをしたいと思う。

①高知県健康政策部在宅療養推進課
チーフ　大崎 亮彦氏の挨拶

②事業責任者 特任教授　森下 安子による事業説明の様子

③グループワークの様子

④グループワークの様子

【看護管理者研修】開催場所：高知城ホール

内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
・入退院支援事業の概要説明～看護管理者研修の位置づけ～地域・病院・多職種協働型　入退院支援の仕組みづくりガイドライン Ver.3 （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ・入退院支援における看護管理者の役割 （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授 久保田 聰美） ・入退院支援の推進に地域との協働が必要なわけ～地域から学んだ当院の課題をもとに～ （ゲストスピーカー：リハビリテーション病院 すこやかな杜 リハビリテーション科 科長　令和元年度事業参加病院） ・高知医療センターの取り組み （ゲストスピーカー：高知医療センター 看護局次長　令和４年度事業参加病院） ・グループワーク	令和６年７月５日（金） 10 時～ 16 時 30 分	40 人

≪到達目標≫

入退院支援における病院や病棟改革の推進に向け看護管理者の役割や機能を理解できる

●診療報酬が意味する方向性をスタッフに説明・周知できると共に退院後の生活を見据えたうえで、地

域との協働を具体化できる
●身体・精神・社会的背景を統合したアセスメントおよび包括的ケアの提供体制構築の必要性を理解する
●病床機能分化と地域連携を視野に入れた看護管理を理解できる
●入退院支援の質と看護の質の関係性を理解し現場にフィードバックできる

≪アンケート結果≫

■看護管理者として自施設の地域・病院・多職種協働による入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）
・「入退院支援における看護管理者の役割」:「とてもそう思う」「そう思う」94.1%
・ゲストスピーカー２名からの報告：「とてもそう思う」「そう思う」97.0%
・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」94.2%

≪アンケート抜粋≫

・当院では退院時サマリーの記載方法に決まりがなく、入院中の経過が基本となっていた。外来、在宅、地域支援者と連携をとり在宅生活を支えるためにはどういった内容を記載する必要があるのかを部署内で検討し修正していきたい。
・入院前から支援できる体制作り、他職種との関わり方を見直すなど、まず自分ができる事を部署内にフィードバックして質が向上できるようにしていきたいと思う。
・病棟、地域連携、訪問看護等、異なる部署の方々とグループワークを通じて色々な意見を聞くことができた。情報共有、連携はどこの部門、部署でも共通なキーワードであり、具体的に何をどう連携していくのか、可視化、モニタリング、フィードバックを行っていきたいと思う。

①高知県立大学 健康長寿研究センター長
看護学部 教授　久保田 聰美による講義の様子

②リハビリテーション病院　すこやかな杜発表の様子

③高知医療センター発表の様子

④グループワークの様子

【多職種協働研修】開催場所：高知城ホール

回	内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
第1回	・入退院支援事業の概要と「多職種協働研修」の位置づけ （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ・入退院支援における多職種協働の実際と必要性 ①入退院支援における薬剤師の関与と多職種連携 （外部講師 管理薬剤師　伊藤 悠人氏） ②理学療法士の立場で多職種協働を考える （外部講師 理学療法士　下元 佳子氏）	令和6年7月16日（火） 9時30分～12時30分 ※第1回・第2回は同日開催	57人
第2回	・入退院支援～地域・病院・多職種が協働で支援しよう！～ （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子）	令和6年7月16日（火） 13時30分～16時30分 ※第1回・第2回は同日開催	58人
第3回	・今、どうして「多職種協働（IPW）」が必要なのか？ ●自分の職業は何をする人？他の職業との違いは？ ●多職種協働（IPW）の考え方を知る ●チームの特徴を分析し振り返ってみよう ●事例を用いたグループワーク ～多職種チームで話し合い　行動できるために～ （社会福祉学部教授　西内 章） （高知学園大学健康科学部管理栄養学科 准教授 廣内 智子氏）	令和6年8月19日（月） 9時30分～12時30分 ※第3回・第4回は同日開催	56人
第4回	・多職種連携・協働のためのコミュニケーション～地域・病院・多職種で支えるために～ ●各々の施設間の「壁」を乗り越えるためのコミュニケーションの必要性を理解する ●医療機関と地域の事業所間にある「壁」から生ずるジレンマを体験する ・事例を用いたグループワーク～信頼と共感に基づくチーム形成～ （外部講師：東京通信大学 人間福祉学部 人間福祉学科 准教授　井上 健朗氏）	令和6年8月19日（月） 13時30分～16時30分 ※第3回・第4回は同日開催	56人
第5回	・～模擬カンファレンスを見て・感じて・考える～リアルカンファレンス～情報共有から目標共有へ　つなぐ鍵はどこに？～ （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授 久保田 聰美） 【テーマ】退院に向けた患者・家族の参画について考える	令和6年9月20日（金） 13時30分～16時30分	56人

≪到達目標≫

「地域との協働」、「多職種協働」、「入退院支援の仕組みづくり」をキーワードに、地域連携部門の看護師・MSWに限らず、病棟やセラピスト、薬剤師、管理栄養士、栄養士、事務系職種など入退院支援に関わる病院スタッフと地域の多領域の専門職の役割を理解し実践につなげる

●状況設定・事例分析・グループワークを通して、それぞれの病院の機能と地域の状況に合わせた入退院支援が多職種でできるようになる

●お互いの専門性や立場を理解し、顔がみえるだけでなく、何を大切にし、どんな役割を遂行しているのか分かり合える関係づくりを目指せる

≪第１回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院・多職種協働で入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・「入退院支援での薬剤師の関与と多職種連携」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・「理学療法士の立場で多職種協働を考える」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク :「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第１回　アンケート抜粋≫

・人手不足からくる不十分な退院支援、退院後のサポートなどが自分の病院には足りないと思った。入退院に至るまでに他職種の協力は必要不可欠だと感じた。

・今回、初参加です。７．８．９月の研修を終了した時点で、当院の問題点や課題を抽出し、多職種で共有できるよう、退院支援スケジュールの修正や日々のカンファレンスの充実を図れるよう、機能できるように、この研修で学んだことを持ち帰ってスタッフと共有できる場を作りたいと思った。そして今後に繋げていけたらと思う。

・講義については、職種連携について改めて考えることができた。グループワークを通して他職種それぞれの視点や意見を聞くことができ、大変勉強になった。

①管理薬剤師　伊藤 悠人氏による講義の様子

②理学療法士　下元 佳子氏による講義の様子

③グループワークの様子

④発表の様子

≪第２回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院・多職種協働で入退院支援を考える上で役立ちましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・「入退院支援～地域・病院・多職種が協働で支援しよう！～」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク :「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第２回　アンケート抜粋≫

・それぞれの職種が持っている知識を集め、一緒に考えることで患者さんや家族の方が望む未来へつなげていくお手伝いが出来たらなと「協働」の大切さを知った。１人の力は小さくてもみんなの力は大きいと思うので、頑張っていきたいと思う。
・各職種の役割を理解し、患者の退院支援にさらにカンファレンスを活発に行い情報共有し、役立てていきたいと思う。
・本人の残存能力や意欲向上に向けて病院スタッフや多職種が毎日考えてくださっていることがこの研修に参加してよく分かった。地域へ帰っても継続できるよう支援していきたいと思う。

①事業責任者 特任教授　森下 安子による講義の様子

②グループワークの様子

③グループワークの様子

④理学療法士　下元 佳子氏による講評の様子

≪第３回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院多職種協働による入退院支援を考える上で役立ちましたか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）
・「今、どうして『多職種協働（IPW）』が必要なのか」:「とてもそう思う」「そう思う」100%
・個人ワーク・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第３回　アンケート抜粋≫

・自分自身の考え方の傾向を知ることが出来た。役割を期待しすぎると円滑なコミュニケーションの障害となるため、気を付けていきたい。チームアプローチをする際にそのチームとしてのかかわりがどうだったか俯瞰することもしていきたい。
・講義とグループワークを通して、カンファレンスにおいて共通認識を持って且つ相手の想いを考えて（それぞれのニーズをとらえて）カンファレンスを実施する事の重要性を知り、結果的にこれがIPWなのかなど知ることができた。

・病院から在宅へ繋ぐ多職種連携から在宅でもその人が望む生活がかなえられ、もとの暮らしを実現する為にも最初の説明や本人の意思を伸ばしていけるようなことへのヒントやチームづくりのコミュニケーションに役立てたいと思いました。

①社会福祉学部 教授　西内 章による講義の様子

②高知学園大学 健康科学部 管理栄養学科
准教授　廣内 智子氏による講義の様子

③グループワークの様子

④発表の様子

≪第４回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院多職種協働による入退院支援を考える上で役立ちましたか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・「入退院支援におけるコミュニケーション」:「とてもそう思う」「そう思う」96.1%
・個人ワーク・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」92.1%

≪第４回　アンケート抜粋≫

・ロールプレイでは何が分かるのかと思ったが、それぞれの力関係や感情などいろいろなことを読み取れることを感じた。同じ方向性を見て支援する大切さをより感じた。
・研修、グループワークを通じて自分の所属するチームを振り返った時、相手を否定する意見や攻撃的、圧をかけた話し方をしている場合があることに気づいた。新人や経験の浅いメンバーでも自分の意見を発言できるよう、フォローをしたり、より分かりやすく相手が理解できる話し方をしていきたい。多職種でコミュニケーションを取り、より良いカンファレンスが実践できるよう、取り組んでいきたい。
・他職種での連携の重要性やコミュニケーションの方法等改めて学ぶことができた。ロールプレイに参加し、家族の立場から医療職を見た時、自分がどう振舞っているか改めて考えさせられた。

①東京通信大学 人間福祉学部 人間福祉学科
准教授　井上 健朗氏による講義の様子

②造形法によるロールプレイの様子

③造形法によるロールプレイの様子

④ロールプレイ後の意見交換の様子

≪第５回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院・多職種協働による入退院支援を考える上で役立ちましたか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・情報共有から目標共有へ　つなぐ鍵はどこに？」:「とてもそう思う・そう思う」92.5%
・「模擬カンファレンスを見て・感じて・考える」のグループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」92.5%

≪第５回　アンケート抜粋≫

・現場の病院やケアマネさんはそれぞれ支援を懸命にされていて、その中で職種によるそれぞれの思いがある事を感じた。目標や目的を共有することで連携につながり、顔の見える関係も改めて大切と感じた。又 ICT の普及も課題であると感じている。この研修を機会に多職種の方と繋がり、新しい情報も得ることが出来た。
・家族、本人含めて、他職種協働でカンファレンスを実施し、目標課題抽出、役割分担し本人、家族の意向を尊重した、効果的で、効率的な質の高い入退院支援を実施していこうと、再確認できた。
・ケアカンファレンスを見て、自施設のカンファレンスの在り方などを考えさせられた。全５回を通して入退院支援に関わる専門職として、自分の職種の専門性や目的を明確にし、患者、家族に寄り添える退院支援ができるように頑張りたいと思う。

①会場全体の様子

②リアルカンファレンスの様子

③　グループワークの様子

④発表の様子

【入退院支援コーディネート能力修得研修】開催場所：高知県立大学 池キャンパス・高知城ホール

回	内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
第1回	・入退院支援事業の概要説明 入退院支援におけるコーディネート能力修得の位置づけ （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ・地域・病院・多職種協働の場においてコーディネート能力とは？（高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美）	令和6年8月5日（月） 9時30分～16時30分	25人
第2回	・機能する多職種チームを作るには？～ご機嫌なチームを作ろう!!～ ・ご機嫌なチーム形成のためのコミュニケーション～信頼と共感に基づくチームづくりを目指して～ （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聡美）（社会福祉学部 助教　乾 由美）	令和6年9月6日（金） 9時30分～16時30分	24人
第3回	・コーディネーターに必要なスキル ～可視化シートをカンファレンスに活かそう！～ ①多様な価値観を尊重するとは ②カンファレンスとは ③場のマネジメントスキル （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） ・事例を通して実感した退院支援コーディネート （ゲストスピーカー：リハビリテーション病院すこやかな杜 看護主任　令和元年度事業参加病院） ・入退院支援推進を継続し見えてきた事～回復期コーディネーターの視点から～ （ゲストスピーカー：いずみの病院 理学療法士　令和3年度事業参加病院）	令和6年10月11日（金） 9時30分～16時30分	24人

≪到達目的≫

病院内外での横断的な支援及び、地域・病院・多職種協働型の入退院支援を推進するコーディネート能力を修得することができる

●病院と地域では入退院支援に対する考え方にズレが生じやすいことを理解し、相互関係を深めることができる

●それぞれの専門職において、個々の教育課程や専門性の違いから価値観の違いが生じる場合がある事を理解した上で、チームアプローチの必要性を理解できる

●入退院支援を可視化することで、経験年数や力量が違っても入退院支援の質が標準化され、円滑な地

域連携につながることを理解できる
●入院直後から、地域とつながり、退院後の生活を見据えた支援方法を地域と一緒に検討する必要性を理解できる

【入退院支援コーディネート能力修得研修参加者の推薦の目安】

□支援における病院・地域双方の課題をある程度理解し、課題解決に向けた取り組みの必要性を認識し変革することを受け入れることができる
□多職種スタッフから信頼があり多領域の専門性を活かそうとする視点をもっている
□自分自身の職種の専門性も大切にしながらも、そこに縛られず柔軟性を持ってチームの中で対応することができる
□管理職と連携してケアを継続し、変革していく役割を担う立場にある（主任、リーダークラス）

≪第１回　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働において求められるコーディネーターの役割・機能」について、組織の多職種による入退院支援を考える上で役立ちましたか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）
・講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%
・グループワーク：「とてもそう思う」100%

≪第１回　アンケート抜粋≫

・グループワークでは、急性期、回復期、居宅支援センターそれぞれの立場での意見を共有することができた。どのステージにおいても目指す目標は患者の生活を見据えた支援であった。急性期から生活という視点を持ち多職種で目標を共有し、患者個々に応じた問題について具体的に計画して取り組みを行う。急性期での患者情報、取り組みを看護要約に記載して情報を繋げ、支援が継続してできるようにしていきたい。
・同じ看護師でも立場や業務内容がそれぞれであり、また多職種について深く考えてみることで、今から現場で自分がどう行動を起こして行くべきかが分かった。まずは多職種の役割を自分が理解し言語化できること、そして、患者さんや家族に知ってもらうことが大切。院内スタッフにも考える機会を設けること、自分が伝えることから初めて行きたいと思う。基本的な当たり前のまずはそこから多職種との協働を始めて行きたい。
・多職種間での連携が大切であることは分かっていたが、実際にはもっと具体的に専門性を理解したうえでの働きかけが必要だと思った。また、入退院支援において外来でのアセスメントの重要性も考え積極的な（有効な）カンファレンス参加をしていきたいと思う。同敷地内に包括支援センターや社協もあり連携しやすい環境でもあるので、もっと有効な意見交換ができ課題解決につながるようなしくみができたらと思う。

①高知県立大学 健康長寿研究センター長
看護学部 教授　久保田 聰美による講義の様子

②グループワークの様子

③グループワークの様子

④発表の様子

≪第２回　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働で入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・「機能する多職種チームの作り方」の講義・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・「入退院支援におけるコミュニケーションスキル」の講義・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第２回　アンケート抜粋≫

・各職種の専門性を活かしながらチームをコーディネートするには、病院と地域との違いを分かったうえで互いに協力し合いながら仲間づくりをしていくことが必要であるということが学べ今後活かしていきたいと思う。学習の中でロールプレイは初めてだったが、振り返りでこんなにも意見がでてくるのにびっくりした。俯瞰することの大切さをすごく学べたと思う。

・グループワークを通して、色々な人の話を聞く、自分も意見を伝えることで、あらたな方法や発見など気づきが多くあった。そこに至るためにはチームとして心理的な安全な場を作ることが必要であると実感することができた。病棟カンファレンスでも、そういう場を提供できるように、ルール作りや話しやすい雰囲気を作れるようにしていく。

・心理的安全性の高いチームづくり（発信がしやすい、どのような意見を言っても大丈夫と思える）ができれば退院支援においても多職種が連携しやすいと思った。今後、多職種と関わるときに意識しながら意見を聞くようにしていきたい。

①社会福祉学部 助教　乾 由美による講義の様子

②グループワークの様子

③ロールプレイの様子

④発表の様子

≪第３回　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働で入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・「コーディネーターに必要なスキル」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・ゲストスピーカーの講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第３回　アンケート抜粋≫

・退院支援にじっくり取り組むこと、知識を学ぶ事が大切だと思った。病錬の経験が浅く、退院支援のプロセスシートなど、新しいものが活用されていて、周知していく立場となり本格的に学びたいと思い参加した。出来ないではなく出来る項目を見つけ、一つ一つ取り組んでいこうと思う。

・カンファレンスのめざす姿を想像して、意見は色々出るが、いざそれをまとめて言語化する、ということにとても難しさを感じた。グループワークを通して、他病院、他職種の方の意見、考えを聞き、共通認識、理解を持つことの大切さが分かった。まずは、相手の事を尊重し、考えを理解しようとする姿勢、気持ちは必ず必要だと思う。発表された２病院は、病院全体で退院支援に取り組もうと指導、教育されていた、自院でも少しずつでも教育には取り組んでいきたいと思う。

・カンファレンスや、ファシリテーターという役割の重要性を理解することができた。ファシリテーターで色々な意見を聞き、カンファレンスを意味のある時間にする為にも、話がそれた時に上手に戻したり、否定的な意見が出た時の場のマネジメントなど、力をつけなくてはいけないと感じた。可視化シートも、より具体的に実現可能なものへ、色々な職種の意見も聞き、見直し、活用できるようにしていきたい。

①リハビリテーション病院 すこやかな杜発表の様子

②いずみの病院発表の様子

③ グループワークの様子

④全３回を終えて（集合写真）

【入退院支援コーディネーター継続研修】

開催場所：四万十市防災センター（四万十市会場）・高知城ホール（高知市会場）

内容（テーマ等）	会場・日時	参加人数
・コーディネーター継続研修の位置づけ （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ・入退院支援において地域・病院・多職種の連携についてともに考えよう （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授 久保田 聰美）	＜四万十市防災センター＞ 令和６年 11 月 29 日（金） 10 時～ 16 時	11 人
・コーディネーター継続研修の位置づけ （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ・入退院支援において地域・病院・多職種の連携についてともに考えよう （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授 久保田 聰美） ・退院支援に向けた取り組み （ゲストスピーカー：田野病院 社会福祉士　平成 29 年度事業参加病院） ・地域からの取り組み報告 （基幹型地域包括支援センターケアプランセンター南部支部 主任）	＜高知城ホール＞ 令和６年 12 月 17 日（火） 10 時～ 16 時	12 人

≪到達目標≫

入退院支援コーディネート能力修得研修後の自施設での活動を振り返り、仲間と共に成長と課題を共有する事で、地域ごとの研修終了者のネットワークを構築するとともに、地域や病院の入退院支援システムの改善に取り組む能力の向上を目指す

≪四万十市会場　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働における入退院支援の改善に向け、参考になりましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・午前中の講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪四万十市会場　アンケート抜粋≫

・カンファレンス等を行う際、ファシリテーターの役割として話し合いがすすめられるように、目標に対する介入が早期から行えるようにしていきたい。在宅側の方の意見が聞けて、今後入退院支援を行っ

ていくにあたり、もっと密にケアマネ等と連携していけるように心がけていきたいと思った。

・看護師からケアマネジャーに転職し、病院のおおまかな事情も知りながら在宅で生活する高齢者の方々のコーディネートする立場として、私にできる支援は何ができるのかを振り返りさせて頂か事ができたように思う。まだまだ、ケアマネジャーとしては経験が浅く、どうしても看護師としての目線で関わってしまいそうになる自分もいる。今日の研修に参加させて頂き、改めて在宅サイドから医療現場や、サービス提供事業所にコンタクトを取る時にどのようなコミュニケーションの取り方で関わると良いか、という事を学ばせて頂いた。

・職場を振り返った際に、心理的に安全性の高いチームになれているかどうか考えた。色々なカンファレンスに参加する中で、新人さんもベテランさんも、職種も違っている中で、自分ができる役割も、カンファレンスによって違うことに気がついた。基本的に患者さん、家族さんの為の話し合いをしているが、その基本から外れてしまっていることもあるなとつくづく思った。また病院に持ち帰り、みなで共有できるようにしたい。

①会場全体の様子

②グループワークの様子

③グループワークの様子

④ 発表の様子

≪高知市会場　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働における入退院支援の改善に向け、参考になりましたか？

（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）

・午前中の講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・ゲストスピーカーの活動報告：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪高知市会場　アンケート抜粋≫

・多職種との協働については、入院前から退院に向けてコーディネーター的役割をもってつなげていけるようになってきた。しかし、現在ソーシャルワーカーと共に病棟を二つ担当しているがそれぞれが

前方も後方連携もやっており異なる職種との退院支援業務についての働き方に差を感じている。いかに退院支援業務について看護師とソーシャルワーカーとの協働をはかること、業務分担することの難しさを改めて感じた。今後も師長と相談しながら業務調整を図っていきたいと思う。

・田野病院の施設見学を可視化して情報共有する取り組み自分たちにも、利用者に退院のイメージがしやすい、意欲や不安の解消、利用者がそれを選べる。さらに次へと進化していける。視覚化の大切さが理解できた。地域包括支援センターの取り組み役割を知っていただける良い機会になった。相談室やMSW がカンファレンスをどう捉え運営し取り組んでいるかが見え、その課題も、それぞれ同じところにつまずいていて、共通の問題が見えた。

・多職種カンファレンスの場面や患者、家族の意思決定の場面に十分な情報を提供する手段として、施設見学、自宅訪問はイメージしやすく効果的である。問いかけ、引き出し、言語化するとこで情報を伝え、統一した方向性が見出せる。最終的に三方よしをめざし、グッドサイクルな組織、職場風土にしていきたい。

①会場全体の様子

②田野病院発表の様子

③基幹型地域包括支援センター
ケアプランセンター発表の様子

④グループワークの様子

【大交流会】開催場所：高知城ホール

入退院支援事業に参加し、令和元～６年度にかけて、地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制の構築に取り組んだ医療機関（モデル基幹病院）における、事業終了後の入退院支援推進に向けた実践活動を全モデル基幹病院にて共有する事で、更なる発展と、今後の課題解決に繋げることを目的として、３か所の病院と１か所の地域包括支援センターより報告。

内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
・開会の挨拶 （入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） ・各モデル基幹病院からの取り組み報告 ①地域・病院・多職種協働型入退院支援システム発展に向けたカンファレンス改善の取り組み （発表者：田野病院 作業療法士　平成 29 年度事業参加病院） ②すこやかな杜　入退院支援に関わって 6 年～可視化シート活用方法の課題に向けての挑戦～ （発表者：リハビリテーション病院すこやかな杜 作業療法士 令和元年度事業参加病院） ③入退院支援の定着化に向けた可視化シートを活用した事例検討（発表者：高知医療センター 看護局次長 令和 4 年度事業参加病院） ④入退院支援における医療機関との連携～コロナ禍を経て改めて連携を考える～ （発表者：四万十町地域包括支援センター） ・テーマ別ディスカッション	令和 6 年 12 月 10 日（火） 13 時 30 分～ 16 時 30 分	31 人

≪アンケート結果≫

■各施設からの報告は、地域・病院・多職種協働における入退院支援の改善に向け、参考になりましたか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）
「とてもそう思う」「そう思う」：100%

■今後も、大交流会の開催があれば、参加したいと思いますか？
（選択肢：とてもそう思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・全くそう思わない・未回答）
「とてもそう思う」「そう思う」：96.4%

≪アンケート抜粋≫

・他院の取り組みを聞き、目標を可視化することで他職種で連携がとりやすくなると改めて感じた。また、地域へつなげていく際も、病前の生活をしっかり情報収集し、リハビリ目標を設定していくことも大事と感じた。
・ケアマネジャーからの情報提供も、病院側に必要な内容を送る必要があると感じた。入退院の引継ぎルールを入院時に送るのみでなく、その後もケアマネ、病院間で情報を共有することが大事と思う。
・病院は思ったより地域に開かれており、退院後の生活がスムーズにいくように願ってくれているということが分かった。家屋訪問を実施してくれているところもあるのだと知ることができた。
・同じような地域性の方の発表を聞けて、参考になった。病院のあり方も様々なので、スピード等に違いもあるが、感じていることや困っていることなど一緒な部分は多いので、今後支援していく際に動きなど考えていきたいと思った。
・情報共有について、専門職同士の引継ぎはメリットが大きく、ご本人様にとっても有益だとの意見、「なるほどな」と思った。支援センターとして、支援者間の交流会のテーマの参考にもなった。

①会場全体の様子

②田野病院　発表の様子

③グループディスカッションの様子

④参加者発表の様子

2．相談支援事業

各病院と地域からのインタビューと運営メンバー会議によって検討した入退院支援の「優先課題」と、病院と地域がともに「目指す姿」を軸に、病院機能や地域特性を踏まえた入退院支援の仕組みを目指し第３者の視点を活かし支援する。

≪実施機関≫

近森オルソリハビリテーション病院

≪具体的な支援内容≫

１）事業参加病院とその地域へ事業概要を説明
２）病院と地域より入退院支援事業運営メンバー（事業のけん引役）を選出
３）入退院支援における課題抽出のため、病院・地域へインタビュー
４）地域・病院・多職種協働型の入退院支援を目指し「運営メンバー会議」を開催（全３回）
①病院と地域双方の入退院支援における課題を共有
②病院と地域の入退院支援における「優先課題」抽出
③病院と地域が共に「目指す姿」を検討

【大学が地域・病院・多職種と取り組むSTEP】
「地域・病院・多職種協働型　入退院支援の仕組み作りガイドライン」に基づく支援内容抜粋

STEP1　地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制に向けた基盤整備
□支援体制を構築するエリアを決定する
□入退院支援体制強化に向け病院と地域から運営メンバー・参画病院を決定する

STEP 2　入退院支援の優先課題と目指す姿の決定
□病院・地域・多職種が入退院支援の課題共有と優先順位・目指す姿を決定
□病院・地域独自の強みを活かした「入退院支援可視化シート(以下、「可視化シート」)を作成し、病院と地域に周知する

STEP 3　入退院支援の事例展開を積み重ね仕組みを定着化
□「可視化シート」を活用し地域・病院・多職種協働で事例展開を積み重ねる
□病院と地域で事例展開ごとに丁寧に振り返り会を行う
□「気づき」や「学び」を「可視化シート」に反映・修正・定着化

STEP4　入退院支援体制の洗練化
□地域と共に「可視化シート」に基づいた入退院支援の展開を継続し振り返りで明確になった「効果」と「課題」をもとに仕組みを洗練化
□入退院支援システムモニタリングシートを活用し、更なる入退院支援の質向上と連携強化を目指す

1

STEP1
地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制に向けた基盤整備

運営メンバーの選出・決定

運営メンバーとは：地域と病院双方から選出し、地域・病院・多職種協働型入退院支援の仕組み作りをけん引していく役割を担う

支援体制を構築するエリアを決定
↓
地域・病院・多職種よりメンバー選出
↓
共に体制構築を行う『参画病院』決定

★既存の連携状況や地域特性をふまえて構築エリアを決定する

★院内に加えて居宅・地域包括支援センター・在宅メンバー・行政等から運営メンバーを選出

★『参画病院』：急性期・回復期・在宅と切れ目ない支援体制を目指し協働する医療機関

2

STEP2
入退院支援の優先課題と目指す姿の決定

運営メンバー会議の開催

病院・地域双方の課題共有
↓
地域と共に取り組む「優先課題」
↓
地域と共に「目指す姿」
↓
入退院支援を可視化したシート作成

★病院・地域双方から、入退院支援の状況や課題についてインタビューを行い課題を明確化する

★地域・病院・多職種が会議を通して「優先課題」「目指す姿」を合意形成し、作りたい入退院支援の仕組みを検討する

★「優先課題」「目指す姿」を基盤に地域・病院・多職種協働型の入退院支援を可視化したシートを作成・周知する

3

STEP3
入退院支援の事例展開を積み重ね仕組みを定着化

入退院支援可視化シートに沿ったモデル事例での展開

可視化シートで入退院支援の事例展開を積み重ね
↓
入退院支援のプロセスを丁寧に振り返る
↓
気づき・学びを波及する
↓
可視化シート活用の定着化

★地域と共にモデル事例の入退院支援を展開し振り返る事で気づきや学びが蓄積され職員の成長につながる

★病院と地域の一体的なモデル事例の展開を3事例程度積み重ね、更なる関係性の構築と仕組みの定着化

★STEP２で合意形成した「目指す姿」に向け、地域と協議のうえ可視化シートを改善していく

4

STEP4
入退院支援体制の洗練化

地域と共に入退院支援の展開を継続
「効果」と「課題」を検討し仕組みの洗練化

地域と共に入退院支援の事例展開や振り返りを継続
↓
「効果」「課題」を明確化し可視化シートを洗練化
↓
地域・病院・多職種協働型入退院支援をモニタリング

★地域・病院・多職種協働型の入退院支援を継続して展開・振り返る

★事例展開で見えてきた「効果」と「課題」地域と共有し仕組みの洗練化を目指す

★入退院支援システムモニタリングシートを活用し、更なる入退院支援の質向上と連携強化を目指す

27

【事業説明会】開催場所：各施設

内容（テーマ等）	会場・日時	参加人数
近森病院 令和６年度 入退院支援事業説明会	＜近森病院＞ 令和６年７月４日（木） 14 時～ 14 時 30 分	１人
近森オルソリハビリテーション病院 令和６年度 入退院支援事業説明会	＜近森オルソリハビリテーション病院＞ 令和６年８月 15 日（木） 15 時～ 16 時	11 人
居宅介護支援センター城見への事業説明会	＜居宅介護支援センター城見＞ 令和６年 10 月 10 日（木） 14 時 30 分～ 15 時	１人
居宅介護支援事業所さわらびへの事業説明会	＜居宅介護事業所さわらび＞ 令和６年 10 月 15 日（火） 10 時～ 10 時 30 分	１人
ニチイケアセンター愛宕への事業説明会	＜ニチイケアセンター愛宕＞ 令和６年 10 月 18 日（金） 10 時～ 10 時 30 分	１人
居宅介護支援事業所スタイルへの事業説明会	＜居宅介護支援事業所スタイル＞ 令和６年 10 月 21 日（月） 10 時～ 10 時 30 分	１人
秦地域包括支援センターへの事業説明会	＜秦地域包括支援センター＞ 令和６年 10 月 22 日（火） 16 時～ 17 時	２人
高知市基幹型地域包括支援センターへの事業説明会	＜高知市基幹型地域包括支援センター＞ 令和６年 10 月 25 日（金） 16 時 30 分～ 17 時	２人
下知・五台山・高須地域包括支援センターへの 事業説明会	＜下知・五台山・高須地域包括支援センター＞ 令和６年 10 月 28 日（月） 14 時～ 15 時	１人
近森病院への事業説明・参画病院依頼	＜近森病院＞ 令和６年 11 月 21 日（木） 10 時～ 10 時 30 分	３人
近森オルソリハビリテーション病院 運営メンバー会議打合せ	＜近森オルソリハビリテーション病院＞ 令和６年 11 月 21 日（木） 11 時～ 11 時 30 分	２人

【運営メンバー会議】

≪目的≫

入退院支援の仕組み作りに向けた基盤整備と合意形成を目的とする。地域と病院・多職種より選出した運営メンバーで、病院と地域双方が考える入退院支援の課題を共有するとともに、それぞれの地域における入退院支援の優先課題を抽出し、地域・病院・多職種協働で合意形成しながら解決に向けた取り組みを検討することを目指す。

【近森オルソリハビリテーション病院　運営メンバー会議】開催場所：近森オルソリハビリテーション病院

回	内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
第1回	・入退院支援事業の概要説明 運営メンバー会議の役割について ・インタビューをもとに地域・病院相互の課題を共有 ・優先順位の高い課題の検討、グループワーク ・地域と病院の意見交換	令和6年12月20日（金） 15時～16時30分	36人
第2回	・第1回運営メンバー会議での検討内容を共有 ・入退院支援の推進に向け地域と共に取り組む優先課題を決定 （グループワークにて病院・地域意見交換） ・入退院支援の推進に向け地域と共に目指す姿を検討 （グループワークにて病院・地域意見交換）	令和7年1月29日（水） 15時～16時30分	33人
第3回	・第2回運営メンバー会議での検討内容を共有 ・入退院支援の推進に向け地域と共に目指す姿「大目標・小目標」決定 （グループワークにて病院・地域意見交換） ・優先課題の解決に向けての具体的な方策を検討 （グループワークにて病院・地域意見交換）	令和7年2月28日（金） 15時～16時30分	33人

①グループワークの様子

②参加者発表の様子

【高知病院　令和5年度事業参加病院フォローアップ】開催場所：高知病院

内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
可視化シート作成会議	令和6年5月30日（木） 13時30分～14時	7人
可視化シート作成会議	令和6年7月12日（金） 10時～10時40分	3人
可視化シート作成会議	令和6年7月19日（金） 15時05分～15時50分	12人
事例聞き取り	令和6年10月2日（水） 14時～14時15分	1人
中間カンファレンス	令和6年10月18日（金） 15時30分～16時10分	10人
2症例目　情報収集	令和6年11月7日（木） 16時～16時15分	1人
中間カンファレンス	令和6年11月19日（火） 11時～11時45分	11人

【高知西病院　令和５年度事業参加病院フォローアップ】開催場所：高知西病院

内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
可視化シート作成会議	令和６年６月 25 日（火） 13 時 30 分～ 14 時 10 分	８人
可視化シート作成会議	令和６年 10 月 25 日（金） 16 時～ 16 時 30 分	３人
可視化シート作成会議	令和６年 11 月６日（水） 14 時～ 14 時 30 分	１人
１事例目・２事例目　情報収集	令和７年１月 31 日（金） 10 時～ 10 時 30 分	２人

３．モニタリング事業

≪具体的な支援内容≫

モニタリング運営会議の開催

①これまでに事業を展開した病院・地域における現状把握・課題抽出と継続支援

②入退院支援体制モニタリングシートの活用支援（モニタリングシート及び活用マニュアルの洗練化）

③事例検討会

【モニタリング運営会議】開催場所：各施設

＜白菊園病院＞

概　要	開催日時	参加人数
概要：電子カルテが新たに導入され、またコロナ禍が加わり退院支援シートの活用ができている部署と薄くなっている部署がある。また、多職種から、このシートを活用するためにもっと使いやすくならないかとの意見もあり現在、情報収集中。 助言内容：可視化シートをどのように電子カルテに反映しているかについては、いくつかの病院の情報提供を行った。可視化シートの修正については、今後白菊園病院の情報収集をもとに助言していくことになった。	令和７年３月６日（木） 15 時～ 16 時	１人

＜田野病院＞

概　要	開催日時	参加人数
進捗状況、課題・取り組み確認について情報交換を行った。 今までの成果：院内多職種連携が入院ならできている。CM との連携は十分とは言えないが、初回医師からの IC 時に参加があり、家屋訪問を実施することで、地域との情報共有を図っている。また、退院後のフィードバックも実施している。プロセスシートから派生したカンファレンスシートをブラッシュアップしている。残されている課題：退院支援計画を病棟に落とし込めていない。病院薬剤師との協働には課題が残っている。プロセスシートは十分活用されていないが、新任教育には活用している。 助言内容：プロセスシートについては、カンファレンスシートの充実、教育時の使用で活用ができていること、地域との連携、院内多職種協働体制が充実していること、など PDCA サイクルをしっかり回して改善に取り組んでいることをフィードバックした。薬剤師との協働は、困難なことも多いが、患者のニーズに焦点を当てて、引き続きアプローチとしていくことを助言した。 　上記情報収集を踏まえ、田野病院の取り組みを大交流会での報告を依頼した。	令和６年 10 月８日（火） 13 時～ 14 時 30 分	10 人

＜大井田病院＞

概要	開催日時	参加人数
コーディネーター会 退院後訪問の良かった点や課題をまとめ病院内で共有している 成果：退院後訪問を行う事で入院中の医療的手技の指導の振り返りとなった。また、退院時の外来看護師や薬剤師との連携の重要性を知る事ができた。 課題：退院後訪問での情報を地域のケアマネジャーや訪問看護師と共有する事に重要性を確認し今後の連携への課題となった。	令和 6 年 9 月 30 日（月） 16 時～ 17 時	5 人

＜幡多けんみん病院＞

概要	開催日時	参加人数
オンライン開催 昨年度の取り組みと今年度の課題共有 【取組の状況】 ・「急性期から在宅療養を支える」を看護部の目標に掲げて地域連携を強化した。モニタリングシートの調査を行い、病棟看護師による入院から退院までの流れの中での CM との連携はほぼ 100%と定着してきた。また、病棟看護師から退院支援部門への相談件数も増加している。退院前訪問・退院後訪問の推進も目標にあげ、6 か月間で、前年度以上の 25 件を訪問し、患者の課題の明確化につながっている。脳外科の病棟では、試験外泊を行うことで、転院調整を取りやめ自宅退院となった事例が増加するなどの変化もあった。 ・病棟から外来へのサマリー送付の定着や外来看護師が退院前カンファレンスに参加する回数も増え、外来継続看護が強化された。 ・入退院支援の振り返りの中で患者、家族の意向がしっかりと聞けていないこと、多職種で課題と方向性が明確化されていないなどの課題が明らかになった。そのため、退院支援の具体的な事例報告を強化したり、多職種協働を促進するためリハビリ、歯科衛生士、栄養士に入退院支援センター会に参加してもらうようにした。	令和 6 年 11 月 13 日（水） 14 時 45 分～ 15 時 15 分	1 人

＜ JA 高知病院＞

概要	開催日時	参加人数
–	令和 7 年 3 月 27 日（木） 訪問予定	–

＜くぼかわ病院＞

概要	開催日時	参加人数
可視化シート作成会議	令和 6 年 5 月 27 日（月） 15 時～ 16 時	8 人
四万十町ケアマネジャー連絡会	令和 6 年 8 月 6 日（火） 13 時 30 分～ 16 時	31 人

＜すこやかな杜＞

概要	開催日時	参加人数
症例検討会 「本人・家族の希望に沿った入退院支援の実際」 グループワーク： ①自宅に向けて考えられる支援について ②家族とのやりとりに難渋するケースにおいての工夫 成果：病院や地域の多職種での意見交換となりお互いの課題に向けたグループワークとなった 課題：地域と共に介護者である家族の情報収集・共有を行っていく事が課題となった	令和 6 年 11 月 20 日（水） 14 時～ 16 時	39 人

＜あき総合病院＞

概要	開催日時	参加人数
成果： ・職員が入退院支援に向けての意識・視点が少しずつ増えてきている ・地域との連携や自宅訪問などの取り組みが増えてきた 課題： ・入退院支援の視点は持てだしてきたがケアに活かしきれていない ・地域からの情報提供を活用しきれていない	令和 7 年 3 月 3 日（月） 14 時～ 15 時	1 人

＜図南病院＞

概要	開催日時	参加人数
成果： ・コロナ禍においても家屋訪問等地域との連携は行ってきた ・シートを確認しなくても支援の流れは行えている ・中間カンファレンスができていなかったが内科カンファレンスや外科カンファレンスを活用しながらカンファレンスを行ってきたカンファレンスの充実により多職種の情報共有のレベルが上がり早期から介入が可能となった 課題： ・可視化シートの定着化 ・新人オリエンテーションへ組み込むことも含め勉強会の開催 ・振り返り会の開催	令和 7 年 3 月 7 日（金） 16 時 10 分～ 16 時 20 分	1 人

＜いずみの病院＞

概要	開催日時	参加人数
成果 ・可視化シートに沿って退院支援できている （家族への支援、地域との連携、カンファレンス等） ・他職種の業務の流れが共有できていないため今後カンファレンスを通じて共有していく 課題 ・振り返り会が充分でいていない ・可視化シート、入退院支援の流れと行っている業務がつながっていない	令和 7 年 3 月 5 日（水） 14 時～ 14 時 40 分	6 人

＜細木病院＞

概要	開催日時	参加人数
中間カンファレンス	令和 6 年 7 月 29 日（月） 13 時 30 分～ 14 時 30 分	10 人
退院前訪問	令和 6 年 8 月 9 日（金） 13 時 30 分～ 14 時 30 分	6 人
退院前カンファレンス（サービス担当者会）	令和 6 年 8 月 28 日（水） 11 時 20 分～ 12 時 20 分	15 人
成果：可視化シートを活用しカンファレンスや退院前訪問等地域を含めた連携ができた 課題：多職種との目標の共有やそれに向けての各職種の役割・支援の重要性が課題となった		

＜高知医療センター＞

概要	開催日時	参加人数
挨拶、今後の入退院支援事業継続について打合せ	令和 6 年 4 月 10 日（水） 15 時～ 15 時 25 分	4 人
看護管理者研修　ゲストスピーカー打合せ	令和 6 年 4 月 16 日（火） 10 時～ 10 時 40 分	1 人
三里地域包括支援センターへの事例ヒアリング	令和 6 年 4 月 19 日（金） 15 時 30 分～ 16 時 30 分	2 人
居宅ケアマネジャーへの事例ヒアリング	令和 6 年 4 月 26 日（金） 15 時～ 15 時 15 分	1 人
高知医療センター・基幹型地域包括支援センターとの連携について、今後の課題	令和 6 年 5 月 28 日（火） 11 時～ 12 時	2 人
退院前カンファレンス	令和 6 年 6 月 27 日（木） 15 時～ 16 時	4 人
入退院支援の進捗状況と今後の課題	令和 6 年 9 月 19（木） 10 時～ 10 時 50 分	1 人
退院前カンファレンス	令和 6 年 10 月 7 日（月） 14 時～ 14 時 50 分	12 人
成果：入退院支援の定着化に向け可視化シートを活用し事例検討ができた 課題：救急入院からの退院支援		

①リハビリテーション病院すこやかな杜

②参加者発表の様子

4．事業報告会

【令和６年度　報告会】開催場所：高知県立大学池キャンパス

≪目的≫

≪開催方法≫対面とオンライン併用のハイブリット開催

令和６年度に相談支援事業に参加した病院及び過去のモデル基幹病院及び地域等から、取り組み及び今後の展望を報告いただき、高知県内における入退院支援の推進及び発展につなげる。

内容（テーマ等）	開催日時	参加人数
令和６年度入退院支援事業　報告会 ～高知家で創る切れ目のない入退院支援～ ■在宅医療の推進に係る入退院支援事業の今後の展望について ■入退院支援事業の概要説明 ■病院からの取り組み報告 ・近森オルソリハビリテーション病院 （令和６年度事業参加病院） ・リハビリテーション病院すこやかな杜 （令和元年度事業参加病院） ・高知医療センター（令和４年度事業参加病院） ■地域からの取り組み報告 ・四万十町地域包括支援センター	令和７年３月 18 日（火） 13 時 30 分～ 16 時	－

【令和５年度報告会　オンデマンド配信】

令和５年度事業参加病院から、これまでの取組や今後の展望等をご報告いただいた「令和５年度入退院支援事業報告会」（令和６年３月 15 日（金）開催）の内容をオンデマンド（YouTube を利用）にて期間限定配信を行い、県内外から視聴があった。

内容（テーマ等）	配信期間	視聴回数
令和５年度入退院支援事業　報告会 ～高知家で創る切れ目のない入退院支援～ ■退院支援に関する県の取り組みについて ■入退院支援事業の概要説明 ■病院からの取り組み報告 ・高知西病院（令和５年度事業参加病院） ・高知病院（令和５年度事業参加病院） ・細木病院（令和４年度事業参加病院） ・いずみの病院（令和３年度事業参加病院）	令和６年６月５日（水） ～７月 31 日（水）	268 回

5．入退院支援マニュアルの作成

高知市において事業を展開する中で、「入・退院時の引継ぎルール」で提供される入院前の地域の情報が、各専門職の支援計画に活かしきれていない現状が明らかになった。そのため、入院時情報提供シートを活用し、看護師、セラピスト、MSW、管理栄養士、薬剤師等がケアに活かした事例について、各専門職から、情報提供シートのどのような情報をどのように支援計画に活かしたのかインタビューを行った。

そのインタビュー内容をもとに、理学療法士　下元 佳子氏、高知県薬剤師会　阿部 恭宜氏をアドバイザーとして迎え支援計画への活用について助言をいただき、地域からの情報を支援計画に有効に活用する視点について示す「入退院支援マニュアル」を作成する予定である（公開：令和７年３月 web 掲載）。

⑶ 活動評価

【相談支援事業】

①地域包括ケア病棟からの入退院支援システム開発

今年度は地域包括ケア病棟を有する高知市内の近森オルソリハビリテーション病院と地域における仕組みづくりを開始した。ガイドラインを活用してステップ１である地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制に向けた基盤整備にて、病院・地域から入退院支援体制を構築する運営メンバーを選出した。

ステップ２では運営メンバー会議を開催し、入退院支援の「優先課題」と「目指す姿」、それに向けての「具体的な方策」を検討し、可視化シートの作成につなげていった。次年度は、その可視化シートを地域、病院と協働して洗練化し、事例展開・振り返り会を行い、可視化シートの定着化をめざす。

②開発した入退院支援の仕組みの定着・洗練化

令和５年度の事業参加病院である高知病院と高知西病院にて入退院支援の仕組みの定着化・洗練化に向けてのフォローアップを行った。高知病院では、ステップ３である可視化シートを活用し地域・病院・多職種が協働する事例展開を積み重ねた。時系列に沿ってどのような支援や連携が必要なのかを丁寧に確認しながら進めた。その中で事例を決定し退院前カンファレンスや退院後訪問、振り返りを行った。

カンファレンスや退院前訪問を行う事により入院前の生活情報を地域・病院・多職種で共有し退院後での課題の抽出を行い、スムーズな退院に繋ぐことができた。高知医療センターではステップ３である可視化シートを活用しての事例展開を行い、退院後にはケアマネジャーに聞き取りを行い退院後の在宅生活の情報把握し、早期の地域スタッフとの協働の必要性を再確認し、次への支援につなぐことができた。今後も事例展開や振り返りを積み重ね、継続していく事で病院や地域全体の入退院支援の質の向上・可視化シートの洗練化に繋げていく。

【研修事業】

今年度も、感染対策を継続しながら、対面にて「管理者研修」「看護管理者研修」「多職種協働研修」「入退院支援コーディネート能力修得研修」「入退院支援コーディネーター継続研修（四万十市会場・高知市会場）」を計画通り実施する事ができた。

各研修後のアンケート結果をみると、「役に立ったか」、「参考になったか」という各質問項目で、「とてもそう思う」「そう思う」が 92 ～ 100％と評価が高く、地域・病院・多職種協働による入退院支援の実践へつなげる事ができた学びとなり入退院支援システムを構築する人材育成につながったと考える。

「管理者研修」「看護管理者研修」では、管理者として院内での連携の重要性や他施設の課題や取り組み等の共有ができ、今後の自部署での入退院支援の取り組む方向性等の共有ができ、入退院支援の人材育成につながっていると言える。

「多職種協働研修」では、多職種との連携の重要性や専門職が協働する事で多角的な視点からの支援の必要性、課題解決に向けグループワークやロールプレイを行いながら、理解し実践に繋げていける場となった。

「入退院支援コーディネート能力修得研修」では、自施設での可視化シートや課題、今後の展開方法等を事前課題とし、多職種の役割の再認識、また、コーディネーターとしての役割を学び入退院支援の中心的役割として現場での活動へつなぐことができた研修となった。

「入退院支援コーディネーター継続研修」の幡多会場では、「入退院コーディネート能力修得研修」「多職種協働研修」の受講者のみならず「運営メンバー会議」の参加者も対象とし、病院のみならず、介護支援専門員の参加があり入退院支援事業後の幡多地域の入退院支援の質が変化したこと、さらなら連携に向け各立場で具体的な取り組むについて深めることができ、ネットワークの強化を図ることができた。高知会場は、これまでに「入退院コーディネート能力修得研修」を修了した者を対象とし、講義以外にコーディ

ネーター―としての取組の実際や地域包括支援センターからみた入退院支援事業の成果と残された課題についての報告を行い、地域・病院・多職種の連携の課題の共有・解決策に向けての発展的な取り組みについてグループで検討した。また、両会場ともコンフリクトの場面に焦点をあてて自らのファシリテーションを振り返ることができるようワークも取り入れた。CD 継続研修では、講義のみならず、グループで検討していく中で、日々の業務の振り返りや更なる課題に向けて多職種で取り組む能力の修得の場となり、コーディネーター継続研修は高い評価を得た。

【入退院支援体制のモニタリング事業】

今年度はモニタリング運営会議を 12 病院に対して行った。モニタリング運営会議では、病院・地域スタッフが参加する事例検討やモニタリングシート結果の分析などを行い、地域・病院・多職種協働型退院支援システムの稼働状況について評価を行っている。このようにステップ 4 に該当する、継続的な支援の結果として、全国平均（回復期リハビリテーション病棟協会）を下回る平均在院日数の維持、重度な要介護者の自宅への復帰数の増加などの成果が見られた。また、医師の病状説明時における介護支援専門員の同席の定着、多職種カンファレンスの継続的な洗練化への取り組みなど、システム改善、発展に向けた取り組みの継続に繋がっていると言える。また、コロナ感染拡大を受け、地域・病院・多職種協働型入退院支援システムに課題が生じていたくぼかわ病院では、「目指す姿」「優先課題」を地域と共に再抽出し、病院と地域がいつどのように協働していくのか具体的に検討し、修正した可視化シートを地域のスタッフと再度共有し、事例展開を行うことで、再度入退院支援システムの再構築に取り組むことができ、地域から高い評価を得ている。

以上より、今後も「モニタリング運営会議」を継続して実施し、これまでの取り組みと成果をフィードバックするとともに、課題とその解決策を共に検討し、PDCA サイクルを回し、システムの洗練化や更なる入退院支援の質向上と連携強化に取り組むことは重要であり、次年度も継続して実施していく。

また、相談支援事業で関わった医療機関の入退院支援システムの更なる発展と、今後の課題解決に繋げる事を目的とし、実施している「大交流会」ではこれまでに入退院支援事業に参加され、地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制の構築に取り組んだ医療機関（モデル基幹病院）3 病院と、医療機関と連携している地域包括支援センター 1 か所が、事業終了後の入退院支援推進に向け工夫して取り組んでいる取り組みを報告した。各病院等からの発表の後は報告テーマごとに分かれてのディスカッションを行った。参加者間で事業を終えた後の取り組みや課題を共有することができ、情報共有の大切さや病院側と地域側の交流の場となり、今後も開催を希望する意見も多く聞かれた。大交流会は、システムの発展、拡充に向けた自組織での具体的な取り組みにつながる機会ともなっており、事業終了後のフォローアップのみならず各組織のネットワーク強化として有効であったと考える。

また、地域からの情報を病院での各専門職による支援計画に有効に活用する視点について示す「入退院支援マニュアル」を作成することができた。今後このマニュアルについては、モデル基幹病院にて活用していただくとともに、研修にも活用し、活用後の評価結果をもとにさらに洗練化に取り組んでいく必要性がある。

4. 高知県キャリア教育推進事業

①集合研修　福祉で未来を探求！高校生のための Event 講座 1
社会福祉の事を分かりやすく学ぶ

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時	令和 6 年 7 月 27 日（土）13 時 30 分～ 15 時
開催場所	高知県立大学　池キャンパス
対　　象	高校生及び保護者
参加者数	185 人（うち同伴者 83 人）
教 職 員	社会福祉学部 教授　長澤 紀美子、教授　西内 章、教授　横井 輝夫、教授　田中 きよむ、教授　杉原 俊二、教授　矢吹 知之、教授　西梅 幸治、准教授　河内 康文、准教授　福間 隆康、准教授　遠山 真世、講師　行貞 伸二、講師　田中 眞希、講師　加藤 由衣、講師　湯川 順子、講師　辻 真美、助教　稲垣 佳代、助教　上杉 麻理、助教　大熊 絵理菜、助教　玉利 麻紀、助教　乾 由美 事務局 谷 映美、森田 吹生（計 22 人）
外部講師	吉良 正輝 氏
学生スタッフ	社会福祉学部1回生：計 12 人、社会福祉学部3回生：計6人、社会福祉学部4回生：計9人

⑴　事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施した。大学教員や学生に加えて、大学院修了生も外部講師として参加し、大学教員とトークセッション形式で自身の体験や本学での学び、研究成果を発表し、参加者が専門職の役割やキャリアについて学ぶ機会を提供した。

⑵　活動成果

アンケート集計結果から参加者の 91％がプログラムに満足されており、自由記述では福祉・介護のイメージが良くなったという意見が見られた。アンケート結果の自由記述を一部紹介する。

・介護はとても大変でネガティブなイメージもあったが、やりがいがあり、とても良いものだという事を知ることができた。
・実際に体験もさせていただき、将来の自分を思い浮かべながら体験することができた。

（3）活動評価

本事業のプログラムは9年目を迎え、本年度も「オープンキャンパス 2024」と同時開催で実施し、県外の地域からの参加もあった。昨年度に続き対面で実施したことで、大学の雰囲気や教員と学生の関係などを直接感じられる機会となり、進路選択に貢献できたと考える。アンケート集計結果から、学内の雰囲気や授業内容などを知ることができ、福祉に対するイメージがより広く、深く変化したり、福祉や本学部への関心が高まったことがうかがえた。これらの結果から、プログラム構成の全体において満足度が高かったと考える。

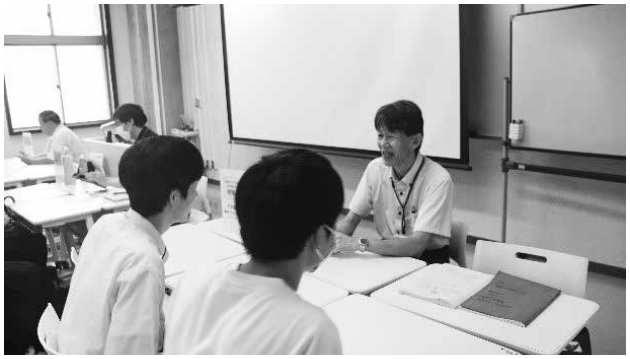
また、社会福祉学部の卒業生および学部生が参加しており、日頃の学びや実践を振り返る意義深い機会となった。

⑷ 集合研修の様子

①当日の様子

②学生発表者の様子

③学生の集団討論



④教員による相談

福祉で未来を探求！
高校生のための
Event
福祉とは？
人と人との
つながり
福祉とは？
支え、支えられること
＼社会福祉の事をわかりやすく学べます／
講座1
2024
7/27 sat
社会福祉の事を
わかりやすく学ぶ
同日開催
高知県立大学オープンキャンパス
体験2
2024
9/7 sat
カフェで学ぶ
福祉と認知症
体験3
2024
10/19 sat
県大生と行く
最新の
福祉体験ツアー
講座4
2025
3/25 tue
新2・3年生の
ための入門講座
事前申込み制
福祉で変わる
未来がある！
高知県立大学 社会福祉学部

高知県キャリア教育推進事業

②集合型研修　福祉で未来を探求！高校生のための Event 体験 2
カフェで学ぶ福祉と認知症

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時	令和６年９月７日（土）13 時～ 16 時
開催場所	高知県立大学　永国寺キャンパス
対　　象	高校生及び保護者
参加者数	14 人（うち同伴者６人）
教 職 員	社会福祉学部 教授　矢吹 知之、講師　辻 真美
	事務局 谷 映美、森田 吹生（計４人）
学生スタッフ	社会福祉学部３回生：計２人
	社会福祉学部４回生：計６人

⑴　事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施した。今回の集合研修は、本学永国寺キャンパス食堂で毎月開催しているオランダスタイルの本格的な認知症カフェ「土曜の永国寺カフェ」（企画：土曜の永国寺カフェ実行委員会）を会場に行われた。

プログラムでは、参加者同士の交流を深めるカフェタイムに加え、中山 しのぶ氏（一般社団法人セカンド・ストーリー代表）によるミニ講話が行われた。

⑵　活動成果

アンケート集計結果からは、回答者のほぼ全員が「福祉・介護への興味を持った」「福祉・介護の勉強をしたくなった」ことが示された。

一部、自由記述を紹介する。

・中山しのぶさんのお話がとても興味深かったです。
・福祉についての知識が増えて、とてもよい体験になりました。
・当事者の声を聞くことにより、認知症観がガラッとかわりました。知らないより、知ることが大事！！それを周囲に伝えることも大事！！認知症の方も、そうでない方もみんながともに楽しく生きる社会になれるといいなと思いました。
・カフェタイムでは、始めは様子を伺ってばかりで進んでお話できなかったけれど、話していくうちにおばあちゃん（参加された住民の方）の表情が明るくなって嬉しかった。

⑶　活動評価

参加者した高校生や保護者は、リラックスした雰囲気のなか、他の参加者とともにカフェタイムやミニ講座の時間を楽しんだり、講師の話に真剣に耳を傾けたりしていた。そういった参加者の様子やアンケート結果からは、永国寺カフェを会場とした今回の企画が、高校生にとって貴重な経験となり、福祉・介護への関心を深める機会となったことが伺える。

ボランティアとして参加した大学生も、参加者の誘導や飲み物の提供、会話のサポートなどを行い、参加者間のコミュニケーションを円滑にする役割を果たし、終始和やかな雰囲気のなかでイベントは終了した。また、イベント内で日頃の学びを振りかえる意義深い機会になった。

⑷ 集合研修の様子

①永国寺キャンパス案内

②ミニ講話の様子

③会場内の様子

④教員による振り返り学習

体験
2

令和６年度高知県キャリア教育推進事業　高知県立大学健康長寿研究センター

カフェで学ぶ福祉と認知症

高知県立大学では高知県から補助を受け、高知県の介護福祉人材の「すその拡大」を目的とした「高知県キャリア教育推進事業」を実施しています。
今回は高知県立大学永国寺キャンパスで実施している「土曜の永国寺カフェ」を見学します。認知症カフェとは認知症について「ゆるやかに学べるカフェ」です。リラックスした環境で福祉と認知症について語り、学び、理解を広めませんか?

2024
9月7日(土)
13時～16時（受付開始 12時30分～）

集合場所:高知県立大学 永国寺キャンパス
教育研究棟１階（高知市永国寺町2-22）
対象者:高校生・保護者・高校の先生方
参加定員:先着30名
駐車場:近隣の有料駐車場をご利用ください
「土曜の永国寺カフェ」詳細はこちらから

参加費

- 高校生 参加費無料
- 同伴保護者のみ100円

（100円はカフェタイム時のコーヒーお菓子代として使用します）

健康長寿研究センター
キャラクター
ウルクさん

プログラム

1部　カフェタイム
2部　ミニ講話
3部　カフェタイム
4部　ディスカッション

お申込み　本学ホームページからお申込みいただけます。
2次元バーコードから専用ページにアクセスし、必要事項をご登録下さい。

お問合せ　高知県立大学　企画調整課
健康長寿研究センター担当事務:森田または谷
TEL:088-847-8815　Mail:career-wlc@cc.u-kochi.ac.jp

お申込はこちらから

高知県キャリア教育推進事業

③集合研修　福祉で未来を探求！高校生のための Event 体験 3
県立大生と最新の福祉体験ツアー

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時	令和 6 年 10 月 19 日（土）13 時～ 16 時
開催場所	高知県立大学永国寺キャンパス及びイオンモール高知
対　　象	高校生及び保護者
参加者数	22 人（うち同伴者 2 人）
教 職 員	社会福祉学部 講師　辻 真美
	看護学部 助教　塩見理香
	事務局 三本 雅宣、森田 吹生、由比 由紀（計 5 人）
学生スタッフ	社会福祉学部 2 回生：計 6 人
	社会福祉学部 4 回生：計 3 人
	手話体験ブース：計 7 人
	手話本の展示：計 1 人

⑴　事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施した。

今回の集合研修は、福祉と福祉の仕事に触れることができる体験型イベント‘ふくしフェア 2024’への参加ツアーを企画した。案内役の学生スタッフや大学教職員とともに、最新の福祉を見て、触れて、体験するなかで、人がよりよく生きることやともに支え合うことの大切さを学ぶ機会とした。

⑵　活動成果

アンケート集計結果からは、回答者の 80% が「福祉・介護への興味を持った」「福祉・介護の勉強をしたくなった」「福祉・介護の仕事をしたくなった」ことが示された。

一部、自由記述を紹介する。

・様々な体験ができ、とてもよい経験になりました。
・とろみ体験でコーヒー牛乳を飲んでみたときに、すごく美味しくて、よく考えられているんだなと思いました。普段は体験できないことをたくさんできて、すごくいい講座でした。
・大学生とのお話も楽しくて、福祉についてより学んできたいと思いました！

⑶　活動評価

アンケート結果から分かるように、高校生が体験を通して学ぶことで、より分かりやすく印象に残る体験となり、福祉・介護への興味・関心が高まったのではないかと考える。世間全般にある福祉・介護のマイナスイメージを払拭するためには、このような最新の福祉機器に直接見て、触れる体験型の講座が効果的であると感じる。今後もさまざまな関係機関と連携し、体験を通した学びの場を提供したい。

また、イベントには社会福祉学部の学部生が参加しており、日頃の学びを振り返る意義深い機会になった。

⑷　ふくしフェアの様子

①ペットロボット体験

②自助具体験

③記入・展示の様子

④ノーリフティングケア体験

体験
3

令和６年度高知県キャリア教育推進事業　高知県立大学健康長寿研究センター

県大生と行く

最新の福祉体験ツアー

In　ふくしフェア2024

2024
10月19日（土）12時30分～16時（受付開始 12時～）

集合場所　高知県立大学 池キャンパス（高知市池2751-1）
～会場まではバスで移動します！～

研修会場　イオンモール高知（高知市秦南町1丁目4-8）

対象者　高校生・保護者・高校の先生方

集合定員　先着30名（キャンセルの際は必ずご連絡ください）

高知駅発着
シャトルバスあり

健康長寿研究センター
キャラクター
ウルクさん

会場では県大生が
ご案内します♪

体験企画が
盛りだくさん！

- 認知症VR体験
- ペットロボット体験
- ノーリフティングケア体験
- 手話体験
- パラスポーツ体験
- ふくしウルトラクイズ（景品あり）

お申込み　本学ホームページからお申込みいただけます。
2次元バーコードから専用ページにアクセスし、必要事項をご登録下さい。

お問合せ　高知県立大学　企画調整課
健康長寿研究センター担当事務：森田または谷
TEL:088-847-8815　MAIL:career-wlc@cc.u-kochi.ac.jp

お申込はこちらから

高知県キャリア教育推進事業

④集合研修　福祉で未来を探求！高校生のための Event 体験 4
新 2・3 年生のための入門講座（予定）

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時	令和 7 年 3 月 25 日（火）13 時～ 15 時
開催場所	高知県立大学池キャンパス　大講義室
対　　象	高校生及び保護者
参加者数	未定
教 職 員	社会福祉学部 助教　上杉 麻理、講師　辻 真美
	事務局 森田 吹生（予定）
外部講師	高知市基幹型地域包括支援センター
学生スタッフ	社会福祉学部：計 7 人（予定）

⑴　事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施する。今回のイベントでは、大学教員や学生が大学での学びの実際を報告することに加え、現場で活躍する専門職が仕事内容や役割について語ってもらい、さらに、福祉・介護の学問的な入門講義を行う予定である。これらをとおして、参加者に福祉・介護への理解を深めていただく機会を提供する。

⑵　活動成果

令和 7 年 3 月 25 日（火）に実施予定

⑶　活動評価

令和 7 年 3 月 25 日（火）に実施予定

講座
4

令和6年度高知県キャリア教育推進事業/高知県立大学健康長寿研究センター

＼＼ 新2・3年生のための ／／

入門講座

講座終了後に、希望者を対象とした学内見学ツアーを実施します。
学内施設を実際に見て、学生・教員とお話ししませんか？
お気軽にご参加下さい。

2025/3/25(火)
13:00～15:00（受付 12:30～）

会　場　高知県立大学池キャンパス 大講義室
（高知市池2751-1）
対象者　高校生・保護者・高校の先生方
定　員　先着100名

～社会福祉に触れる学びと体験～

高知県立大学社会福祉学部は、社会福祉領域のプロフェッショナルを養成する四国唯一の公立大学であり、西日本の公立大学としては数少ない、三福祉士資格(社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士)に対応しています。

※R5年度の様子

13:00～13:30
「意外と知らない高知家のふくし」

人口減少や高齢化が進み、10年先の日本の未来を進む課題先進県である高知県。地域住民、地域団体、行政、高知県立大学が一体となり、「域学共生」を旗印に様々な取り組みを行っています。
どんな学びをしているの？やりがいや魅力は？将来性は？実際に取り組みに参加した県大生が、先生とトークしながらお伝えします。

<ファシリテーター>
助教　上杉　麻理
○専門分野：介護福祉学
○学位：修士(社会福祉学)

高知県立大学社会福祉学部を卒業後、高齢者施設で介護福祉士・社会福祉士として9年間勤務。その後2023年に高知県立大学に就任。
現在は介護現場での経験を活かし、後輩の育成を行うとともに高齢者施設におけるソーシャルワークについて考えている。

13:30～15:00
「認知症についてみんなで考えよう」
(認知症サポーター養成講座)

いくつになっても、大切な人とともに、住み慣れた地域で自分らしく生活を続けていきたいですよね。でもそれは、認知症になったらできなくなってしまうのでしょうか？
この機会に一度、認知症について学び、一緒に考えてみませんか。

認知症サポーター養成講座とは

認知症になっても安心して暮らせる町づくりを目指し、2004年度に厚生労働省が導入しました。
講座を修了された方には、認知症サポーターの証として【サポーターカード】をお渡しします。

お申込み　本学ホームページからお申込みいただけます。
2次元コードから専用ページにアクセスし、必要事項をご登録下さい。

お問合せ　高知県立大学　企画調整課
健康長寿研究センター担当事務：森田
TEL：088-847-8815　MAIL:career-wlc@cc.u-kochi.ac.jp

お申込はこちらから

高知県キャリア教育推進事業

訪問講座

社会福祉学部 講師　辻 真美

開催日時
① 令和 6 年 8 月 22 日（木）13 時 30 分～ 15 時
② 令和 6 年 9 月 2 日（月）11 時 50 分～ 14 時 15 分
③ 令和 6 年 9 月 5 日（木）16 時 10 分～ 17 時
④ 令和 6 年 9 月 13 日（金）16 時 40 分～ 17 時 40 分
⑤ 令和 6 年 9 月 20 日（金）16 時 10 分～ 17 時 10 分
⑥ 令和 6 年 9 月 24 日（火）15 時 50 分～ 17 時 30 分
⑦ 令和 6 年 9 月 25 日（水）16 時～ 17 時 30 分
⑧ 令和 6 年 9 月 25 日（水）16 時～ 17 時 30 分
⑨ 令和 6 年 10 月 11 日（金）15 時 45 分～ 16 時 45 分
⑩ 令和 6 年 10 月 15 日（火）16 時～ 17 時
⑪ 令和 6 年 10 月 18 日（金）13 時～ 14 時
⑫ 令和 6 年 10 月 21 日（月）16 時～ 17 時

開催場所
高知県内高等学校 12 校
①高知商業高校、②室戸高校、③高知国際高校、④高知小津高校、⑤中村高校、⑥高知工業高校、⑦岡豊高校、⑧高知丸の内高校、⑨土佐女子高校、⑩春野高校、⑪須崎総合高校、⑫安芸高校

対　　象
高校生及び高校教員

参加者数
238 人（うち高校教員 42 人）

教 職 員
社会福祉学部 教授　西内 章（⑤⑪）、准教授　河内 康文（④）、講師　辻 真美（⑨⑩⑫）、講師　行貞 伸二（③⑧）、講師　田中 眞希（①⑥）助教　乾 由美（⑨）、助教　上杉 麻理（②⑦）事務局 森田 吹生（③）（計 8 人）

外部講師
長﨑 早津紀 氏（社会福祉法人 いの町社会福祉協議会）（①）、青木 遥香 氏（ジェイエムシー株式会社 保険事業部）（①）、福留 知子 氏（株式会社 高知銀行）（①）、竹内 奈津美 氏（社会福祉法人 室戸市社会福祉協議会）（②）、福元 萌 氏（高知県中央児童相談所）（④）、猪野 愛三 氏（社会福祉法人 本山町社会福祉協議会）（⑦）、岡 未来 氏（社会福祉法人 仁淀川町社会福祉協議会）（⑩）、山脇 華月 氏（介護老人福祉施設グランボヌール 介護職員）（⑫）（計 8 人）

学生スタッフ
社会福祉学部 1 回生：計 18 人
社会福祉学部 2 回生：計 4 人
社会福祉学部 4 回生：計 8 人

（1）事業概要

福祉･介護への理解を深めることを目的に、高知県内の高等学校を訪問し、大学教員が理論、外部講師（卒業生）が福祉・介護現場での仕事内容や福祉・介護職の役割、学生スタッフが大学での学びの実際を説明した。また、開催にあたっては、各高校の担当者と事前に打ち合わせを行い、高校側の目的や意図、参加者の福祉・介護への興味・関心などの状況に合わせて内容を工夫して行った。

⑵ 活動成果

アンケート集計結果はおおむね好評であった。以下、自由記述を一部紹介する。

・「（福祉･介護に対し）間違ったイメージを持っていたけど、今回の講座で福祉･介護のことについてしっかりとした知識を身につけることができ良かった」
・「今までは何となく、高齢者の介護や、サポートをする仕事なんだろうな程度の認識しかなかったけど、今回のお話を聞いて社会福祉の仕事とはどんなものか詳しく知ることができ、もっと福祉について知りたいと思った」
・「講座を受ける前は、福祉・介護のイメージが膨らまなかったけれど受けてみて、楽しそうや勉強してみたいなど思った」
・「今までに何度か、福祉の仕事のやりがいやすばらしさをお聞きしていたので、良いイメージだったのですが、今回、改めてお話を聞いて、人の幸せを考えるすばらしい仕事だと分かりました」
・「色々な人の人生を支える仕事というところにすごい魅力を感じました」

などの回答が得られた。

⑶ 活動評価

本事業は今年度で９年目を迎え、県内の高校からのニーズも高まり、新規も含めて 12 校で実施することとなった。高校側の担当者の方々には、事業の目的や意図をより深く理解いただき、事前の打ち合わせから高校の状況や要望を丁寧に伝えていただいた。そのおかげで、各高校のニーズに応じた内容や時間帯などを工夫して実施できた。前述のアンケート結果からも、本事業は福祉･介護への理解を深め、ポジティブなイメージを醸成し、さらには仕事への魅力や価値を伝える上で有効であったと考える。

また、学生スタッフや外部講師にとっても、母校を先輩・後輩、教職員とともに訪問することは、自己を振り返るよい機会となっているようだ。事業の継続とともに、参加者の満足度をさらに高められる内容となるよう努めたい。

⑷ 講座の様子

①卒業生による講座

②社会福祉学部学生による講座

③高校生と卒業生のグループトーク

④教員による講座

5.糖尿病保健指導連携体制構築事業（血管病調整看護師フォローアップ）

看護学部 教授　内田 雅子

開催日時　通年

対　　象　第１期：佐川町立高北国民健康保険病院、高知県立あき総合病院の血管病調整看護師及び血管病調整看護師候補者
第２期：医療法人高田会 高知記念病院、医療法人尚腎会 高知高須病院、高知県厚生農業協同組合連合会 JA 高知病院、いの町立国民健康保険 仁淀病院、医療法人川村会 くぼかわ病院の血管病調整看護師
第３期：高知県・高知市病院企業団立高知医療センター、日本赤十字社 高知赤十字病院、社会医療法人仁生会 三愛病院、社会医療法人近森会 近森病院、高知大学医学部附属病院、高知県立幡多けんみん病院の血管病調整看護師及び血管病調整看護師候補者

参加病院　第１期：佐川町立高北国民健康保険病院、高知県立あき総合病院
第２期：医療法人川村会 くぼかわ病院
第３期：高知医療センター、社会医療法人仁生会 三愛病院、社会医療法人近森会 近森病院、高知大学医学部附属病院、高知県立幡多けんみん病院、計８病院

参加者数　261 人

教 職 員　看護学部 教授　内田 雅子、講師　山中 福子、助教　田中 雅美、助教　上村 明咲
事務局　三本 雅宣、谷 映美、中澤 雄也、森田 吹生、福重 彩音、松下 哲子、千頭 小百合（計 11 人）

⑴　事業概要

本事業の目的は、基幹病院の血管病調整看護師による糖尿病重症化予防を推進するための地域連携体制構築を支援することである。

令和６年度は、以下の表のように、８つの参加病院と６つの福祉保健所を４ブロックに分けて、地域の糖尿病重症化予防を推進する連携体制の強化支援策を講じた。

血管病調整看護師が地域の課題に目を向け解決に向けた活動を行えるよう、「基幹病院合同連絡会議」において、第８期高知県保健医療計画のアウトカム指標を視野に入れた課題・成果の可視化、課題抽出と対策を協議する方法を話し合えるよう支援した。また、「ブロック単位の事例検討会」において、重症化ハイリスク者の抱える問題の特徴と地域の支援体制づくりを話し合えるよう支援した。これら２種類の会議の企画・運営への支援は、次年度に向けて血管病調整看護師が地域の中で主体的かつ自律的活動を行えることを目的に実施した。

これらを支援する教員は、４～10 月に慢性期看護学領域教員が１人欠員のため、教員２人で各２ブロックを担当して助言指導を行い、事業責任者は両会議の参加者全体へ助言指導を行った。また、「基幹病院合同連絡会議」と「ブロック単位の事例検討会」の開催準備、及び高知県保健政策課と県福祉保健所との連携については、主に健康長寿研究センター事務職員３人が担当し、会議当日の運営については事務職員７人が担当した。

これら慢性期看護学領域教員３人と健康長寿研究センター事務職員７人による体制下で、８病院に対して地域連携体制を強化するための支援を実施した。

まず、８病院の血管病調整看護師が当番制で２ヶ月毎に主催する「基幹病院合同連絡会議」の企画・運営、及び参加者間の協議法を支援した。次に、4 ブロックごとに血管病調整看護師が福祉保健所とともに年１回主催する「ブロック単位の事例検討会」の企画・運営、及び当該ブロックの市町村保険者や保健医療福祉職者らとの協議方法を支援した。

安芸ブロック 基幹病院と福祉保健所	●高知県立あき総合病院 ●安芸福祉保健所
中央東・高知市ブロック 基幹病院と福祉保健所	●高知県・高知市病院企業団立 高知医療センター、社会医療法人仁生会 三愛病院、社会医療法人近森会 近森病院、高知大学医学部附属病院 ●高知市福祉保健所、中央東福祉保健所
中央西・高幡ブロック 基幹病院と福祉保健所	●佐川町立高北国民健康保険病院、医療法人川村会 くぼかわ病院 ●中央西福祉保健所、須崎福祉保健所
幡多ブロック 基幹病院と福祉保健所	●高知県立幡多けんみん病院 ●幡多福祉保健所

1)「基幹病院合同連絡会議」の協議方法

①会議の開催日時と当番病院の調整:合同説明会において、「基幹病院合同連絡会議」の開催予定日時、及び企画・運営の担当病院を相互の話し合いにより決定するよう周知した。8 つの基幹病院間で 2 ヵ月ごとの当番を決めて企画・運営を行った。

②対象者：

a　８病院の血管病調整看護師

b　参加を希望する 4 ブロックの福祉保健所、市町村保険者など

c　高知県保健政策課担当者、本事業を担当する高知県立大学教職員

③開催方法：対面会議と遠隔会議のハイブリッド方式（web 会議ホスト：当番病院、高知県立大学）

④アウトカム指標の絞り込みと周知：慢性期看護学領域教員は、高知県糖尿病医療提供体制のアウトカム指標、及び血管病看護師のケア調整活動のアウトカム指標のなかから、患者の重症化、ケア調整活動、及び地域連携活動の現状と課題を示す指標を絞り込み、本事業 Drobox へ集計表（エクセルファイル）を作成し、血管病調整看護師へ報告方法について周知した。また、初回の「合同連絡会議」で血管病調整看護師からでた意見をもとに、指標の一部を修正した。

⑤アウトカム指標の集計：８病院の血管病調整看護師は、「基幹病院合同連絡会議」の約１週間前までに、毎月の集計結果を本事業 Dropbox の各病院ファイルへ報告した。開始当初は、病院によってデータの組織化と管理方法が異なるため、血管病調整看護師はデータの抽出・分類・集計・報告に相当な時間と手間を要した。一方、血管病調整看護師は、そのプロセスを通じて院内全体の重症化の実態と専門別医療の動向を視野に入れる重要性に気づくこともできた。また、指標だけに即したデータの抽出・分類が難しいケースもあったが、その場合は各指標の「備考欄」にバリアンス情報を記載することによって、参加者はケース発生に影響した環境要因等の推定が可能になった。

⑥当番病院の企画・運営準備への支援：当番病院は、開催の約１ヵ月前までに議題とタイムテーブル、協議方法等を記載した議事次第等案（議題、タイムテーブル、参加者グループ編成案等）を作成し、事務局へ提出した。提出された議事次第等案に対して、ブロック担当教員と事業責任者からコメントし、必要に応じて修正版を依頼した。事務局は、高知県保健政策課担当者へ議事次第等案を提出し、会議内容や参加者の調整を依頼した。事務局は、当番病院から議事次第等の最終版が提出されると、福祉保健所と参加希望の市町村保険者へ web 会議の URL と議事次第等の電子ファイルをメール配信した。

⑦当番病院へのテーマ提案と協議方法の準備支援：当番病院は、慢性期看護学領域が運営する Slack を用いて、他の参加病院の血管病調整看護師へ「基幹病院合同連絡会議」で協議するテーマを事前提案し、意見交換を実施した。当番病院は、そのやりとりを通じて参加者が自病院の実態を振り返り、問題意識を明確化した上で会議に臨むよう準備を促していた。当番病院は、当日のテーマと参加予定者をふまえ、事務職員の支援を受けて web グループ会議室を設定した。協議方法は、まずグループ参加者内で各病院の問題意識と対策例を共有・集約しグループ発表した。次に、グループ毎の観点を比較検討し、全体で真の課題を明確化し対策案を検討するという、流れである。

⑧会議当日の支援：事務局は、開始 10 分前までに当番病院や遠隔参加者との通信状況をテストし、タイムテーブル、集計表の画面共有、手元資料の配布状況等について直前確認を済ませた。当番病院の血管病調整看護師が司会・進行役を務め、８病院から Zoom 画面の自病院の集計表に沿って２か月間のアウトカム指標の推移、及び重症化予防・ケア調整・地域連携の活動状況と課題を報告した。教員は、参加者へ８病院の現状と課題を比較検討して全体の共通課題と地域もしくは病院特有の課題について明確化するよう促し、次回の検討課題を焦点化できるよう支援した。最後に、高知県保健政策課担当者と本事業担当教員は、協議内容へフィードバックや提言を行った。２ヶ月ごとの開催のためか、前会議の趣旨、及び課題と対策が継続的に共有されないという問題が発生した。会議の都度、当番病院の興味・関心のあるテーマが議題として提案される傾向が見受けられた。血管病調整看護師が、病院と地域をつなぐ重症化と地域連携の共通問題を解決するための認知枠組みをつくりあげるには、さらなる時間を要することが伺われた。

2)「ブロック単位の事例検討会」

①会議の開催日時と当番ブロックの調整：合同説明会において、「ブロック単位の事例検討会」の開催予定日時、及び企画・運営の担当ブロックを相互の話し合いにより決定するよう周知した。4 つのブロック間で３ヶ月ごとの当番を決めて企画・運営を行う予定であったが、2 つのブロックは、複数病院間で企画・運営を協働すること自体が困難であり、実際に 1 つのブロックが実施に至らなかったことから、今後の方法論上の課題が残された。

②対象者：

a　当番ブロック、及び参加を希望する他ブロックの血管病調整看護師

b　当番ブロック、及び参加を希望する他ブロックの福祉保健所、市町村保険者、保健医療福祉職

c　高知県保健政策課担当者、本事業を担当する高知県立大学教職員

③開催方法：対面会議と遠隔会議のハイブリッド方式

web 会議ホスト：当番ブロックの福祉保健所、高知県立大学

④当番ブロック担当病院の企画・運営準備への支援：当番ブロックの担当病院は、会議の約 1 ヵ月半前までに、ブロックの地域課題を検討するための議題を整理し、協議に適する事例を選択し、事務局へ議事次第等案（目的・目標、議題、タイムテーブル、事例資料、参加者グループ編成案等）を提出した。提出された議事次第等案に対して、ブロック担当教員と事業責任者からコメントし、必要に応じて修正版を依頼した。事務局は、高知県保健政策課担当者へ議事次第等案を提出し、会議内容や参加者の調整を依頼した。事務局は、当番ブロック病院から議事次第等の最終版が提出されると、福祉保健所と参加希望の上記対象者へ web 会議の URL と議事次第等の電子ファイルをメール配信した。

⑤当番ブロックへの協議テーマと協議方法の準備支援：当番ブロックの基幹病院と福祉保健所は、自・他ブロックからの遠隔参加者がいる場合、事務職員の支援を受け web グループ会議室を設定した。協議方法は、グループ参加者内で、事例の抱える複雑な問題を理解し合うとともに各専門家ならではの見立てと支援経験を共有し、事例の問題解決に必要な地域連携強化の検討を行い、グループ発

表する。次に、グループ間の協議として、地域全体の共通課題とサブ地域特有の現状と課題を整理し、今後の地域特性に応じた連携の在り方と連携強化の対策を検討する、という流れである。

⑥会議当日の支援：事務局は、開始10分前までに当番ブロックの福祉保健所や遠隔参加者との通信状況をテストし、タイムテーブル、スライドの画面共有、手元資料の配布状況等について直前確認をした。当番ブロック病院の血管病調整看護師は、司会・進行役を務め、まず参加者（所属機関・職名・役割等）を紹介し、次いで本日の目的・目標、事例検討会の進め方、協議結果の集約方法について説明した。最後に、高知県保健政策課担当者と本事業担当教員は、協議内容へのフィードバックや提言を行った。

⑵ 活動成果

Ⅰ．血管病調整看護師の活動支援

第1期～第3期モデル基幹病院の糖尿病重症化予防の連携支援体制の強化として、以下の日程で「基幹病院合同連絡会議」と「ブロック単位事例検討会」を実施した。

1）第1回　基幹病院合同連絡会議（合同事業説明会）

・日時：令和6年6月11日（火）15時～16時15分
・場所：高知県立大学
・方法：Zoomによる遠隔開催
・プログラム：
　(1)「高知県における糖尿病重症化予防のための地域連携体制と血管病調整看護師の役割について」
　　・学外講師：高知県健康政策部保健政策課 主幹　川村 真奈恵氏
　(2) 令和6年度本事業の進め方、及び血管病調整看護師活動支援計画
　　・学内講師：内田 雅子
　　・参加者：モデル基幹病院・血管病調整看護師、血管病調整看護師候補者（高知医療センター7人、三愛病院2人、近森病院4人、高知大学医学部附属病院3人、高知県立幡多けんみん病院7人、くぼかわ病院4人、高知県立あき総合病院4人、佐川町立高北国民保険病院2人　計8施設・33人）
　　保健所（安芸福祉保健所1人、中央東福祉保健所2人、中央西福祉保健所4人、須崎福祉保健所4人、幡多福祉保健所3人　計5施設・14人）
　　高知県健康政策部保健政策課1人
・事業運営メンバー：内田 雅子、山中 福子、上村 明咲、三本 雅宣、谷 映美、森田 吹生、
　　松下 哲子　計7人
・参加者総数：計55人（事業運営メンバー含む）

2）第2回　基幹病院合同連絡会議

・日時：令和6年8月1日（木）14時～16時
・場所：高知県立大学
・方法：Zoomによる遠隔開催
・運営担当病院：高知県立あき総合病院
・プログラム：
　(1) 各施設の活動報告と意見交換
　　高知県立あき総合病院、近森病院、幡多けんみん病院
　(2) ディスカッション

テーマ「壮年期の患者支援の現状と課題」
(3) 高知県保険政策課からのフィードバック・助言
(4) 高知県立大学からのフィードバック・助言
(5) 次回以降の会議について
・参加者：モデル基幹病院・看護部長、血管病調整看護師、血管病調整看護師候補者（三愛病院１人、近森病院４人、高知県立幡多けんみん病院４人、高知県立あき総合病院３人　計４施設・12 人）
保健所（須崎福祉保健所１人、幡多福祉保健所２人　計２施設・３人）
高知県健康政策部保健政策課２人
・事業運営メンバー：内田 雅子、山中 福子、上村 明咲、三本 雅宣、谷 映美、森田 吹生　計６人
・参加者総数：計 23 人（事業運営メンバー含む）

3）第３回　基幹病院合同連絡会議
・日時：令和６年 10 月３日（木）14 時～ 16 時
・場所：高知県立大学
・方法：Zoom による遠隔開催
・運営担当病院：三愛病院
・プログラム：
(1) 各施設の活動報告と意見交換
三愛病院、高知県立あき総合病院、佐川町立高北国民健康保険病院、高知医療センター
(2) ディスカッション
テーマ「患者評価 IM-CAG の活用の実際
治療中断者支援及び行政との連携強化への課題」
(3) 高知県保健政策課・福祉保健所・保険者からのフィードバック・助言
(4) 高知県立大学からの助言・フィードバック
(5) 次回の会議について
・参加者：モデル基幹病院・血管病調整看護師、血管病調整看護師候補者
（高知県立あき総合病院６人、高知大学医学部附属病院２人、三愛病院２人、近森病院４人、佐川町立高北記念病院１人､高知医療センター３人､高知県立幡多けんみん病院６人　計７施設・24 人）
高知県健康政策部保健政策課１人
・事業運営メンバー：内田 雅子、山中 福子、上村 明咲、三本 雅宣、中澤 雄也、松下 哲子、
千頭 小百合　計７人
・参加者総数：計 32 人（事業運営メンバー含む）

4）第４回　基幹病院合同連絡会議
・日時：令和６年 12 月 20 日（金）14 時～ 16 時
・場所：高知県立大学
・方法：Zoom による遠隔開催
・運営担当病院：幡多けんみん病院
・プログラム：
(1) 各施設の活動報告と意見交換
高知県立あき総合病院、佐川町立高北国民健康保険病院、くぼかわ病院、高知医療センター、

三愛病院
(2) ディスカッション
(3) テーマ「糖尿病性透析予防強化プログラム対象者の抽出と介入について」
(4) 高知県保健政策課からのフィードバック
(5) 高知県立大学からのフィードバック・助言
(6) 次回の会議について
・参加者：モデル基幹病院・血管病調整看護師、血管病調整看護師候補者
（高知医療センター５人、三愛病院２人、高知県立幡多けんみん病院７人、くぼかわ病院２人、
高知県立あき総合病院３人、佐川町立高北国民保険病院２ 人　計６施設・21 人）
保健所（中央東福祉保健所２人、中央西福祉保健所２人、須崎福祉保健所１人、幡多福祉保
健所２人　計４施設・７人）
高知県健康政策部保健政策課１人
・事業運営メンバー：内田 雅子、山中 福子、上村 明咲、三本 雅宣、中澤 雄也、松下 哲子、
千頭 小百合　計７人
・参加者総数：計 36 人（事業運営メンバー含む）

5）第５回　基幹病院合同連絡会議
・日時：令和７年２月 14 日（金）14 時～ 16 時
・場所：高知県立大学
・方法：Zoom による遠隔開催
・運営担当病院：高知医療センター
・プログラム：
(1) 各施設の活動報告と意見交換
近森病院、三愛病院、佐川町立高北国民健康保険病院、あき総合病院、くぼかわ病院、
幡多けんみん病院、高知医療センター
(2) ディスカッション
テーマ「糖尿病教育に関する取り組みについて」
「血管病看護師の活動が始まり、従来と比べどのように変化しているのか」
(3) 高知県保健政策課からのフィードバック
(4) 高知県立大学からのフィードバック・助言
・参加者：モデル基幹病院・血管病調整看護師、血管病調整看護師候補者
（高知医療センター６人、近森病院４人、三愛病院２人、
高知県立あき総合病院４人、高知県立幡多けんみん病院１人、
佐川町立高北国民保険病院１人　計６施設 18 人）
保健所（中央東福祉保健所１人、中央西福祉保健所１人、須崎福祉保健所１人、
幡多福祉保健所１人　計４施設・４人）
高知県健康政策部保健政策課２人
・事業運営メンバー：内田 雅子、山中 福子、田中 雅美、上村 明咲、中澤 雄也、福重 彩音、
千頭 小百合　計７人
・参加者総数：計 31 人（事業運営メンバー含む）

6）ブロック単位の事例検討会（安芸）
・日時：令和６年９月 26 日（木）14 時～ 16 時
・場所：安芸総合庁舎２階大会議室
・方法：対面と遠隔によるハイブリッド開催
・運営担当病院：高知県立あき総合病院
・プログラム：
（1）高知県立あき総合病院：血管病重症化予防における介入事例の傾向と課題
（2）各参加施設・団体：糖尿病患者への支援の現状と課題
（3）安芸圏域の課題の整理と共有・解決策に向けてのディスカッション
テーマ【治療中断者へのサポートで協力し合えること】
（4）安芸圏域の保健医療福祉連携に向けて、今後の方針
・参加者：【安芸ブロック（対面参加）】
高知県立あき総合病院２人、安芸市健康介護課１人、室戸市保険介護課２人、中芸広域連合保健福祉課３人、北川村住民課１人、芸西村健康福祉課２人、医療法人祐和会津田クリニック１人、高知県健康政策部安芸福祉保健所健康障害課３人、高知県健康政策部保健政策課１人　計９施設・16 人
【安芸ブロック外（聴講：遠隔参加）】
高知医療センター２人、くぼかわ病院１人、高知県立幡多けんみん病院２人、
須崎福祉保健所健康障害課２人、中央西福祉保健所１人　計５施設・８人
・事業運営メンバー：対面参加（内田 雅子）、遠隔参加（山中 福子、上村 明咲、三本 雅宣、松下 哲子）
計５人
・参加者総数：計 29 人（事業運営メンバー含む）

7）ブロック単位の事例検討会（幡多）
・日時：令和７年１月 10 日（金）14 時～ 16 時
・場所：幡多福祉保健所
・方法：対面と遠隔によるハイブリッド開催
・運営担当病院：高知県立幡多けんみん病院
・プログラム：
（1）高知県立幡多けんみん病院：幡多けんみん病院の保険者との連携の事例紹介と事例における課題
（2）幡多圏域の課題の整理と共有・解決策に向けてのディスカッション
テーマ「多重課題のある患者に対する地域連携について」
（3）幡多圏域の保健医療福祉連携に向けて、今後の課題
・参加者：【幡多ブロック（対面参加）】
高知県立幡多けんみん病院９人、宿毛市健康推進課１人、大月町健康福祉課１人、三原村住民課１人、四万十市地域包括支援センター１人、グリーンハーツ訪問看護ステーション四万十１人（Zoom）、幡多福祉保健所健康障害課３人、高知県健康政策部保健政策１人　計８施設・18 人
【幡多ブロック外（聴講：遠隔参加）】
高知県立あき総合病院１人、安芸福祉保健所１人、須崎福祉保健所１人、中央東福祉保健所１人、高知県健康政策部保健政策課１人　計５施設・５人
・事業運営メンバー：対面参加（内田 雅子）、遠隔参加（山中 福子、上村 明咲、中澤 雄也、千頭 小百合）
計５人

・参加者総数：計 28 人（事業運営メンバー含む）

1）ブロック単位の事例検討会（高知・中央東）
・日時：令和 7 年 3 月 3 日（月）14 時～ 16 時
・場所：中央東福祉保健所
・方法：対面と遠隔によるハイブリッド開催
・運営担当病院：近森病院
・プログラム：
（1）近森病院：重症化患者の事例紹介、重症化予防と今後の課題
（2）高知・中央東圏域の課題の整理と共有・解決策に向けてのディスカッション
テーマ「重症化予防を可能にする看護実践と地域・看看連携のあり方について
～看護の標準化と継続に向けてできること～」
（3）高知・中央東圏域の保健医療福祉連携に向けて、今後の課題
・参加者：【高知・中央東ブロック】
近森病院 3 人、高知医療センター 5 人（Zoom）、三愛病院 2 人（Zoom）、佐川町立高北国民健康　保険病院 1 人（Zoom）、ケアサポートあき 2 人、指定居宅介護支援事業所ゆい 1 人、高知市保健医療課 3 人（Zoom）　計 7 施設・17 人
【高知・中央東ブロック外（聴講・Zoom）】
須崎福祉保健所 1 人、幡多福祉保健所 1 人、中央西福祉保健所 1 人　計 3 施設・3 人
・事業運営メンバー：対面参加（内田 雅子）、遠隔参加（田中 雅美、上村 明咲、中澤 雄也、千頭 小百合）
計 5 人
・参加者総数：計 25 人（事業運営メンバー含む）

⑶ 活動評価

Ⅰ．血管病調整看護師のフォローアップ

令和 6 年度は、「基幹病院合同連絡会議」を 4 つの基幹病院（高知県立あき総合病院、社会医療法人仁生会 三愛病院、高知県立幡多けんみん病院、高知医療センター）が企画・運営し、「ブロック単位の事例検討会」を 3 つのブロック（安芸ブロック、幡多ブロック、中央東・高知市ブロック）で基幹病院（高知県立あき総合病院、高知県立幡多けんみん病院、社会医療法人近森会 近森病院）が企画・運営した。

これら会議は、多機関・関係者への参加依頼と調整により実現したが、その多くは高知県保健政策課と高知県立大学健康長寿研究センター事務職員の連携によって支えられた。また協議のテーマ・方法は、各ブロックの福祉保健所と本事業担当教員の準備支援と連携によって支えられた。このような貴重な機会を血管病調整看護師だけで実現することは難しく、本事業の多数の関係者に協働いただき、ようやく実現できた。

これら活動を通して、血管病調整看護師は地域の保健医療福祉職者とともに協議することで、地域住民の重症化を見渡す視座、重症化予防を地域単位で捉える視野、看護師のケア調整役割を発揮する視点がさらに一歩前進したことは評価できる。

未だコロナをはじめとする複数の感染症が常時警戒されるなか、病院看護職者のマンパワー不足も重なり、血管病調整看護師の活動継続はますます困難な状況に陥っている。医療改革による臨床現場の変動も大きく、血管病調整看護師の活動が看護職全体へ波及するようなケア政策や看護教育が今後一層必要となるであろう。

⑷　会議の様子

①基幹病院合同連絡会議

Ⅲ　㊒知県の医療機関、社会福祉施設等との健康長寿を推進する活動

1. 高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会

高知医療センターと高知県立大学との包括的連携に関する協定書

（目的）

第１条　高知医療センターと高知県立大学（以下「両機関」という。）は，両機関が行う医療・健康・福祉・栄養分野における知的・人的資源の交流連携を推進し，相互の教育・研究の一層の進展と地域社会の発展に資することを目的として，包括的連携協定（以下「本協定」という。）を締結する。

（連携項目）

第２条　本協定による主な連携項目は，次のとおりとする。

(1)　学術研究及び教育に関すること。

(2)　人材育成・人事交流に関すること。

(3)　地域・社会貢献に関すること。

(4)　その他両機関が前条の目的を達成するために必要と認めること。

（連絡調整窓口の設置）

第３条 前条に掲げる連携を円滑に進めるため，両機関に窓口を設置し，必要な連絡調整を行う。

（経費）

第４条　本協定に基づく連携の実施に要する経費は，原則として双方においてそれぞれ応分に負担することとする。

（協定期間）

第５条　本協定の期間は，協定締結日から平成 24 年３月 31 日までとする。ただし，期間満了の２か月前までに両機関のいずれからも協定の終了又は見直し等の申し出がないときは，本協定は，さらに１年間更新するものとし，その後も同様とする。

（協議）

第６条　本協定に定めのない事項又は本協定の実施に関し必要な事項は，両機関で協議のうえ定めるものとする。

本協定締結の証として本書を２通作成し，両機関が各１通を保有する。

平成２３年６月２８日

高知医療センター　　高知県立大学

病院長　堀見忠司　　大学長　南裕子

令和６年度　高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会　委員名簿

（令和６年４月１日～）

高知医療センター		高知県立大学	
〔副委員長〕　病院長	小野　憲昭	〔委員長〕　学長	甲田　茂樹
副院長兼地域医療センター長	林　　和俊	副学長	池田　光徳
統括調整監兼事務局長	濵田　　仁	事務局長	井上　隆雄
看護局長	田鍋　雅子	健康長寿研究センター長	久保田聰美
栄養局長	十萬　敬子	看護学部長	大川　宣容
救命救急センター長	齋坂　雄一	健康栄養学部長	渡邊　浩幸
地域医療センター副センター長	谷　洋次郎	社会福祉学部長	長澤紀美子
		総務部長（災害対策担当）	宮脇　広道

令和６年度　高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会　４部会

（令和６年４月１日～）

健康長寿・地域医療連携部会			
〔副部会長〕　副院長兼地域医療センター長	林　　和俊	〔部会長〕　健康長寿研究センター長	久保田聰美
看護局長	田鍋　雅子	副学長	池田　光徳
栄養局長	十萬　敬子	看護学部長	大川　宣容
地域医療センター副センター長	谷　洋次郎	社会福祉学部長	長澤紀美子
		健康栄養学部長	渡邊　浩幸
看護・社会福祉連携部会			
〔副部会長〕　看護局長	田鍋　雅子	〔部会長〕　看護学部長	大川　宣容
看護局員	野中　真澄・辻　由紀子 中尾　裕子・岩崎　美幸 池田　久乃・細川　悦三 岡林　志穂・藤本　真紀	看護学領域責任者	
地域医療センター副センター長	谷　洋次郎	社会福祉学部長	長澤紀美子
地域医療連携室室長	橋本　　恵	社会福祉学部教員	
健康栄養連携部会			
〔副部会長〕　栄養局長	十萬　敬子	〔部会長〕　健康栄養学部長	渡邊　浩幸
栄養局	正職 13 名	健康栄養学部教員	
災害対策連携部会			
〔副部会長〕　救命救急センター長 齋坂　雄一（プロジェクトリーダー）		〔部会長〕　総務部長（災害対策担当）	宮脇　広道
医療局	盛實　篤史（プロジェクトサブリーダー）	文化学部	梶原　太一
看護局	岡崎　　啓 秋田　江氏	看護学部	木下　真里
薬剤局	田島　千愛 西川　裕貴	社会福祉学部	辻　　真美
医療技術局	廣瀬　泰久 久米　利明	健康栄養学部	島田　郁子
栄養局	森本　絢音 坂本　彩乃		
事務局	中村　真帆		

高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会設置要綱

（目的）

第１条　高知医療センターと高知県立大学（以下「両機関」という。）は、包括的連携協定に基づき、両機関の連携を推進するため、高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会（以下「協議会」という。）を設置する。

（審議事項）

第２条　協議会は、次に掲げる事項を審議する。

⑴　学術研究及び教育に関すること。

⑵　人材育成・人事交流に関すること。

⑶　地域・社会貢献に関すること。

⑷　その他両機関が前条の目的を達成するために必要と認めること。

（組織）

第３条　協議会は、次に掲げる者をもって組織する。

⑴　高知医療センター　病院長

⑵　高知医療センター　副院長のうち病院長が指名する者

⑶　高知医療センター　統括調整監

⑷　高知医療センター　看護局長

⑸　高知県立大学　学長

⑹　高知県立大学　副学長のうち学長が指名する者

⑺　高知県立大学　事務局長

⑻　高知県立大学　健康長寿センター長

⑼　第５条の規定により設置される部会の正副部会長

⑽　その他必要に応じ病院長及び学長が指名する者

（委員長及び副委員長）

第４条　協議会に、委員長及び副委員長を置く。

２　委員長及び副委員長の任期は１年とし、病院長及び学長が交互にその職務を行う。

３　委員長は、必要に応じ協議会を招集し、その議長となり、協議会を主宰する。

４　委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。

（部会）

第５条　特定の連携項目について審議するため部会を設置する。

（庶務）

第６条　協議会の庶務は、委員長が属する機関において行う。

（協議）

第７条　本要綱に定めのない事項又は本要綱の実施に関し必要な事項は、協議会で協議のうえ定めるものとする。

附則

本要綱は、平成２３年６月２８日から施行する。

附則

本要綱は、令和６年４月１日から施行する。

高知医療センターと高知県立大学との連携事業（23.9.5　第２回協議会決定）

１　健康長寿・地域医療連携部会（看護部会、栄養部会に共通する事業も所掌）

（組織）

○　高知医療センター　副院長、地域医療連携室長、総合周産期母子医療センター長、救急救命センター長、看護局長、栄養局長

○　高知県立大学　副学長、健康長寿センター長、看護学部長、社会福祉学部長、健康栄養学部長、防災対策プロジェクト長

（実施事業）

①　共同講演会、合同研修会、合同学習会の開催
②　SP 研究会、スキルスラボ研修会の開催
③　ボランティア育成事業の実施
④　災害訓練など災害対応に関する事業の実施
⑤　地域・社会貢献に関する事業の実施
⑥　その他健康長寿、地域医療連携活動の実施

２　看護・社会福祉連携部会（看護連携型ユニフィケーション事業協議会を発展）

（組織）

○　高知医療センター　看護局長、看護局員、地域医療連携室長、医療ソーシャルワーカー
○　高知県立大学　看護学部長、看護学領域責任者、社会福祉学部長

（実施事業）

①　学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供
②　基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力
③　教員によるコンサルテーションの実施
④　臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究
⑤　県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催
⑥　その他看護・社会福祉連携活動の実施

３　健康栄養連携部会

（組織）

○　高知医療センター　栄養局長、栄養局員
○　高知県立大学　健康栄養学部長、健康栄養学部教員

（実施事業）

①　管理栄養士養成カリキュラムの一環としての臨地実習の実施
②　定期的学習会、栄養管理事例検討会、セミナーの開催
③　患者を対象とした治療食の実践講習会の開催
④　共同研究
⑤　栄養局スタッフの人材育成の一翼を高知県立大学及び大学院が担う
⑥　地域貢献、社会貢献
⑦　高知医療センター「食」モデルの開発・検証・確立
⑧　健康栄養学部教員によるコンサルテーションの実施
⑨　その他健康栄養包括連携活動の実施

4　災害対策連携部会（健康長寿・地域医療連携部会から２４．５．１５独立）

（組織）

○　高知医療センター　救命救急センター長、医療局員、看護局員、薬剤局員、医療技術局員、栄養局員、事務局員，ＩＴセンター職員（１７人）

○　高知県立大学　法人災害対策プロジェクト長、看護学部教員、社会　福祉学部教員、健康栄養学部教員、事務局職員（８人）

（実施事業）

①　合同災害訓練の実施

②　災害対策に関する研修会・学習会の開催

③　その他災害対策連携活動の実施

高知医療センターと高知県立大学との連携事業（H31.3.6　連携協議会決定）

1　健康長寿・地域医療連携部会（看護・社会福祉連携部会、健康栄養連携部会に共通する事業も所掌）

（組織）

○　高知医療センター　副院長兼地域医療センター長、看護局長、栄養局次長、地域医療センター副センター

○　高知県立大学　副学長、健康長寿センター長、看護学部長、社会福祉学部長、健康栄養学部長

（実施事業）

①　共同講演会、合同研修会、合同学習会の開催

②　医療コンフリクト・マネジメント研修会、スキルスラボ研修会の開催

③　ボランティア育成事業の実施

④　地域・社会貢献に関する事業の実施

⑤　その他健康長寿、地域医療連携活動の実施

高知医療センターと高知県立大学との連携事業（R ７．３．３　連携協議会決定）

1　健康長寿・地域医療連携部会（看護・社会福祉連携部会、健康栄養連携部会に共通する事業も所掌）

（組織）

○　高知医療センター　副院長兼地域医療センター長、看護局長、栄養局次長、地域医療センター副センター

○　高知県立大学　副学長、健康長寿センター長、看護学部長、社会福祉学部長、健康栄養学部長

（実施事業）

①　各機関で実施する講演会及び研修会等の講師派遣や参加者募集等の協力

②　ボランティア育成事業の実施

③　地域・社会貢献に関する事業の実施

④　その他健康長寿、地域医療連携活動の実施

高知医療センター・高知県立大学包括的連携協定による取り組み経過

（令和７年度２月末現在）

年月日	事　業　内　容　等	場　　所	備　考
R6. 6 .10（月）	第１回健康栄養連携部会	高知県立大学本部・健康栄養学部棟　A216	健康栄養連携部会
R6. 7 . 1 （月）	第２回災害対策委員会	高知医療センター	災害対策連携部会
R6. 8 . 1 （木）	第１回健康長寿・地域医療連携部会 ・R ５年度後期の活動報告及び評価 ・R ６年度の事業計画及び進捗状況	高知県立大学本部・康栄養学部棟　A219	健康長寿・地域医療連携部会
R6.8.27 ～ 9.3	第１回看護・社会福祉連携部会（看護部会）	メール開催	看護・社会福祉連携部会
R6.9.18（水）	第１回高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会 ・R ５年度後期の活動報告及び評価 ・R ６年度の事業計画及び進捗状況	高知県立大学本部・健康栄養学部棟　A219	健康長寿・地域医療連携部会
R6.10.19（土）	高知医療センタ学術集会において高知県立大学生発表	高知医療センター くろしおホール	健康長寿・地域医療連携部会
R6.11.24（日）	みさとフェア	三里中学校	健康長寿・地域医療連携部会
R6.12.2（月）	第６回災害対策委員会	高知医療センター	災害対策連携部会
R6.12.22（日）	「医療コンフリクト・マネジメント研修」合同研修会 講師：徳永盛保氏（鷹の子病院　事務長）	高知県立大学本部・健康栄養学部棟 A216・217	健康長寿・地域医療連携部会
R7. 2 . 1 （土）	高知医療センター・高知県立大学共催研修会 講演 「みんなが健やかで心豊かに暮らせる社会のために」	高知城ホール４階 多目的ホール	健康長寿・地域医療連携部会
R7. 2 . 4 （火）	第２回健康長寿・地域医療連携部会 ・R ６年度事業実施状況 ・R ７年度事業実施計画	高知県立大学本部・健康栄養学部　A219	健康長寿・地域医療連携部会
R7. 2 .17（月）	第２回看護・社会福祉連携部会（看護部会）	高知医療センター がんサポートセンター４階研修室	看護・社会福祉連携部会
R7. 3 . 3 （月）	第２回高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会 ・R 6年度後期の活動報告（追加分）及び評価 ・R ７年度の事業計画	高知県立大学本部・健康栄養学部棟　A216	健康長寿・地域医療連携部会

2.高知医療センター包括的連携事業　医療コンフリクト・マネジメント研修

健康長寿研究センター長　久保田 聰美

開催日時	令和 6 年 12 月 21 日（土）13 時～ 17 時 10 分
開催場所	高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟 A216
対　　象	高知医療センター職員・高知県立大学教職員・大学院生・学部生
参加者数	19 人
教 職 員	健康長寿研究センター長　久保田 聰美
	事務局　森田 吹生（計 2 人）
外部講師	日本医療メディエーター協会 シニアトレーナー
	鷹の子病院 事務長　徳永 盛保 氏

⑴　事業概要

本事業は包括的連携協定を締結している高知医療センターとの合同企画であり、今年度で 4 回目の開催となった。

昨年に引き続き、「患者はなぜ怒る？」と題して日本医療メディエーター協会シニアトレーナー・鷹の子病院事務長である徳永 盛保 氏を講師にお迎えして、医療メディエーターが身につけるべきスキルをご紹介いただき、医療にかかわる様々な場面において活用できる医療メディエーターの手法を用いた苦情の予防や初期対応方法について学ぶ機会とした。

はじめに、医療コンフリクト・マネジメントについての講義を受けた。

医療の現場には、様々なコンフリクトが存在する。患者の価値観も多様化している中、様々なコンフリクトの根っこある相手（患者･家族）の認識を理解することが重要である。つまり､認識の違いを生む「認知フレーム」を構成する要素の違いに気づくことからスタートする必要がある。自分（医療従事者）と相手（患者･家族）とは違う。外来での診療場面ひとつとってみても、立場が違うと時間の捉え方、見え方、診察内容の理解（受け止め方）、それぞれの背景や個人的な事情、すべてが違う。

しかし、お互いが違うということを忘れて、自分の立場から主張してしまうと、コンフリクトは解決しない。だからこそ、メディエーションの基本姿勢「傾聴・共感・対話」を一人ひとりのスタッフが身に付けることがこの研修の目的ともいえる。

日常の診療場面では、ちょっとした行き違いからトラブルになることは少なくない。そんな小さなトラブルに適切な初期対応（＝セルフメディエーション）が出来れば、きっとメディエーターの出番も少なくなる。そこで、メディエーションに関する理論的な講義に続き、具体的な事例やビデオ動画をみながら、トラブル予防と初期対応における 7 つの心得を学んだ。

⑵　活動成果

講演を通じて、コンフリクト・マネジメント、医療メディエーション、苦情の生成とその対処方法を理解した。またグループワークを通して、医療メディエーションの考え方や簡単なスキルを理解した。最後に実施したロールプレイを体験することで共感的傾聴と対話の実践を行った。

⑶　活動評価

本研修には講演者を除いて 19 人の参加があり､本学から 3 人が参加した。大学院生は 1 人､学部生 1 人、

事務局１人が参加した。すべての参加者が医療メディエーションとは何かを理解でき、今後の業務に役立つと回答した。

個別のご意見はアンケート結果を参照されたい。

⑷ 研修会の様子

①徳永 盛保 氏による講義

②ロールプレイの様子

医療コンフリクト・マネジメント研修会　参加者＆アンケート集計

日　時:　令和6年12月21日（土）13:00～17:10

会　場:　高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟2F 第1・2会議室

講　師:　日本医療メディエーター協会シニアトレーナー
鷹の子病院事務長　徳永盛保氏

【参加者数】(途中退席者含む)

参加者総数	19	
高知医療センター	16	84%
高知県立大学	3	16%

【高知医療センター参加者の所属内訳】

部署	人数
医療局	1
看護局	7
医療技術局	2
栄養局	3
薬剤局	1
事務局	3
その他	2
合計	19

【高知医療センター参加者の職種】

職種	人数
医師	1
看護師	6
助産師	1
検査技師	2
栄養士	3
薬剤師	1
事務・社会福祉士	2
合計	16

【高知県立大学参加者の所属内訳】

部署	人数
大学院	1
学部	1
事務局	1
合計	3

【高知県立大学参加者の職種】

職種	人数
教員	
大学院生	1
学部生	1
事務	1
合計	3

アンケート結果

【1. あなたの職種等について】

(1)職種

職種	人数	割合
① 医師	1	5.3%
② 看護師・助産師	7	36.8%
③ 検査技師・栄養士	5	26.3%
④ 教員・学部生・院生	2	10.5%
⑤ 事務	3	15.8%
⑥ その他	1	5.3%
合計	19	100.0%

(2)年齢

年齢	人数	割合
① 10歳代	0	0.0%
② 20歳代	2	10.5%
③ 30歳代	3	15.8%
④ 40歳代	8	42.1%
⑤ 50歳以上	6	31.6%
⑥ 未回答	0	0.0%
合計	19	100.0%

【2. 研修会の運営について】

評価		件数
(1)時間	適当	12
	長い	7
	未回答	0
(2)場所	適当	18
	不適当	1
	未回答	0
(3)進行と運営	適当	19
	不適当	0
	未回答	0

【3. 医療メディエーションとは何か理解できましたか】

評価	件数	割合
⑴よく理解できた	10	52.6%
⑵おおむね理解できた	9	47.4%
⑶あまり理解できなかった	0	0.0%
⑷理解できなかった	0	0.0%
未回答	0	0.0%
合計	**19**	**100.0%**

【4. 初期対応の重要性について理解できましたか】

評価	件数	割合
⑴よく理解できた	14	73.7%
⑵おおむね理解できた	5	26.3%
⑶あまり理解できなかった	0	0.0%
⑷理解できなかった	0	0.0%
未回答	0	0.0%
合計	**19**	**100.0%**

【5. 本日の研修の内容は今後の業務に役立つと思いますか】

評価	件数	割合
⑴非常にそう思う	12	63.2%
⑵そう思う	7	36.8%
⑶あまり思わない	0	0.0%
⑷思わない	0	0.0%
未回答	0	0.0%
合計	**19**	**100.0%**

⑴⑵を選ばれた方は、どのように役立てようと思いますか

共感の言葉、タイミング、質問の仕方等で話し手の想いが変わる事ができるので、今後の業務に役立てたい。

・日常からメディエーションマインドを意識していきたいと思いました
・今回学んだ質問技法を活用し、日頃から対話を拓く情報の可視化をしていくことでコンフリクトに発展しないようにしていく
・まずは、怒りは“そのまま受け止める”こと

メディエーションの2つの定義についてと、初期対応の基本について、日々の患者さんとの関わり合いの中で、常に気にかけ、言葉をかわす大切さを考えていきたい。

外来での業務が多く、初めて当院に来たという患者の対応も少なくない中、当院に対するイメージが良いものであってほしいので、患者一人一人に、メディエーションマインドをもって対応しようという意識をもてた。

患者対応で。

共感からの対話の広げ方。

表面上の怒りに対応するのではなく、深層にある相手の思いを知るというお話がとても印象に残りました。いつもネガティブな相手の言葉に反応してしまう傾向があるので受け止め方を意識できたらいいなと思います。

怒っている、悪口を言う等の方の初期対応。

臨床にもどった時に、初期対応が必要な場面は多く、立場的にも増加してくると思うので、メディエーションマインドを日常的にもって、働いていきたいと思う。患者と医療者の双方だけでなく、医療者間でも活用できると思う。

患者だけでなく、日頃から考え方の違う（認知ルームの違い）職員への対応をどうすればこちらに共感して聞いてもらえるようになるか、という所でも今回の研修は大変役に立つと思います。

患者対応で役立ちますし、スタッフ指導の場面でも意識して活用していきたいです。認知フレームの相違については、まず、頭において対応していきます。

実際の患者さんとの対応に、すぐに使える技術だと思いました。まず、共感を忘れないように。

初期対応を間違うと大変。PTの心理、隠された思いに気づくことが必要。

明日からすぐに役立つ内容でしたので、受講して良かったです。今後も学んでいきたいと思います。

まずは、傾聴する。

理解は出来ても実践は難しい。それでも医療に場で、第3者目線を心掛けたい。

評価せず、そのまま受け止める。話を聞いてもらう事を患者さんは求めていることが分かった。まずは、話を聞く姿勢を大切にしていきたい。

【6. 本日の研修プログラムの中で特に良かったもの、自分に必要だと思ったものがあれば教えてください】

問題変容の技法（反転・中立）をもっと身につけたいと思いました。

傾聴・共感・対話の姿勢。共感能力をトレーニングして、身につける。日常の中で言葉に出すこと。

共感していることを相手に分かってもらえる話し方、言葉にする方法が自分で実際に考えて書くことで理解しやすかったです。事実を拡げる質問の仕方が自分には足りないと思いました。

会話を引き出す問いかけが難しい。

「対話を拓く」という考え方が参考になりました。何か言いたいことがありますかではなく、もう少し対話が拓かれていくような質問の方法を考えていきたいです。

相手のとらえ方が違うので、正しく伝えること。

当事者として、感情的にならず、中立的な立場の自分であることが必要だと思いました。

対話を深めて相手を理解する、というところをどのような話をすれば対話が深まるか具体的に演習できたことが自分にとってはとてもありがたいところです。

初期対応、言葉の使い方。最初にボタンをかけ間違うと、後々まで響き、他の業務にも影響してくると思いました。余裕を持った対応を心がけていきたいです。

心得が分かりやすかったです。

話が広がる質問がタイムリーに出せるような訓練経験値を広げる。

ロールプレイを通して、より理解が深まりました。

つい、同調しがちですが、そのままを受け止めるように気をつける。

聞くだけ、目を見て、相槌しながら聞くとでは、相手に与える印象が変わるなど、ロールプレイを通して実感できました。

【7. 本日の研修を受けたことで、明日からの行動が変わると思いますか】

評価	件数	割合
⑴非常にそう思う	8	42.1%
⑵そう思う	9	47.4%
⑶あまり思わない	0	0.0%
⑷思わない	0	0.0%
未回答	2	10.5%
合計	**19**	**100.0%**

(1)(2)を選ばれた方は、どのように役立てようと思いますか

相手の想いが良い方向に行けるよう対話できたらと考えている。

相手の話を共感・傾聴し、感情をしっかり受け止めてから、対話を拓いていくことを意識していきたいと思います。

相手を承認することで、初期の対応について活かしていく。

相手の話を聞くだけでなく、相手の話を拡げる会話を意識して、家庭や職場での会話を楽しんでみようと思います。それが、何かあった時に生かせると良いなと思っています。

頑張ります。

初期対応、クレームの第一歩に当たることが多いので。

オープンクエスチョンを、共感的な方法に変えていきたいと思う。

今回の演習を活かして、どの相手とも対話を深めていけそう･･･と思っています。毎日心がけて日常業務にも使っていきたいです。

初期対応の大切さ、言葉のもっていき方など、明日から行動を変えていきたいです。

共感と、認知フレーム、大事にしていきたいと思います。

PT-医療者の間をとりもてるようにメディエーションマインドを意識していく。

患者さんとの対応の方法について、受け止め方など、とても勉強になりました。すぐには難しいとは思いますが、少しでもやっていければと思います。

(3)(4)の方は、理由を教えてください

記載なし

【8. 今後、より専門的にメディエーションの研修を受けたいと思いますか】

評価	件数	割合
(1)非常にそう思う	3	15.8%
(2)そう思う	14	73.7%
(3)あまり思わない	0	0.0%
(4)思わない	0	0.0%
未回答	2	10.5%
合計	**19**	**100.0%**

【9. 日常業務でどのような困った場面がありますか　その他感想があればご記入下さい】

具体的にスキルを学ぶことができました。少し難しく感じるところもありますが、実践につなげたいと思います。
ありがとうございました。

お疲れ様でした。良い学びになりました。ありがとうございました。

説明内容が上手く伝わっていない場面に当たった時。

日常業務でも日常生活にも活用できそうなことでした。初めてコンフリフト研修に参加したのですが、導入編でもあり、初めてでもとても分かりやすかったです。ありがとうございました。

予想以上、期待以上に、実践の場に役立つ、活用できる学びとなりました。患者対応、スタッフ指導の場面で活かしていきます。本当にありがとうございました。

患者はなぜ怒る？
～知っておくと役に立つ　医療コンフリクト・マネジメント～

高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業

▶日時　令和6年12月21日（土）13：00～17：10

▶場所　高知県立大学池キャンパス　高知県高知市池2751番1
本部・健康栄養学部２階　第１・第２会議室

▶対象　高知医療センター 職員
高知県立大学 教職員・学生

▶講師　日本医療メディエーター協会 シニアトレーナー
鷹の子病院 事務長　徳永 盛保 氏

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　研修内容　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊コンフリクト・マネジメントとは
・医療メディエーションの考え方を理解する
・苦情の生成とその対処方法を学ぶ

＊ 事例を通して医療メディエーションを理解する
・医療メディエーションの応用

＊トラブルの予防と初期対応の心得を知る

＊共感とは
・共感表現の理解

＊対話を拡げる
・質問技法の理解

＊ ロールプレイ
・共感的傾聴と対話の実践

医療コンフリクトとは、医療現場における 患者側と医療者側との**「認知のくい違い」**から 起こる“対立”のことです。

これらに対し 双方の対話を促進することで情報共有を進め コンフリクトの予防・調整の役割を担い問題解決に 導く人材を **医療メディエーター**と言います。

今回の研修では、医療メディエーターを育成されている鷹の子病院の徳永様を講師にお迎えし、患者さんがなぜ怒るのか、そして医療現場だけでなく福祉や健康栄養など、様々な場面において活用できる医療メディエーターの手法を用いた**苦情の予防**や**初期対応方法**について学びます。

【お申し込み方法】

下記、２次元バーコードまたはＵＲＬを読み込んでいただき、申し込みフォームから「①機関名②部署・研究科名③職種④氏名⑤メールアドレス」を入力し、お申し込みください。受付が完了しましたら、返信メールをお送りいたします。

▶〆　切：12月17日（火）

▶定　員：40名（※先着順）

▶申込先：https://www.u-kochi.ac.jp/ques/questionnaire.php?openid=495

２次元バーコード

主催：高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会　健康長寿・地域医療連携部会

お問い合わせ
高知医療センター　地域医療連携室　TEL　088-837-3000（代表）
高知県立大学地域連携部企画調整課　TEL　088-847-8815

3.高知医療センター地域医療連携研修会の合同開催

健康長寿研究センター長　久保田 聰美

開催日時　令和７年２月１日（土）14 時～ 16 時 30 分
開催場所　高知城ホール４Ｆ　多目的ホール
対　　象　どなたでも（医療関係者、県民の方）
参加者数　35 人（アンケート回答者　27 人）
教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美
事務局　三本 雅宣、森田 吹生（計３人）
外部講師　西村 真紀氏（医療法人社団やまと やまと診療所高知）
林 和俊氏（高知医療センター副院長兼地域医療センター長）
大麻 康之氏（高知医療センター救急外来・中央診療副科長）（計３人）

⑴　事業概要

本研修会は、高知医療センターとの包括的連携事業に属する事業の１つである。高知医療センターが年間にわたって定期的に開催している地域医療連携研修会に、本年も健康長寿研究センターが機会を戴いて研修会を合同開催した。今年は「みんなが健やかで心豊かに暮らせる社会のために」をテーマに、高知医療センターの登録医とセンターの救急部門の看護師の講師２名による研修会を実施した。

⑵　活動成果

【研修会】
第 70 回　高知医療センター地域医療連携研修会
テーマ：「みんなが健やかで心豊かに暮らせる社会のために」

講演①：高知医療センター救急外来・中央診療副科長　大麻 康之氏
「救急の現場から生活を支える！～救急外来で行う帰宅時支援～」

大麻氏からは、高知医療センターの救急外来における取り組みについての報告があった。帰宅時支援とは救急外来から帰宅する患者さんを地域につなげる取り組みのことであり、社会的支援を広げて重症化を予防することを目的としている。この帰宅時支援は、救急搬送されたものの入院せずに帰宅する患者さんに対して、このまま自宅に帰すのは気がかり…と感じた看護師の思いからスタートしている。救急外来でのスクリーニングを基に多職種連携による情報リレーで地域の専門職やケアの担い手にケアをつなぐ仕組みである。具体的には、連携室の MSW を通じての情報提供や帰宅時にパンフレット等を患者さんやご家族に配布している内容が紹介された。また、帰宅時支援を行うことによって、軽度認知障（MCI）の早期発見・早期介入につながる可能性がある一方で、帰宅時支援を拒否される方への関わりに苦慮している課題についても報告された。

講演②：医療法人社団やまと やまと診療所高知　西村 真紀氏

講演②では、「病気の本当の原因は何？～健康格差をまねく健康の社会的決定要因 SDH に取り組もう～」をテーマに、社会的決定要因 SDH についての講演があった。

健康の社会的決定要因には労働環境や衛生環境、収入、教育などがあり、それらが健康問題に占める割

合がカナダでは 60%、アメリカでは 50%であることが紹介された。

また、西村氏の前任地である川崎市の具体的な事例も示しながら、SDH が健康寿命に影響を与えているリアルな実態についての意見交換の場もあった。その他、講演内では SVS（「人間らしく生活している証を示すもの」で「人間は社会的存在であり、その状況に関する情報・徴候」を意味することを指す）を整理するアクションシートを作成する時間も設けられ、参加者と意見交換しながら、対象者の「病気の本当の原因は何？」と具体的に探っていくリアルカンファレンスの場となった。

講演後の質疑応答の場では、地域の専門職や一般の住民が「社会的決定要因 SDH」についてどのように学んでいけばいいのか？　そもそもリンクワーカーってどこで何をする人？繰り返し救急搬入される患者さんでも帰宅時支援を拒否される場合には、どのような関わりがあるのか？　医療従事者としてだけではなく、一住民として、できることは何だろうか…等の疑問に対して、活発な議論が交わされた。

⑶　活動評価

参加者は 35 人であった。アンケートには 27 件の回答があった。研修会は参加者にとって十分満足できる内容であったと思われる。

参加者からの感想については、アンケート結果をご参照戴きたい。

⑷　講演の様子

①講演会の様子

②質疑応答の様子

第70回高知医療センター地域医療連携研修会　参加者＆アンケート集計

主催：　高知県立大学、高知市病院企業団立高知医療センター

日　時：令和7年2月1日(土)14:00～16:30

会　場：高知城ホール　4F多目的ホール

テーマ「みんなが健やかで心豊かに暮らせる社会のために」

講演 1　救急の現場から生活を支える！ー救急外来で行う帰宅時支援ー

高知医療センター救急外来･中央診療副科長　大麻　康之

講演 2　病気の本当の原因は何？　ー健康格差を招く健康の社会的決定要因SDHに取り組もうー

医療法人やまと　やまと診療所高知　院長　西村　真紀

●アンケート集計

参加者数	35名
回答者数	27名
回収率	77.10%

【所属】

回答		27	
医療センター		11	41%
県立大学教職員		2	7%
県立大学学生		0	0%
その他		14	52%
	医療･介護･福祉施設にお勤めの方	5	19%
	一般の方	8	30%
	その他	1	4%
	無回答	0	0%

【職種】※複数回答可

回答	28	
医師	0	0%
看護師	10	36%
社会福祉士	2	7%
介護福祉士	0	0%
居宅介護支援専門員	2	7%
一般の方	6	21%
教員	2	7%
大学院生･大学生、高校生	0	0%
事務担当	3	11%
その他	3	11%

【研修会についてどこで知ったか】

※複数回答可

経路	件数	割合
高知県立大学のHPを見て	1	3.3%
医療センターのHPを見て	3	10.0%
高知県立大学の広報誌を見て	3	10.0%
医療センターの広報誌を見て	7	23.3%
職場、家族、お知り合いなどから聞いて	**8**	**26.7%**
高知新聞こみゅっとを見て	5	16.7%
その他(FAX2、LINE1)	3	10.0%
合計	30	100.0%

【研修会はどうであったか】

評価	件数	割合
とても良かった	**20**	**74.1%**
良かった	5	18.5%
ふつう	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
未回答	2	7.4%
合計	27	100.0%

【研修会の開催日はいつがよいか】

※複数回答可

開催日	件数	割合
土曜日の午前	8	15.4%
土曜日の午後	**22**	**42.3%**
日曜日の午前	5	9.6%
日曜日の午後	14	26.9%
平日の夜	3	5.8%
未回答	0	0.0%
合計	52	100.0%

【開催場所はどこがよいか】

※複数回答可

会場	件数	割合
医療センター	**14**	**25.9%**
高知県立大学	9	16.7%
オーテピア	12	22.2%
高知城ホール	9	16.7%
高知市あんしんセンター	7	13.0%
その他	3	5.6%
合計	54	100.0%

【研修会についての意見・感想】※ほぼ原文のまま掲載

リンクワーカーとしての保健師としての機能強化と併せて個々の事例から社会環境を変えていけるような役割を意識できるような人材育成が必要だと感じました。日頃のモヤモヤが少し解消できた気がします。ありがとうございました。
SDHは新しい知識となり、大変興味深くうかがいました。人とのつながり、医療者の役割を教育に生かしていきたいと思います。
三次救急を担う医療センターにおいて生活の視点を持った内容の研修を企画していただき、とてもよかったです。救急や、入院した患者さんの情報などを地域の病院をつないで、患者さんにとって何が一番大切か考える機会がどんどん増えていけば良いかと思います。高齢化先端でモデルとなる取り組みができるとよいですね。

【今後の研修会等で聞いてみたいテーマや意見・要望】※原文のまま掲載

・多職種でのＳＧＤ形式での研修会（職種を理解していく）、症例検討会
・地域医療
・SDHの分野の中に文化があります。この中には宗教によっての文化背景やそれによっての幸福度からくる健康への影響等についての、最近のエビデンス（海外も含めて）を知ることができたら楽しいなと思っています。

高知家健康パスポート対象事業

第70回高知医療センター地域医療連携研修会
（高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業）

みんなが 健やかで心豊かに 暮らせる社会のために

日時 令和7年2月1日 土　**申込不要**
14時～16時30分(13時半受付開始)

場所 **高知城ホール**（高知市丸の内2丁目1-10）
4階多目的ホール

病気の本当の原因は何？

―健康格差をまねく健康の社会的決定要因SDHに取り組もう―

医療法人社団やまと　やまと診療所高知
院長　西村　真紀　氏

救急の現場から生活を支える！

―救急外来で行う帰宅時支援―

高知医療センター
救急外来・中央診療副科長　大麻　康之

参加費無料
先着100名

【問い合わせ先】
高知医療センター　地域医療センター
地域医療連携室　TEL:088-837-3000

高知県立大学　地域連携部企画調整課
健康長寿研究センター担当　TEL:088-847-8815

4. 病院前妊産婦救護に関するシミュレーション　BLSO in 高知

看護学部 教授　嶋岡 暢希

開催日時	令和６年 11 月２日（土）９時～ 17 時
開催場所	高知医療センター
対　　象	高知県の救急医療に関わる医師、看護師、救急隊員
参加者数	49 人
教 職 員	看護学部 教授　嶋岡 暢希、助教　飯田 悠花
外部講師	高知医療センター　林 和俊先生・渡邊 理史先生　他 （インストラクター計 11 人）

⑴　事業概要

高知県では分娩施設数の減少と、近い将来、発生するとされている南海トラフ大地震によって、分娩施設以外での分娩が想定されており、周産期医療の専門家にかかわらず、病院施設外における分娩や妊産婦救急の場面で対応できる力をつけることは重要である。本事業は高知県内の救急隊員や医師、看護師を対象とし、病院外や救急外来での急な分娩の対応、産科救急の初期対応を学ぶ研修（BLSO プロバイダーコース）である。なお、本事業は高知県からの委託を受け高知医療センターが主催しているものであり、高知医療センターとの包括連携事業の位置づけで看護学部教員が運営に携わった。

⑵　活動成果

受講生は救急救命士 19 人、医師２人、看護師１人、その他２人であった。研修は講義と少人数グループにより妊婦の評価、分娩介助、分娩第３期の処置、肩甲難産、産後大出血の対処、新生児の処置・蘇生法、車中分娩などを実践的に学ぶコースが展開された。実施後のアンケート結果から参加者の研修受講動機として「産科対応病院まで１時間以上かかるため、知識･技術を身に着け、対応できるようになるため」といったものがあり、研修後の満足度としては 86% が「満足」と回答、また日々の業務において当該研修を受講する必要性を感じるかという問いに「感じる」と回答した者は 100% であった。

* 受講生の内訳、アンケート結果は令和６年度第２回高知県周産期医療協議会資料より抜粋

⑶　活動評価

今年度は２人の教員がアシスタントとして運営に携わった。周産期医療に関する最新の知見や産科救急の他組織多職種連携の実践的な学びが得られるとともに、研修の企画・運営といった教育手法を学ぶ機会になった。次年度も開催される予定であり、引き続き、高知医療センター産科、事務局と連携して対応する。

5.専門職者のキャリアサポート「学習支援の極意を学ぶ！」

看護学部 教授　大川 宣容

開催日時	令和７年１月 13 日（月・祝）10 時～ 12 時
開催場所	オンライン
対　　象	高知県立大学教員および医療専門職、医療者・教育に従事する方
参加者数	21 人
教 職 員	看護学部 教授　大川 宣容、教授　嶋岡 暢希、教授　高谷 恭子、准教授　有田 直子、 講師　岩﨑 順子、助教　上村明咲、助教　田中 雅美、助教　田之頭 恵里、 助教　森本 紗磨美、助教　依岡 美里　（計 10 人）
外部講師	愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター 助教　内藤 知佐子 氏（計１人）

⑴　事業概要

医療専門職者の臨床実践能力を向上させ、生涯発達を支援することを目指し、高知医療センターとの包括的連携事業として学習会を継続的に取り組んでいる。

今年度は、看護実践能力を向上する学習支援について、学習者に見えているものと指導者が見ているものは何故違うのか？学習した内容と実践がつながらないのは何故か？情報収集はできているにもかかわらず看護につながらないのは何故か？など、困り事を共有しながら、改善を図るための思考の整理や具体的・効果的な「きく・みる・つたえる」方法を見出すことに焦点を当てた。展開方法としては、講師からの講義、ならびに、参加者を少人数のグループに分けて、講義で学んだ“学習支援の極意”を模擬事例で活用・展開するグループディスカッションを行った。グループ全体共有の中で、講師からのフィードバックを得て、講義と実践をつなぐ参加型の学習会とし得る参加型とした。

⑵　活動成果

講師より、学習支援の極意として、以下の講義をいただいた。

・「教える」ことを始める前に大事なこと：

“変えられること”と“変えられないこと”とは何かを確認し見極める力を持つこと、どのように人を育てることが“上手くいくことなのかをエビデンスが示された。

・指導者として人（学習者・初学者）を育てるかかわりのポイント：

指導方法には様々あるが、“教える（ティーチング）”から相手に応じて“引き出す（コーチング）”に切り替えることの効果、学習者･初学者の背景を把握し、彼らの「やる気」を刺激することが説明された。その中で、学習者・初学者と指導者との効果的な“打ち合わせのコツ”、“質問から発問へ”、“具体的な発問のパターン”など、指導者が学習者・初学者にかかわる際の具体的な内容を提示された。

講義の後、ひとつの事例（指導者と新人 Ns のケアの振り返り場面）が示され、講師が講義で示した極意の活かし方を解説いただいたうえで、３つの場面事例を１事例ごとに４～５人のグループとなったグループディスカッションを行った。個人の学びを個人にとどめず、事例を通してグループメンバーと共有・検討し、その内容を参加者全体で共有して講師から学習支援のさらなる効果的なポイントを得た。

今回の学習会を開催したことによって、効果的な学習支援とは指導者と学習者・初学者との相互理解の上に成り立つものであり、そのためにも指導者の学習者・初学者に対する対象理解が重要であること、対象理解につながる対話を意図的に日常場面に織り込む意味やスキルを身につけたり、再確認することができた。また、学んだ学習支援の極意は、臨床や教育場面での直接的な学習者・初学者への指導に活かすことのみならず、個々人の生涯学習に対する姿勢を見直したり、彼らを育てる組織としての教育体制・在り方を再検討する機会にもつながった。さらに、学習者・初学者の枠を超えて、人を対象とする研究者としての極意ともいえる重要な示唆を得ることができた。

上記の学びの共有として昨年度に引き続き、当日参加ができなかった高知県立大学看護学部および高知医療センターの看護職の希望者に対して、学習会の内容を令和７年２月28日までの期間限定でオンデマンドの視聴ができるようにした。

⑶ 活動評価

参加者アンケート調査の結果において、回答者（13人）より、学習会の内容が自身の学習ニーズにとても合っているかについて「とてもそう思う」「そう思う」（5段階評価の5）と13人より回答を得たことより、非常に満足感が高かった。学習会に参加して今後に役立つ気づきや学びが得られたかについて、「とてもそう思う」「そう思う」と12人（92.3%）より回答を得たことから、おおむね学習支援に活かす気づきや学びが得られていた。得られた気づきや学びを今後の看護実践や看護教育に活かすことについては「とてもそう思う」「そう思う」と13人から回答を得たこと、また、自由記載においても“明日から活用できる”ポイントや工夫を得るとともに、講義の中での事例をグループディスカッションしたことで、より実践の場をイメージして活用できるとの意見を得て、参加者個々人の学習支援力につながった。

今回の学習会では、事前に参加者の協力を得て、学習支援における気になった・困った場面でのプロセスレコードを提出してもらった。その内容を講師の内藤先生に共有し、講義内容ならびに参加者同士のグループディスカッションの３事例に少しエッセンスを盛り込んでくださった内容の展開が可能となった。その結果、アンケート調査の自由記載のみならず、参加者の声として“講義と実践がつながってとてもわかりやすかった”“具体的に学んだことを自分事として事例で取り組めたことでコツが見えた”など、参加型の学習会として学習効果を高めることができた。

これらのことから、看護職の人材育成・学習支援を担う教育担当者や指導者、教育機関の学生を育てていくことにおいて、相手を理解し自身の思考を転換しながら看護専門職として高め合える学習支援の極意を学ぶ貴重な機会となり、学習ニーズの達成ができたと考える。

⑷ 講演の様子

①講演の様子

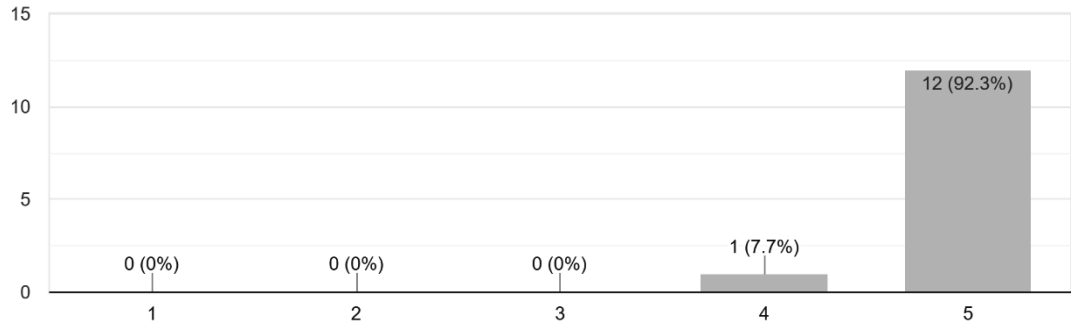
②グループディスカッション後の共有の様子

高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業/高知県立大学健康長寿研究センター開催
看護実践能力を高めるための学習会「学習支援の極意を学ぶ！」アンケート結果

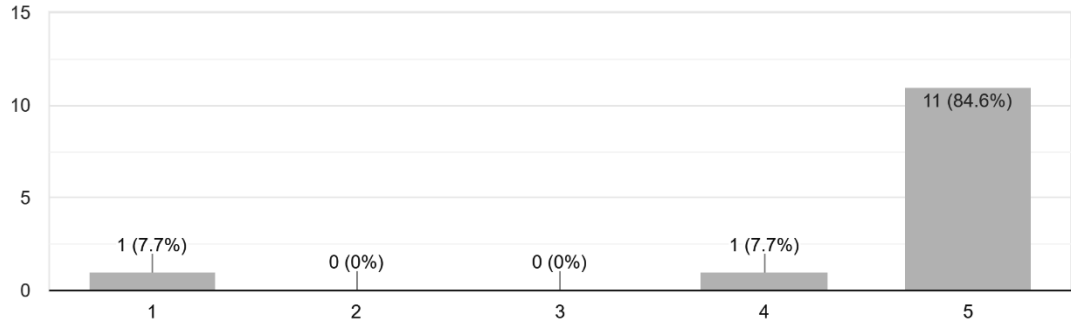
１．あなたのご所属・立場を教えてください。

施設	参加者人数
高知医療センター　教育担当者・指導者	10
高知県立大学看護学部　教員	9
その他の病院施設　看護者	2

２．学習会の内容は、あなたの学習ニーズに合っていましたか。（１：まったくそう思わない　５：とてもそう思う）



３．学習会に参加して、今後に役立つ気づきや学びが得られましたか。（１：まったくそう思わない　５：とてもそう思う）



4．よろしければ、どのような気づきや学びがあったかを教えてください（自由記載から一部抜粋）。

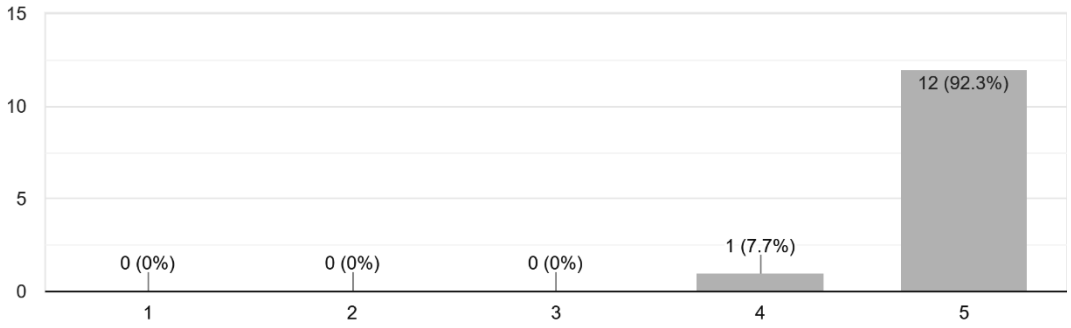
・事前打ち合わせのティーチング、コーチングの使いわけ、思考発話の重要性を改めて学ぶことができました。また、時間がないからとなかなか使えてない現状がありますが、まずは指導者がチャレンジして使えるようになることが大事だと思います。しっかりそのことを伝えていきます。問題行動ばかりに目がいきがちですが、先行条件を見極めることをしっかりしていきたいと思います。

・自分達からするとギャップに感じる相手の反応でも、ネガティブに捉えすぎずあくまで特徴としてフラットに捉え言語化することで、じゃあどう伸ばそうという有意義な対応を考えられると思いました。

・Z 世代の特徴や初学者の特徴と、その特徴に対しての具体的な指導方法についても理解を深められ、事例を通して自身の指導の課題なども気付きを得られました。

・今どこに支援がいるのか、変えられるところと変わらないところを見極める力。また、発問だけでなく指導者の思考を伝える。1 日の目標や目的をしっかりと共有して振り返りを行うことが大切だと思いました。指導者側の知識や指導力を磨く必要があると思いました。

5．気づきや学びの内容は、今後の看護実践や看護教育に活かせそうですか。（1：まったくそう思わない　5：とてもそう思う）



6．よろしければ、活かせそうと思った理由を教えてください（自由記載から一部抜粋）。

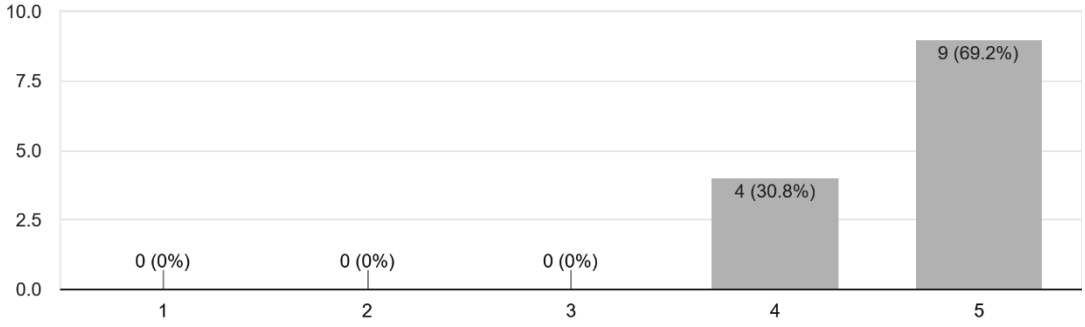
・講義と実践がつながって、とても分かりやすかったから。

・ティーチングとコーティングの使い分け、Z 世代の伸ばし方

・現在指導者をしていますが、一つ一つの事は理解できているけど、状況などが変われば同じことでも出来ないという事がよくありました。そのため、もしも○○だったら？という補助発問を使って指導をしていきたいと思いました。「分からない事は無いか」という質

問を良くしてしまっているなと感じたので、具体的に聞いていくことも心がけたいと思います。また、1分間で患者さんのプレゼンをしてみるというのもやっていきたいと思います。検温をする際に、経過表に入力された観察項目しか見る事ができていないという事があるので、プレゼンを行う事で、どこを観察しなければならないかが分かるのでイメージを持てるようにしていきたいです。

7．学習会の時間は適切でしたか。（1：まったくそう思わない　5：とてもそう思う）



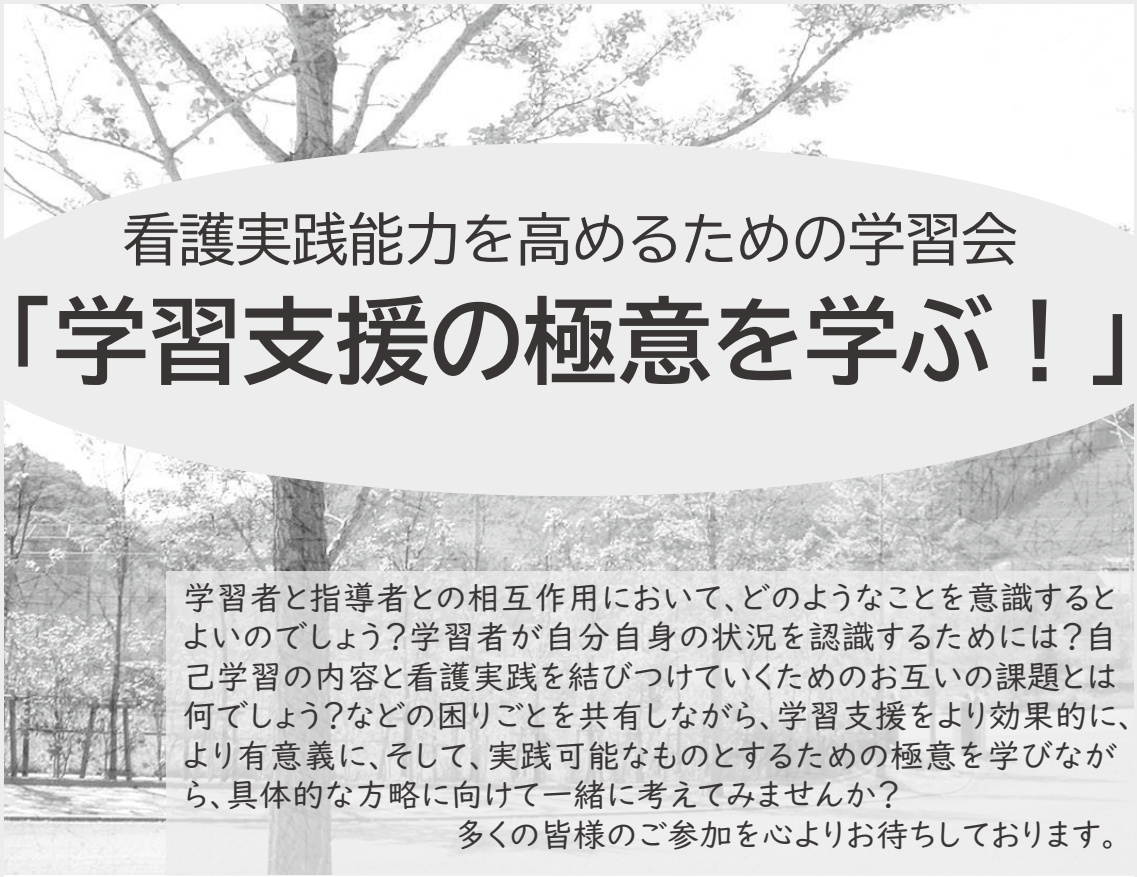
8．学習会に対するご意見、ご感想、今後学んでみたいことなど、ご自由にお書きください（自由記載から一部抜粋）。

・学習者、指導者ともにモチベーションを高め、効果的な学びへとつなげられる指導や支援について、有意義な学びを得られました。ありがとうございました。

・講義を受けながら実践の場面が思い浮かび、反省やあの時の関わり方は良かったと振り返りことができました。実践に活かせる内容ばかりで、あっというまの2時間でした。指導する側も、もっと勉強と成長が必要だなと感じました。

・自身の振り返りになりました。今後教育担当として指導者研修の中で活用していきます。今、対象問わずリフレクションが必要であると改めて感じることが多くあります。指導や管理者はリフレクションを自身が行うことだけではなく、リフレクションスキルを用いた関わりができることが大事だと思います。そのような研修会があるといいなと思ってます。

高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業／高知県立大学健康長寿研究センター



看護実践能力を高めるための学習会

「学習支援の極意を学ぶ！」

学習者と指導者との相互作用において、どのようなことを意識するとよいのでしょう？学習者が自分自身の状況を認識するためには？自己学習の内容と看護実践を結びつけていくためのお互いの課題とは何でしょう？などの困りごとを共有しながら、学習支援をより効果的に、より有意義に、そして、実践可能なものとするための極意を学びながら、具体的な方略に向けて一緒に考えてみませんか？

多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

講師：内藤 知佐子 先生

（愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター助教）

＜講師のご紹介＞京都大学医学部附属病院看護部管理室教育担当等のご経験を経て、2022年より現職。
看護教育並びに看護職の魅力を伝えるご活動を積極的になさっておられます。

日時：2025年1月13日（月・祝）10時～12時
場所：オンライン（Zoomミーティング）

対象：高知県立大学教員および医療専門職、医療者教育に従事する方
参加費：無料

【お問い合わせ先】高知県立大学看護学部　高谷恭子
TEL&FAX：088-847-8614　Email：takatani@cc.u-kochi.ac.jp

※お申し込みは下記URLまたは右のQRコードからお願いいたします。

https://forms.gle/rytGsZdPiRi7BuW86

6. 第 13 回みさとフェア

健康長寿研究センター長　久保田 聰美

開催日時　令和 6 年 11 月 24 日（日）9 時 30 分～ 14 時
開催場所　三里中学校
対　　象　三里地区住民
参加者数　約 1,000 人（みさとフェア参加者）
教 職 員　健康長寿研究センター長　久保田 聰美／看護学部 助教　塩見 理香
健康栄養学部 助教　隅田 有公子／社会福祉学部 講師　辻 真美、助教　乾 由美
事務局　三本 雅宜、森田 吹生、荻 林太郎、由比 由紀、山中 夢翔（計 10 人）
学生スタッフ　社会福祉学部生 1 人

⑴ 事業概要

みさとフェアへの出展は、包括的連携協定を結んでいる高知医療センターから、共同出展のお声掛けをいただいてから、今年度で 9 回目の参加となる。両機関が立地している池･三里地区への地域貢献として、健康啓発に関わるブースを出展し、多くの地域住民の方々に健康について関心を持っていただくことを目的として実施している。

本学からは血管年齢測定、ストレス測定などの機器を用いた健康チェックや災害食サンプル展示などを企画した。屋外コーナーでは、本学学生グループ「イケあい」がスタンプラリーを行い、体育館ステージでは大正琴演奏やよさこい踊りが行われた。

⑵ 活動成果

① 参加住民

今年度も「くろしおくん」による誘導の効果や事前の打ち合わせで「スタンプラリー」の 1 コーナーに加えて頂いた効果もあり、共同出展ブースには、約 200 人の幅広い年代の地域住民に参加していただけた。

② 県立大学コーナー

血管年齢測定、ストレス測定、災害食サンプル展示のブースを出展。地域の子どもたちもブースを体験し、災害食サンプル展示コーナーでは本学教員により説明を熱心に聞き、興味を示しているようであった。

③ 高知医療センターコーナー

医療相談、健康相談、栄養相談、お薬相談、血圧測定、子どもによるお薬づくり体験 & お薬クイズなどを実施した。

⑶ 活動評価

今年で 9 年目を迎えた本事業には、毎年多くの住民の参加があり、三里小学校・三里中学校の授業参観も同日に開催された。

医療センターとの共同出展ブースはその他体験コーナーから離れた場所にあるが、今回も「くろしおくん」の誘導により、多くの住民に参加いただけた。また、本学の取り組みをＰＲするための広報誌の設置も行った。

みさとフェアへの参画を通して、これからもより多くの池・三里地域の住民に健康について関心を持っていただけるよう、高知医療センターと協働で、健康啓発活動を続けていきたい。

⑷　みさとフェアの様子

①くろしおくんによる誘導

②血管年齢測定

③災害食サンプル展示

④高知医療センター　調剤体験コーナー

7. 令和６年度包括連携料理教室　減塩食レシピの考案（R7年度開催予定の料理教室での配布、HP等への掲載）

健康栄養学部 准教授　島田 郁子

開催日時	令和６年 11 月９日（土）９時～ 12 時 （記載は料理写真撮影の日程、打ち合わせを別途複数回実施）
開催場所	高知県立大学　池キャンパス　調理学実習室・試食室
対　　象	高血圧の患者とその家族
参加者数	６人
教 職 員	健康栄養学部 准教授　島田 郁子、助教　竹本 和仁、小山 智久（計３人）
外部スタッフ	高知医療センター栄養局（計３人）

⑴　事業概要

食塩の過剰摂取は高血圧や胃がん等、生活習慣病の発症リスクとなる。高知県民の食塩摂取量は男性 9.7g、女性 8.4g（令和４年高知県県民健康・栄養調査）で、日本人の食事摂取基準（2020 年版）の目標量と比べても男女ともに 2g ほど多く摂り過ぎている。また、減塩は高血圧症や心血管疾患、脳血管疾患等の動脈硬化性疾患や慢性腎臓病といった様々な疾患の食事療法の基本となる。そこで、本事業では高知医療センター栄養局の管理栄養士と協働し、高知県民への減塩の啓発、減塩を要する患者の食事療法の一助となることを目的とし、今年度は次年度開催を予定する料理教室で配布する減塩食レシピの作成と試作を実施した。

⑵　活動成果

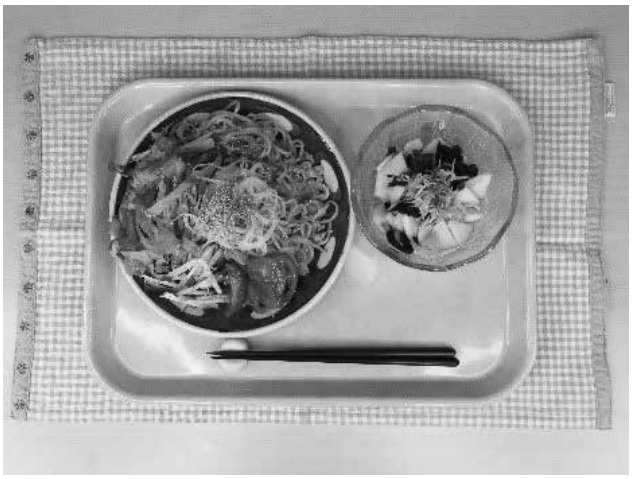
2024 年春から高知県立大学教員及び高知医療センター管理栄養士により高血圧患者とその家族に向けた減塩食レシピの考案とレシピ集の作成を企画した。高知県立大学教員及び高知医療センター管理栄養士がそれぞれ１日分の減塩食レシピを考案し、そのレシピの妥当性を協議した。実際に考案したレシピの試作・試食を行い、調理手順の確認とレシピに掲載する写真の撮影を行った。考案したレシピは現在編集中で、次年度開催予定の料理教室で配布を行う見込みである。また、レシピは高知医療センターのホームページ等で閲覧できる見込みである。

⑶　活動評価

実際にレシピの配布を行っていないため、正式な評価はまだ得られていないが、レシピ集には減塩のアドバイスやポイントを記載することで普段の料理にも活用可能な内容となっている。今後の料理教室等で配布し、参加者の反応も確認したい。

⑷　メニュー案

①高知県立大学考案メニュー　朝食：ホットサラダ



②高知県立大学考案メニュー　昼食：和風混ぜそば

③高知県立大学考案メニュー　夕食：中華丼

Ⅳ　㊑知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

1．看護相談室（リカレント教育等）の広報活動

看護学部 助教　徳岡 麻由

開催日時　通年
開催場所　看護学部
対　　象　高知県内の看護職
教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美、准教授　中井 寿雄、助教　徳岡 麻由（計３人）

⑴　事業概要

高知県内の保健・医療・福祉に従事する方と共に学び、ケアの質の向上をはかることを目的として開催している看護相談室を年間スケジュールで掲載したチラシを作成し、高知県内の病院施設および保健所へ送付した。

令和６年度は、家族看護学・精神看護学・がん看護学・クリティカルケア看護学・慢性看護学・小児看護学・母性／助産看護学・地域看護学・在宅看護学・老人看護学・看護管理学・災害／国際看護学の、あわせて 12 の専門分野において、遠隔会議システムを導入したケア検討会やリカレント教育なども企画した内容のチラシを作成した。

⑵　活動成果

12 の専門分野のケア検討会、リカレント教育への参加者数は、延べ 651 人（２月末時点）に達した（実績表参照）。なお、各領域の具体的な活動内容については、看護学部ホームページをご参照下さい。

（https://www.u-kochi.ac.jp/site/kango/category-a-consult.html）

(3) 活動評価

看護相談室の広報活動は、年に２回、高知県内の保健・医療・福祉に従事する方々へ向けて大学のホームページへの掲載や郵送にて情報発信するという活動ではあるが、各領域のポスターや公開講座のチラシ等も同封することで、多様な関心を集めることができている。

2024年度　看護相談室の日程一覧（２月28日現在　開催予定の人数は空欄）

領域	名称・タイトル	参加人数	日時	
精神看護学領域	第1回ケア検討会（CNSの会）	11	令和6年6月20日（木）	19時～21時
精神看護学領域	第2回ケア検討会（CNSの会）	16	令和6年9月19日（木）	19時～21時
精神看護学領域	第3回ケア検討会（CNSの会）	12	令和6年12月19日（木）	19時～21時
精神看護学領域	第4回ケア検討会（CNSの会）		令和7年3月13日（木）予定	19時～21時
精神看護学領域	Ⅱ.交流会	7	令和6年6月1日（土）	19時～21時
がん看護学	1.ケア検討会 第1回”質の高いがん看護実践を検討する会”	43	令和6年6月8日（土）	13時～15時
がん看護学	1.ケア検討会 第２回”質の高いがん看護実践を検討する会”	39	令和7年1月25日（土）	13時～15時
クリティカルケア看護学	第1回クリティカルケア看護学領域ケア検討会	32	令和6年6月11日（火）	18時30分～20時
クリティカルケア看護学	Ⅰ.ケア検討会	13	令和7年2月13日（木）	18時30分～20時
慢性看護学	Ⅰ.交流会	6	令和6年7月20日（土）	16時30分～18時
母性・助産看護領域	交流会	8	令和6年5月24日（金）	18時30分～20時
母性・助産看護領域	ケア検討会	20	令和6年11月8日（金）	18時30分～20時
地域看護領域	Ⅰ.ケア検討会	32	令和6年6月7日（金）	13時30分～14時30分
地域看護領域	Ⅰ.ケア検討会	25	令和6年6月14日（金）	13時30分～14時30分
地域看護領域	Ⅰ.ケア検討会	29	令和6年7月26日（金）	13時30分～14時30分
地域看護領域	Ⅰ.ケア検討会	18	令和6年8月6日（火）	13時30分～16時30分
地域看護領域	Ⅲ.リカレント教室	42	令和6年5月10日（金）	13時30分～16時30分
地域看護領域	Ⅲ.リカレント教室	18	令和6年11月8日（金）	13時30分～16時30分
地域看護領域	Ⅲ.リカレント教室	33	令和6年12月16日（月）	13時30分～16時30分
地域看護領域	Ⅲ.リカレント教室	28	令和6年12月19日（木）	13時30分～16時30分
地域看護領域	Ⅲ.リカレント教室	22	令和7年2月14日（金）	13時30分～16時30分
地域看護領域	Ⅲ.リカレント教室		令和7年3月7日（金）予定	13時30分～16時30分
在宅看護学	Ⅰ.ケア検討会	14	令和6年7月11日（木）	18時30分～20時30分
在宅看護学	Ⅰ.ケア検討会	21	令和7年2月19日（水）	18時30分～20時30分
在宅看護学	Ⅱ.交流会	7	令和6年8月4日（日）	9時～12時10分
老人看護学	ケア検討会	9	令和6年6月11日（火）	18時30分～20時
看護管理学	第1回ケア検討会	32	令和6年6月14日（金）	18時30分～20時30分
看護管理学	第2回ケア検討会	19	令和6年10月18日（金）	18時30分～20時15分
看護管理学	Ⅱ.リカレント＆交流会	13	令和7年2月9日（日）	13時30分～15時30分
家族看護学	Ⅰ.ケア検討会	18	令和6年10月29日（火）	18時30分～20時30分
家族看護学	第1回リカレント教育	10	令和6年5月28日（火）	18時30分～20時30分
家族看護学	第2回リカレント教育	11	令和6年6月18日（火）	18時30分～20時30分
家族看護学	第3回リカレント教育	10	令和6年7月30日（火）	18時30分～20時30分
家族看護学	第4回リカレント教育	7	令和6年9月17日（火）	18時30分～20時30分
家族看護学	第5回リカレント教育	13	令和6年11月26日（火）	18時30分～20時30分
家族看護学	第6回リカレント教育	—	開催見送り	
家族看護学	第7回リカレント教育	—	開催見送り	
家族看護学	第8回リカレント教育		令和7年3月4日（火）予定	18時30分～20時30分
小児看護学領域	Ⅱ.交流会	13	令和6年7月21日（日）	14時～16時

2. 社会福祉学部リカレント教育講座

2024 年度 健康長寿研究センター事業
リカレント教育講座 社会福祉学部×社会的処方「ようこそ！知のフィールドへ」
運動コミュニティの力とメンタル・ヘルス

社会福祉学部 特任講師　大井 美紀

開催日時　令和 6 年 10 月 5 日（土）10 時～ 12 時
開催場所　高知県立大学池キャンパス　共用棟 2 階大講義室
対　　象　保健・医療・福祉従事者・一般県民・高校生・養成校教員
参加者数　55 人
教 職 員　社会福祉学部 教授　長澤 紀美子、講師　大井 美紀、講師　辻 真美、
助教　乾 由美（計 4 人）
学生スタッフ　事前作業　広報チラシ郵送　社会福祉学部　（計 8 人）
当日運営　社会福祉学部　（計 2 人）

⑴　事業概要

本講座は、本学部主催で社会福祉専門職や学部卒業生の再教育の場づくりや一般市民･高校生に対して、本学が取り組んでいる「高知型地域共生社会」への支援について広く啓発することで、関心や理解を深めてもらうことを目指している。

今年度は、精神障がいを持つ人のリカバリー支援の一つとして、「精神障がい者スポーツや身体表現活動（ダンス等)」に焦点をあてた。運動は、認知機能に作用することのみならず、不安障害やうつ病等のリスクを減らすとともに、それらを治療する手段としても、抗うつ剤やセラピーに匹敵する効果が世界的研究で立証されている。

今年度の本講座の目的は、①精神障がいを持つ人やメンタル・ヘルスの課題を持つ人々が、運動を通してリカバリーするプロセスを､実証的研究結果や活動事例を通して説明すること及び､②運動コミュニティが、メンタル･ヘルスにおける「社会的処方」の一つであり、私たち（市民の）誰もが、運動コミュニティのメンバーや、リンクワーカー的役割が担えることへの気づきを目的とした。

⑵　活動成果

○第 1 部 講義の概要：精神障がいを持つ人やメンタル・ヘルスの課題を持つ人々が、運動を通してリカバリーするプロセスを、国内外の実証的研究結果や活動事例を通して説明した。また、社会教育や福祉現場において実施可能な簡単なストレッチやリズム体操の実演を行い参加者とともに楽しく実施した。更に当日は、音楽療法士の協力を得て、グランドピアノの生演奏も加え音楽と身体表現の魅力についても紹介した。

○第 2 部 ワークショップの概要：「‘運動コミュニティ’へのつながり方､楽しみ方など」をテーマとし、高知県内の精神障がい者スポーツチームや、ダンスチーム等のメンバーや代表者の方をゲストとして招聘した。運動コミュニティは、メンタル・ヘルスにおける「社会的処方」の一つであり、私たち市民の誰も

が、運動コミュニティのメンバーや、リンクワーカー的役割が担えることに気づき、実践できることを目指した。講師が 20 年あまり高知県内で活動を続け連携してきたゲストらからも具体的なアドバイス等をいただいた。

⑶ 活動評価

１．広報について：昨年同様、病院関係や地域包括支援センター、高等学校にチラシを送付するとともに、中四国地域の福祉・介護の職能団体、養成校にまで送付先を拡大させた。また、大学、健康長寿研究センター及び学部のホームページや高知新聞に掲載し、広く周知できるよう努めた。

さらに今年度は、高知県内の精神保健福祉医療現場に従事する専門職や精神障がい者運動コミュニティのメンバー、そのご家族にも個別に参加を呼びかけ、当日の参加につなげることができた。

２．講師によるプログラム構成上の工夫：①講師より、申込み者全員に事前アンケートを配布し、参加予定者の背景やニーズ等を踏まえ当日のプログラムを構成した。

②国内外の研究成果などを分かりやすく伝えるために映像や実演（講師による実技やピアノ生演奏）、小学生からの体験談など創意工夫した。

③２部の運動コミュニティの各団体とは、開催までに数回の打ち合わせや発表資料の共同制作を行うなど、本テーマの趣旨や参加者ニーズに沿うように努めた。

３．講座後のアンケート結果：参加者は 10 代～ 60 代まで幅広く、各専門職の他、精神障がい者運動コミュニティのメンバーやご家族、小学生や高校生、小学校教員の参加もあり本講座が広く活用されていることが伺えた。「とても満足」（57.8％）「満足」（42.2％）という結果からも参加者の満足度は高かったと言える。自由記載内容からも、本講座の２つの目的が一定達成できたことが分かる。また各運動コミュニティの代表者からは、「このような活動発表やつながりの機会を得ることができ、これまでの活動評価や今後の課題が見えてきた」などのご意見があった。

⑷ 講座の様子

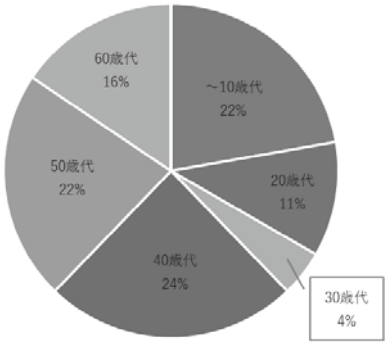
①大井先生による講義

②会場内の様子

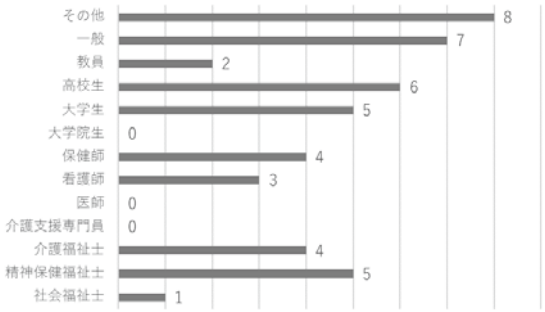
高知県立大学健康長寿研究センター　2024 リカレント教育講座
「参加者アンケート」

開催日時：令和 6 年度 10 月 5 日(土)
参加者：54 人
回答者：45 人

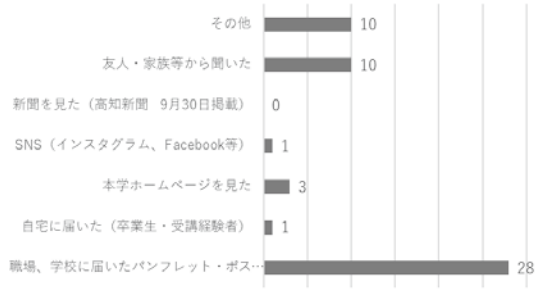
Q1　年齢



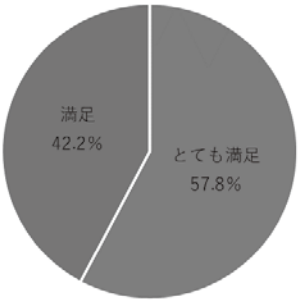
Q2　ご職業



Q3　講座をお知りになったきっかけ



Q4　本日の講座内容について



Q5　今後、お聞きになりたいテーマについて

・身近にできる運動療法、音楽療法など
・運動と心のつながりについて、もっと知りたいと思いました。
・地域の高齢者へのアプローチ、運動プログラム
・今回同様、県下で活動されている施設・団体の話が聞ければと思います。
・一定の団体で行っている活動としての２つの発表は別にして精神障害者のスポーツには疾患だけでなくそこから派生する二次・三次の障害があり、継続するのに困難がある。そうしたことを取り上げてほしいが、学部は社会福祉になってしまいますね。
・摂食障害（拒食症、過食症）
・ダイエット"
・スマホ依存・スマホとの付き合い方
⇒生活のツールとして必要ではあるけれど、思春期の子ども達のスマホの使い方が気になる生活が増えている現状がある。"

高知県立大学健康長寿研究センター　2024 リカレント教育講座
「参加者アンケート」

・精神看護について
・精神看護について詳しくお聞きしてみたいなと思いました。
・ダンスセラピーについてもっと聞いてみたいと思いました。
・今日のようなテーマ

Q6　ご感想、ご意見など

・立腰については、「こしぼね」という合言葉で授業の始まりと終わりで礼をする時、意識させるようにしています。最近、意識がうすれてきていたので、今回のお話を機会に大切であることを広めていこうと思いました。ありがとうございました。心身の健康づくりのために、いろいろな取り組みが行われていることが分かりました。何か学校内で取り組められるものに、挑戦したいと思いました。
・大井さんの話をもっと聞きたかった。軽めの動きでも運動する場所には不向き。活動内容が聞けて良かった。
・昆虫太極拳、ソーシャルワーク、社交ダンス、KTK、競馬クラブなど、運動の力は、心身ともに元気にしてくれることがわかりました。
・どの取り組みも健康を意識してぶれずに継続することがとても大切であったと思います。各プログラムを支えているスタッフの皆様の支援力に感動しました。そこを支えている大井先生に感謝です。ありがとうございました。
・スポーツの効果について改めて知る機会となりました。貴重な時間をありがとうございました。
・日常の仕事の中に活かしていける内容でした。ありがとうございました。
・とても学びになりました。職場で共有していきたいと思います。恥ずかしながら、活動紹介は知らなかった活動ばかりで勉強になりました。ありがとうございました。
・フットサルの話が興味深かった。スポーツをすることで、症状が緩和されたり、他者とのコミュニケーションが図れるようになったり…病院で投薬メインの仕事をしている私にとって目からうろこでした。社交ダンスも良かったです。もっと社会に発信していってほしいです。ピアノのメロディーもあり、アットホームな雰囲気で楽しめました。
・とても充実した内容で楽しく受講させていただきました。ありがとうございました。
・今日はありがとうございました。笑い、体を動かすなど充実した時間でした。実際の活動内容が聞けて勉強になりました。
・自分も運動を通して、健康を保つとともに、他者のサポート活動もしていきたい。
・運動と脳の密接な関係があることをわかりやすく教えてもらい良かったです。
・スポーツが自身の健康のために取り組んでいたものが、就労といったステップアップ、他の生活課題に派生していってるのが分かった。スポーツを通して、その人の考える生活がより豊かになっていることを知ることができた。
・二部のスポーツクラブの活動について興味深く聞くことが出来ました。
・龍馬クラブの内ノ村さん、長く続けているといい事もあり、大変なこともありますね、時代の流れというものもあります。これからも、前向きに頑張ってもらいたいと思いました。

高知県立大学健康長寿研究センター　2024 リカレント教育講座
「参加者アンケート」

・いろいろ学ばさせて頂きました　楽しかったです。
・身体を動かすと頭がスッキリしました。運動クラブの話を聞いていると、やはり仲間、友人の存在がとても大事だなと思いました。本日は楽しい会、ありがとうございました。
非常に貴重な公演をありがとうございました。私は病気により 7 年間続けていたバレーボールができなくなり、今回の公演を聞いて自分の体と心の健康のためにもっと病気としんけんに向き合おうと思いました。本当にありがとうございました。
・運動の良さをたくさん知り、私は運動不足なので教えてくださった運動のやり方を少しずつ生活に取り入れ心と体を健康にしていきたいと考えました。
運動ときくと、みんなができる感じなのかなとか思ったけど、第 1 部でちょっとした体操をしてみて、「楽しい」と感じることができました。私も、体を動かすことで、今とは違った見方とか考え方もできると思うので、ちょっとした体操を毎日取り入れていきたいです。
"運動は大切と思いつつも生活に流されて取り組めていない現状ですが、体にもメンタルにも良い効果があるので、時間を作って何かにチャレンジしたいなと思いました。ありがとうございました。
・会場が分からず大学内で迷子になっていましたが、学生さんに助けていただき、感謝です。"
・体を動かすことがたくさんのいいこと（自身の体や周りの人との関わり）につながることが良くわかりましたし、健康な人も日常から運動を心がけることも大切だと感じました。この講座をうけることができて、とても満足しました(^▽^)
・運動を通して、人のつながりであったり、その人自身の居場所づくりをしたり、コミュニケーションをとったり、たくさんの事につながっているんだなと思いました。私たちも日頃から体を動かすことでいい身体づくりができると思ったので、体を動かしていきたいなと思いました。本日は本当に貴重なお時間をありがとうございました。たくさんの学びがあり、楽しかったです。(^▽^)
・よかったです。もっと当事者の話がききたかったです
・運動コミュニティのお話良かったです。昆虫太極拳も自宅で続けたいと思いました！！
・全体的にもう少し時間があるとよかった
・様々な活動・内容が知る事ができてよかった。お話を頂いてありがとうございます。"
・大井先生、今日はありがとうございました。スクワットと昆虫太きょくけんがすごくヒットしました！早速帰ったらやってみます。

2024高知県立大学健康長寿研究センター事業

リカレント教育講座

社会福祉学部×社会的処方
「ようこそ！知のフィールドへ」

運動コミュニティの力とメンタル・ヘルス

2024年
10/5(土)
10:00~12:00
受付開始9:30~

参加費無料・要事前申込

［会場］高知県立大学池キャンパス
共用棟2階大講義室
お車でお越しの方は南駐車場をご利用ください

当日は、動きやすい服装でご参加ください！

［講師］
高知県立大学 社会福祉学部特任講師
大井美紀（保健師・健康運動指導士）

大阪府立看護大学大学院（現：大阪公立大学大学院）看護学研究科　生活支援看護学地域看護学専攻博士後期課程修了。研究キーワードは、精神障がい者、リカバリー支援、健康関連体力である。取り組んできた研究テーマは、地域で生活する精神障がいを持つ人を対象とした「健康関連体力促進」プログラムの開発など実証的研究である。自らも複数の運動コミュニティに所属し仲間との絆を深めている。2024年度より本学に着任。
○専門分野：精神看護学、精神保健学
公衆衛生看護学 ○学位：博士（看護学）

参加申込はお早めに！
下記2次元バーコードからお申込みください
参加申込締切：9/27(金)

高知県立大学
University of Kochi

お問い合わせ
高知県立大学 社会福祉学部 リカレント担当
TEL.088-847-8619
E-mail.wlrc@cc.u-kochi.ac.jp

3.看護学部公開講座 フィジカルアセスメント研修

看護学部 准教授　中井 寿雄

開催日時　令和６年８月17日（土）９時30分～12時30分
開催場所　高知県立大学看護学部棟C112
対　　象　卒後３年目までの看護師
参加者数　９人
教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美、准教授　中井 寿雄、助教　德岡 麻由、助教　宮地 佐和子、助教　依岡 美里、助教　神家 ひとみ、助教　加藤 昭尚（計７人）
学生スタッフ　博士前期課程学生（計１人）

⑴ 事業概要

本事業の目的は、フィジカルアセスメントの経験不足や自信不足を解消し、基礎知識と技術を再確認・強化することである。対象は高知県内の卒後３年目までの臨床看護師である。研修内容は、フィジカルアセスメントに関する講義・グループワーク（55分）、講師による事例を用いたフィジカルアセスメントデモ（10分）、参加者のフィジカルアセスメント演習（45分）、聴診演習（15分）、全体の振り返り（20分）だった。

講義の具体的内容は､バイタルサイン測定､循環器系･呼吸器系のフィジカルアセスメントの基本だった。講義内のグループワークでは、講義・演習で示された観察や基本的手技と、臨床実践との違いについて意見交換を行った。さらに、病棟ごとの患者の特性に合わせた実践の特徴や基本的知識・技術を振り返ることの重要性、課題などを共有した。演習は２グループに分かれ、事例を用いて、患者の観察から報告までの一連の流れを２回実践した。講師がチェックリストを用いて観察ポイントをチェックし、それぞれ実践後に結果をフィードバックした。聴診演習では、日頃、聴診で困っていることについて意見交換し、聴診部位の確認や異常音の鑑別を実施した。

⑵ 活動成果

20人の募集に対して９人が参加し、アンケートには４人から回答を得た。４人の年齢の平均は33.8歳で全員が女性だった。看護師経験年数は、４人ともに２年目で、このうち２人が、フィジカルアセスメント研修の受講経験があった。現在の勤務病棟は、医療療養病棟２人、一般病棟１人、回復期リハビリテーション病棟１人だった。アンケートの回答によると、フィジカルアセスメントの知識や技術を強化できたと全員が回答した。一方で、下位項目の「異常所見の正しい判断ができた」について、１人があまり思わないと回答した。フィジカルアセスメントの手技は全員が学べたと回答した。

研修に参加した動機を聴取したところ､「上司に勧められたから」「フィジカルアセスメントが苦手だから」「講師を知っていたから」などだった。研修中の受講生の様子として、初対面のメンバーだったにもかかわらず、演習では協力し合いながら積極的に取り組んでいた。例えば、聴診演習では、背部の聴診方法など具体的な技術について実践しながら活発な意見交換がされていた。グループワークでは､「他の施設では異なるやり方をしていることが分かり参考になった」､「いつもと違うと気づくポイントについて学

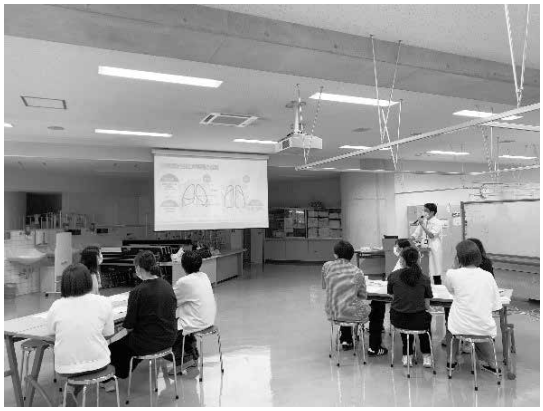
ぶことができた」とのコメントが聞かれた。

⑶ 活動評価

研修期間中の受講者の主体的な様子やコメント、アンケート結果を考慮すると、臨床におけるフィジカルアセスメントに関する課題に対して、基本的な知識や手技を再確認する機会を提供できた可能性がある。グループワークによるディスカッションやそれぞれの施設における情報共有は、フィジカルアセスメントにおける不安軽減や安心に繋がった可能性が示唆される。

一方で、20 人の募集に対して参加が 9 人であること、参加の動機が、上司の勧めや講師を知っていたこととの回答を考慮すると、本研修におけるニーズの再検証が必要である。さらに、終了後アンケートの回収率の低さについても原因の検討が必要である。

⑷ 講座の様子



①講義の様子

②講義中のグループワーク

③シミュレーターを用いた事例演習

④シミュレーターでの聴診演習

令和６年度 高知県立大学健康長寿センター
看護学部公開講座

フィジカルアセスメント研修

日　時

令和６年

8/17(土)

9:30～12:30

場　所　高知県立大学 池キャンパス　看護学部棟C112・C110

対　象　県内の卒後3年目までの看護師

定　員　20名

内　容　症状アセスメントを中心に事例を用いながら、
講義と参加者同士の質疑応答を通して学びを深めましょう

講　師　看護学部　助教　宮地　佐和子
依岡　美里
加藤　昭尚

申込方法　参加希望の方は、２次元バーコードにアクセスし、
「申し込みフォーム」に必要事項をご入力ください。

お申込みはこちらから↓

ウルクさん

申込〆切　**８月８日（木）**
＊定員になり次第、締め切らせていただきます。
＊当日の集合場所等のご案内は、
「申し込みフォーム」に入力いただいたメールアドレスにお送りいたします。

お問合先　高知県立大学看護学部：中井寿雄
FAX/TEL：088-847-8576
メールでの問い合わせは２次元バーコードから：

4. 令和6年度新任期行政栄養士研修会（1～2年目）

健康栄養学部 講師　村井 詩子

開催日時　令和6年6月18日（火）13時30分～16時
令和6年11月18日（月）13時30分～16時
開催場所　高知県保健衛生総合庁舎
対　　象　採用1～2年目の行政栄養士
参加者数　12人
教 職 員　健康栄養学部 講師　村井 詩子

⑴ 事業概要

少子高齢化や過疎化、核家族化等の進行により、栄養・食生活を取り巻く環境は大きく変化してきており、住民のニーズや地域の健康課題も多様で複雑化している。

行政栄養士においても、こどもから高齢者まで生涯を通じた健康づくりの推進のために、これらの健康課題に対して求められる役割が大きくなっている。一方で、行政栄養士の業務は、栄養・食生活支援、低栄養の予防対策、食品衛生管理など、多岐にわたる。また、健康課題の解決や業務を遂行する上で、行政栄養士には、公衆栄養におけるマネジメント力が求められている。

高知県では平成31年3月に「高知県行政栄養士人材育成ガイドライン」を作成し、行政の役割である成果の見える施策づくりを担える行政栄養士の人材育成を計画的に行っている。本事業は､行政栄養士が､地域の健康課題や業務上での課題を抽出し、課題解決に向けた取り組みを実施するための評価及び目標設定を行うために、知識や技術を習得することを目的として行っている。具体的には、高知県健康政策部保健政策課と連携し、新任期（採用1～2年目）の行政栄養士に対して研修会を開催し、上記の知識や技術を習得するため、講義や演習を行った。

⑵ 活動成果

高知県内で今年度と昨年度に採用された行政栄養士5人を対象として、「高知県行政栄養士人材育成ガイドライン」に基づき、年2回の研修会を行った。

前期では、行政栄養士として地域の食環境や食事及び栄養面の課題を整理し、データや現状から改善が必要な課題を明らかにする知識や技術を習得すること目的として、講義と演習を組み合わせて実施した。後期では、各受講者が担当する事業に合わせて、地域診断の手法を用いた現状の評価方法と計画立案について研修を行った。加えて、両研修会とも、事前課題としてパワーポイントを用いた資料作成を提示し、研修会時に発表を行い、受講者間で助言や意見交換を行った。

⑶ 活動評価

研修を通して、公衆栄養マネジメントの考え方に従って、成果や評価を意識して業務に取組み、住民の栄養改善や地域の健康課題の改善に貢献できる行政栄養士の育成に取り組んでいる。

研修では、「高知県行政栄養士人材育成ガイドライン」に基づき、「①地域の現状を把握し、健康課題を抽出することができる」と「②課題に対する情報を収集し､整理することができる」を目標として設定した。

前期では、地域診断の手法について講義や演習を行い各地域のアセスメントを行った。各受講者は、公衆栄養マネジメントに従い、各受講者の業務における課題の把握や抽出、課題に必要なデータの収集、改善に向けた課題の優先順位を考え、具体的な目標を設定することができた。後期では、前期で設定した目標に対する取り組みを事前課題としてまとめて発表した。また、事業計画を立案し、業務上での課題や障壁等について職種の異なる受講者間で助言や意見交換を行うことで、多角的な視点をもって業務の課題解決に取り組む機会を得ることができた。

⑷ 研修会の様子

①研修会の様子

５. 中堅期（前期）保健師能力育成研修会

看護学部 准教授　小澤 若菜

開催日時　令和６年９月 12 日（木）13 時 30 分～ 15 時 30 分
令和６年 12 月 24 日（火）13 時 30 分～ 16 時
令和７年３月６日（木）13 時 30 分～ 16 時（予定）
開催場所　Web 開催
対　　象　中堅期前期（経験年数概ね５～ 10 年程度）の保健師
参加者数　８人
教 職 員　看護学部 准教授　小澤 若菜、助教　髙橋 真紀子（計２人）

⑴　事業概要

日頃の保健活動について感じている課題、疑問に思っていること、改善を検討していることを、地区活動の視点から振り返ることで、「地域全体の健康課題を明確化すること」、「組織や地域住民との情報共有や合意形成を行い、関係機関・組織団体と協働できること」、「自らの経験を新任期保健師の人材育成において発揮すること」等の高知県保健師に求められる能力の向上を目指し、高知県健康政策部保健政策課と協働で企画実施した。

⑵　活動成果

第１回の研修では、中堅期保健師の人材育成における現状と課題について、研修の主旨及び全体の研修計画について説明を行った。第２回の終了後は、個別支援として、参加者を対象に、教員及び高知県保健政策課の担当者がコンサルテーションを行い、個々人の研修作成に向けた進捗確認と、課題に対する質問と相談への対応を行った。

【第１回】
到達目標：日頃の保健活動をとおして、受け持ち地区及び地域の生活集団の特性を根拠としながら、健康課題を明確にすることができる（現状、課題、目標、目的の明確化）。
日　時：令和６年９月 12 日（木）13 時 30 分～ 15 時 30 分
参加者：８人
内容
▷ 講義①「地区活動の展開について　概論」
▷ グループワーク
▷ 講義②「地区活動の展開について　各論」
・情報収集方法、情報分析の目的
・プリシード、プロシードモデルを活用した健康課題の明確化
▷ まとめ

【第２回】

到達目標：健康課題の解決に向けた、活動目標、活動方針、活動方法の立案と、これらを踏まえた実施及び振り返りを行うことができる。

日　時：令和６年 12 月 24 日（火）13 時 30 分～ 16 時

参加者：８人

内容

▷ 講義①「地区活動の展開について　各論」

・地区活動計画の立案、実施

・評価指標について

▷ グループワーク

・第１回目の成果物の共有

・実施計画、評価計画等の方向性

▷ 講義②「プレゼンテーション資料の作成について」

【第３回】

到達目標：地区活動の評価を通して、次年度の改善、向上につながる新たな提案をすることができる。

日　時：令和７年３月６日（木）13 時 30 分～ 16 時（予定）

参加者：８人（予定）

内容（予定）

▷ 発表

▷ ディスカッション

・研修をとおしての学び、気づき

・職場で定着させるためにできること　等

⑶ 活動評価

今年度は、オンライン形式で研修、グループワーク及び個別のコンサルテーションを行ったため、会場から遠方の自治体に所属する保健師からも参加希望を得ることができた。前年度は、地区活動の展開に伴う、研修課題への取り組み方が不明瞭であったため、今年度は、講義内容で、課題の到達内容を具体的に示すよう工夫した。

なお、第１回、２回研修で行った事前課題の共有は、発表内容に対する時間設定が短かったため、研修の終了時間を超過した。

次年度も、職場からの参加がしやすいことから遠隔による研修を企画する。その際、参加者が情報共有しやすいように時間配分の再構成を行う予定である。

6. 高知県新任期保健師研修会

看護学部 准教授　小澤 若菜

開催日時　【プリセプター能力育成研修】
令和６年５月 10 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
令和７年３月７日（金）14 時 00 分～ 16 時 30 分
【１年目研修・個別支援】
令和６年８月６日（火）13 時 30 分～ 16 時 30 分
令和６年 11 月８日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
【２年目研修・地区診断】
令和６年６月７日（金）13 時 30 分～ 14 時 30 分
令和６年 12 月 16 日（月）13 時 30 分～ 16 時 30 分
【３年目研修・PDCA サイクル①】
令和６年７月 26 日（金）13 時 30 分～ 14 時 30 分
令和６年 12 月 19 日（木）13 時 30 分～ 16 時 30 分
【４年目研修・PDCA サイクル②】
令和６年６月 14 日（金）13 時 30 分～ 14 時 30 分
令和７年２月 14 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分

開催場所　高知県保健衛生総合庁舎１階大会議室／
高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟２階 A216 会議室　他

対　　象　高知県、高知県内の市町村に所属する１年目～４年目の保健師

参加者数　225 人

教 職 員　看護学部 准教授　小澤 若菜、助教　髙橋 真紀子（計２人）

外部講師　高知大学医学部看護学科 講師　齋藤 美和 氏（計１人）

⑴　事業概要

高知県新任保健師支援プログラムの一環として、新任期保健師（１年目～４年目）に対する研修会（リカレント教育・ケア検討会）を、高知県健康政策部保健政策課と協働で、企画し、実施した。

⑵　活動成果

１年目の保健師を対象とした研修では「個別支援」、２年目の保健師を対象とした研修では「地区診断」、３年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル①」を、４年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル②」をテーマに取り組んだ。令和５年３月に改訂した保健師人材育成マニュアル Ver. 3.1 に基づき、新任期保健師に必要な能力を高めるために、集合研修による講義とグループワークを中心に企画・実施した。

【第１回プリセプター能力育成研修】
日　時：令和６年５月 10 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：42 人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟２階Ａ 216 会議室
内容
▷「高知県保健師人材育成ガイドライン Ver.3.1」について
　　１）高知県保健師人材育成ガイドライン Ver.3.1 の概要
　　２）新任期保健師支援プログラムの活用方法
▷　講義「『新任期保健師支援プログラム』行動目標とは何か」
　講師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
▷　情報交換・グループワーク

＜プリセプター・管理者＞
　講義「管理者・プリセプターの役割」
　講師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
　　実践報告「新任期保健師人材育成に取り組んでみて」
　　意見交換「管理者・プリセプターの役割、育成方法について」
　　＜新任者＞
　　情報交換会「保健師として働き始めて」

【第２回プリセプター能力育成研修】
日時：令和７年３月７日（金）14 時 00 分～ 16 時 30 分

【１年目研修・個別支援】
● 第１回新任期保健師研修会
日　時：令和６年８月６日（火）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：18 人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟２階Ａ 216 会議室
内容
▷　講義「地区活動の一環としての家庭訪問を考える」
　講師：髙橋　真紀子（看護学部 助教）
▷　グループワーク
▷　事例の解説・講義「プロセスレコードの書き方」
　講師：髙橋　真紀子（看護学部 助教）

● 第２回新任期保健師研修会
日　時：令和６年 11 月８日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：18 人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟２階Ａ 216 会議室
内容
▷　高知の保健師のめざす姿
　講師：酒井　美枝（高知県健康政策部保健政策課　保健推進監）

▷　グループワーク
▷　まとめの講義
　　講師：小澤 若菜（看護学部 准教授）

【２年目研修・地区診断】
● 第１回新任期保健師研修会
日　時：令和６年６月７日（金）13 時 30 分～ 14 時 30 分
参加者：32 人
場　所：Web 形式
内容
▷　講義「地区診断―ありのままの地域をとらえよう―」
　　講師：髙橋　真紀子（看護学部 助教）
▷　講義「ポートフォリオを作ろう！」
　　講師：髙橋　真紀子（看護学部 助教）

● 第２回新任期保健師研修会
日　時：令和６年 12 月 16 日（月）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：33 人
場　所：高知県保健衛生総合庁舎１階大会議室
内容
▷　グループワーク・グループワークまとめ

【３年目研修・PDCA サイクル①】
● 第１回新任期保健師研修会
日　時：令和６年７月 26 日（金）13 時 30 分～ 14 時 30 分
参加者：29 人
場　所：Web 形式
内容
▷　講義「PDCA サイクルとは何か」
　　講師：小澤 若菜（看護学部 准教授）

● 第２回新任期保健師研修会
日　時：令和６年 12 月 19 日（木）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：28 人
場　所：高知県保健衛生総合庁舎１階大会議室
内容
▷　グループワーク・グループワークまとめ

【４年目研修・PDCA サイクル②】
● 第１回新任期保健師研修会
日　時：令和６年６月 14 日（金）13 時 30 分～ 14 時 30 分
参加者：25 人

場　所：Web 形式
内容
▷　講義「PDCA サイクルにおける評価の視点」
　　講師：小澤 若菜（看護学部 准教授）

● 第２回新任期保健師研修会
日　時：令和７年２月 14 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：22 人
場　所：高知県立大学　本部・健康栄養学部棟２階 A216 会議室
内容
▷　グループワーク

⑶ 活動評価

高知県内保健師１年目から４年目までを対象として「個別対応から地域の課題を捉える、個別支援に終わらず、この問題を集団・地域の課題へと発展させる」ことを目的に、保健師として必要な能力を段階的に獲得することができるよう、OJT と Off - JT を組み合わせたプログラムとして企画・実施した。

参加者は、前期研修終了後、それぞれの自治体で自身が研修で学んだ内容をもとに課題に取り組み、プリセプターからの指導や、実践をふまえた課題を整理したのち、後期研修で１年間の取り組みについて発表を行った。なお、後期研修では今年度の取り組みが次年度に活かせるように県福祉保健所保健師や教員からのフィードバックやグループでの意見交換を中心に行った。

本研修のグループワーク、講義を通して、個別支援の展開、自己の振り返り、個から地域へ展開する地域看護の視点、PDCA サイクルに基づく事業展開方法等について、学ぶ機会を提供した。また、研修に参加できなかった受講者に対しては事前課題に対し書面にてコメントを返すことで、受講生の日々の取り組みの継続・発展に寄与できるように取り組んだ。本研修は、受講する保健師が、自らの実践活動を整理して展開できるよう支援し、また各段階に応じた能力を獲得することができるよう展開している。したがって、研修自体を実践活動のひとつとして位置付けることができるよう、受講者個々の現場での経験にもとづく支援に取り組んだ。

受講者は、プログラムへの参加を通して、自身の保健師活動を振り返る機会となるとともに、必要な知識や方法論をもとに保健活動の展開方法を学ぶ機会となった。

県民の健康課題の解決に貢献するためにも、今後も引き続き新任期保健師の人材育成に、関係機関と協働した参画ができるよう考えている。

Ⅴ　㊑知県の健康長寿および地域共生社会の調査・研究および社会実装に向けた活動

1.　ウェルビーイング向上に資する厚生評価に関する研究

健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行

開催日時	通年
開催場所	津野町
対　　象	津野町住民
参加者数	17 人
教 職 員	健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行、看護学部 助教　源田 美香（計２人）
外部講師	高知県健康政策部在宅療養推進課 主幹　池 香 氏

⑴　事業概要

本学と研究連携協定を締結し、地域共生社会の推進の様々な取り組みを行っている津野町と連携し、地域共生社会の推進が住民のウェルビーイングをどのように向上させるか評価するために、住民を分析対象とするデータ分析を実施する。データに基づいて住民のウェルビーイングの実態を捉えて、地域共生社会の推進が住民の健康と福祉を向上させ、安心して住み続けることができる地域を築く上で有効であることを評価するとともに、地域共生社会推進のための実効的な支援策を提言する。

⑵　活動成果

前年度に本事業で同町内にて実施した調査結果ならびに町より提供を受けた日常生活圏域ニーズ調査の分析を行ったところ、以下の事項が明らかになった。

①65 歳以上住民の町内における社会的活動への参加率は他自治体より高く、町内における活動の選択機会は、男性では 85 歳以上になっても豊かに保たれている。

②社会的活動に定期的に参加することは、体力の程度によらず、主観的健康感や幸福度の向上に効果がある。

③ふだんの活動（日常の手仕事、作業、趣味、楽しみ）を続けることは、体力や身の回りの管理機能の程度によらず、自分らしい暮らしや充実した生活を実現する上で効果的である。

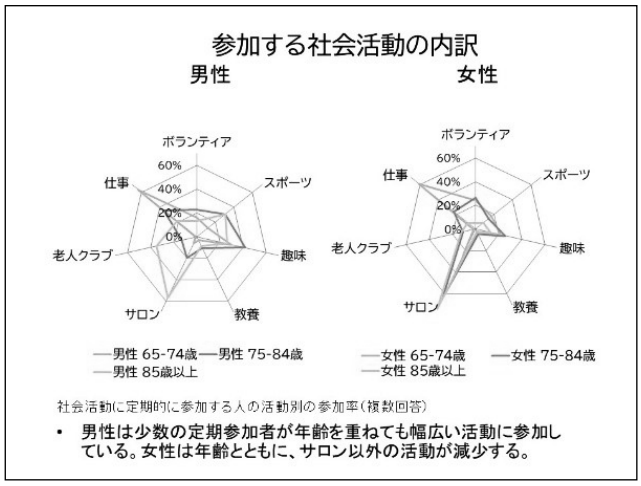
④町内には血縁に拠らない助け合い関係があり、困りごとの相談や看病が住民相互間でなされている。助け合い関係はケアの受け手のみならず支え手の主観的健康感や幸福度を高める効果がある。

分析結果は町の保健・介護関連職員に報告・共有し、職員の取り組みを評価する具体的指標となるとの評価を得られた。

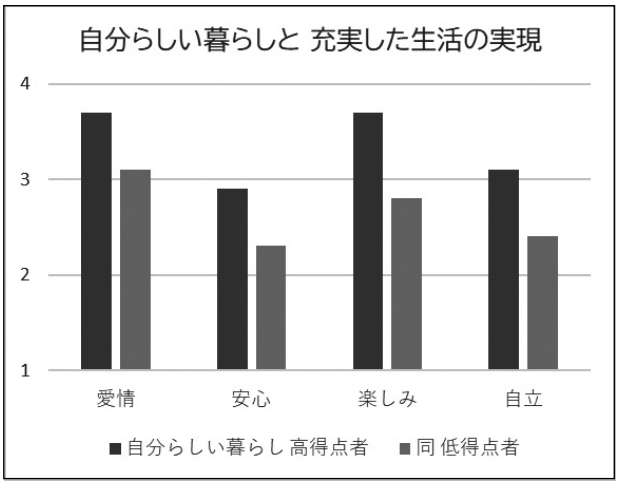
⑶　活動評価

町が有するデータの提供を受け大学において分析することにより、行政担当者とは異なる観点からの分析結果を提供することができた。また、前年度本事業における集落での住民との活動を踏まえ、当該地域住民の特性に応じた視点から分析を進め、地域における住民の厚生評価として有用な結果を得ることができた。

⑷ 講分析結果



①社会活動の選択機会



②自分らしい暮らしの充実した生活への効果

2. 健康長寿研究のためのロジスティクス

健康長寿研究センター長　久保田　聰美

⑴ 事業概要

健康長寿研究センターでは、健康測定機器を用いた県民への健康啓発活動や、教育研究活動に利用していただくために機器の貸出を行っている。

【健康長寿研究センター　貸出可能配備機器（参考）】

	機器名称	メーカー	台数	消耗品等
1	らくらくウェルネス （血管年齢・脳年齢測定）	ウェルアップ	1	
	結果印刷用プリンター	エプソン （型番：EP879AW）	1	プリント用紙（A4） トナー
2	ストレス測定器	ウェルアップ	1	
3	唾液アミラーゼ モニター	ニプロ	5	唾液アミラーゼチップ （20 本入り：4000 円程度）
4	握力測定器	トーエイライト	2	
5	ブレインプロ（PC 含む）		1	
6	手動身長計付き体組成計	タニタ	1	昇降補助手すり・スタンド
7	簡易血中乳酸測定器	アークレイ	2	乳酸キットが必要
8	物忘れ防止プログラム		1	
9	全自動身長体重計	AND	1	

⑵ 活動成果

今年度は研究活動のために１件（全自動身長体重計１台）の貸出を行い、研究推進のためのロジスティクスとしての機能を果たした。

○　研究者：看護学部 教授　立木 隆広

本事業は、フレイル予防のための基盤となるエビデンスを創出するための疫学研究である。

世界的に高齢化が進む現代、フレイルは最も重要な健康問題の一つとなっている。近年、フレイルは、身体的フレイルのみならず多面的な（身体的、精神的・心理的、社会的）フレイル（Multidimensional frailty）として捉える考えが浸透してきている。また、生活習慣の悪化は、フレイルのリスク要因として

注目されている。しかし、生活習慣と Multidimensional frailty の間の関連を明らかにしたエビデンスは不足している。そこで、本研究の目的を、地域在住日本人における、生活習慣と Multidimensional frailty との間の関連を明らかにし、この結果を基に新たなフレイル予防の立案を行うこととして、疫学調査を実施している。

この調査で、健康長寿研究センターの配備機器である全自動身長体重計を借用し身体計測を行った。身体計測では、身長、体重、BMI を測定した。ここで得た身長は、体組成測定にも利用された。

【事業概要】

開催日時	①令和 6 年 6 月 29 日（土）～ 30 日（日） 9 時～ 17 時
	②令和 6 年 12 月 7 日（土）～ 10 日（火） 9 時～ 18 時
開催場所	①高知ぢばさんセンター多目的ホール
	②高知県立大学永国寺キャンパス地域連携棟 2 階
対　　象	高知市の 40 歳以上の地域在住者
参加者数	① 35 人、② 164 人
教 職 員	看護学部 教授 立木 隆広、准教授 小澤 若葉、助教 高橋 真紀子、助教 中井 あい
	助教 加藤 昭尚／健康栄養学部 准教授 島田 郁子
学生スタッフ	①看護学研究科 4 人、看護学部 2 人、健康栄養学部 3 人
	②看護研学究科 1 人、人間生活学研究科 1 人、看護学部 6 人

【活動成果】

フレイル予防のための疫学研究において、高知市の 40 歳以上の地域在住者を対象に疫学調査を 2 回行った。調査に参加した対象者は 199 人であった。結果指標としてのフレイル、説明指標としての生活習慣を把握することができた。2 回目の調査が 12 月に実施され、今年度分の解析を現在行っている。

借用した全自動身長体重計を使用することで、身体計測を円滑に行うことができた。

【活動評価】

令和 6 年度では、延べ 6 日間で 199 人の対象者を調査することができた。調査日数を考えると必ずしも少なくない対象者数である。しかし、目標サンプルサイズにはまだ届いていないため、来年度も調査を継続し調査参加対象者数を増やした後、解析を行う必要がある。

Ⅵ　㊑知県の地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関する活動

1.　高知市三里地区サロン活動の継続支援プロジェクト
～参加者の主体性を大切にしながら健康づくりを応援する～

開催日時　①令和６年７月９日（火）13 時 30 分～ 15 時
②令和６年９月 10 日（火）13 時 30 分～ 15 時 30 分
③令和６年 10 月８日（火）13 時 30 分～ 15 時

開催場所　①三里文化会館
②高知県立大学池キャンパス
③船倉避難センター

対　　象　三里地区サロンのリーダー及び次世代のリーダー

参加者数　148 人

教 職 員　社会福祉学部 講師　辻 真美（①②③）、助教　乾 由美（①②③）
事務局　由比 由紀（①③）、高芝 有美（①③）、谷 映美（①）、
森田 吹生（①②）、福重 彩音（①②）、松下 哲子（①②）（計８人）

外部講師　地域：三里地域包括支援センター、高知市社会福祉協議会、高知市役所地域防災推進課、
さんすい防災研究所　山﨑 水紀夫 氏

学生スタッフ　社会福祉学部　25 人

⑴　事業概要

【背景】

介護予防の取り組みとして 2002 年より、高知市で始まった「いきいき百歳体操（以下、体操）」は、今年で 22 年目を迎える。体操は、高知市の高齢者が集うサロン会場で取り組まれており、サロン活動は介護予防だけではなく、地域で暮す高齢者にとって大切な居場所や他者との交流の場となっている。令和４年度の健康長寿研究センター事業の活動の一つとして、池キャンパスの近隣の三里地区の２会場にて転倒予防体操教室を実施した。この２会場では、コロナ禍で閉じこもりになりがちな高齢者のフレイル予防に取り入れてもらうために、健康長寿研究センターが作成した「第一弾おうちで健康長寿体験型セミナー転倒予防体操編」の動画体操の中に取り入れて活動されている。本教室を実施するにあたり、三里地域包括支援センターの生活支援コーディネーターや住民から現状についての意見を収集することで、コロナの感染流行や住民の高齢化により、参加者の減少やリーダーの後継者不足、活動のマンネリ化で、今後、活動の減退や停止のおそれがあるなど、現状の課題が把握された。また、現リーダーが積極的に活動をサポートされており、安全で継続的に行える新たな体操メニューを取り入れたい意向があることも分かった。

【目的】

本事業をとおして、リーダー間の情報共有、サロンを超えた交流を行うことで、住民同士の日常的なつながりや、活動を支援、継続していくためのリンクワーカーを育成し、三里地域活動の活性化を行う。また、南海トラフ地震の津波浸水予測で、浸水が想定されている地域住民からは、転倒予防体操により足腰を鍛えることで、非常時に「逃げる足」をつくることも大切という声があった。そこで、今年度より新た

に災害時の備えも取り入れ、本学で実施している防災研修の一部に参加いただき、施設を利用することで、高知市の指定避難場所である池キャンパスを身近に感じられることで、平時より住民間及び大学とのつながりをつくる。また、本学学生にも参加を促し、住民が暮らす生活の場に触れることで、住民の生活への想いや地域課題を学ぶことができ、将来、住民の視点に立ち支援ができる専門職になることを目的とする。

⑵ 活動成果

三里地区サロン活動の継続に向けて、以下の活動内容を３回実施した。

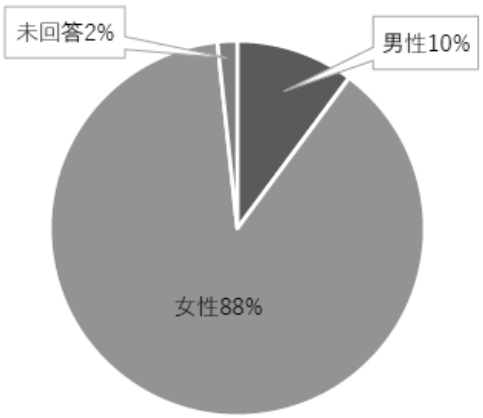
①７月９日（火）三里文化会館
○講演「将来の自分に投資！！今からコツコツ貯金ライフ」
・いきいき百歳体操サロンの活動紹介
・高齢者の転倒リスク
・筋肉と脱水について
・体操の効果と気をつけておきたいこと
・体操前の体調チェック
②９月 10 日（火）高知県立大学池キャンパス
○講演「“いざ”という時の貯筋の大切さについて」
・周囲の人と話し合い、避難場所を決めておこう！
・“いざ”という時、皆で逃げるための貯筋の大切さ
・体操前の心構えと体調チェック
○個人とペア、レクリエーションによる転倒予防体操
・手作り新聞棒を使った体操
・三里地区別対抗新聞足漕ゲーム
○災害食試食（第５回事務局職員災害対応能力強化研修）
・パッククッキング試食
・資料を配布し、作り方の説明、質疑応答
○指定避難所である体育館での避難所体験（第５回事務局職員災害対応能力強化研修）
・受付、段ボールトイレ・ベット、簡易テント、車中泊の紹介
③ 10 月８日（火）船倉避難センター
○学生と一緒に新聞棒づくり
○講演「いきいき百歳体操三里交流会」
・体操の効果と気をつけておきたいこと
・体操前の体調チェック
○レクリエーション
・ボール体操
・チーム別対抗新聞足漕ゲーム
○交流会（グループワーク）
・テーマとして、会場別の取組み紹介、私の自慢できること、いきいき百歳体操で課題に感じていること等
・学生がファシリテーターと各グループの発表を担当

(3) 活動評価

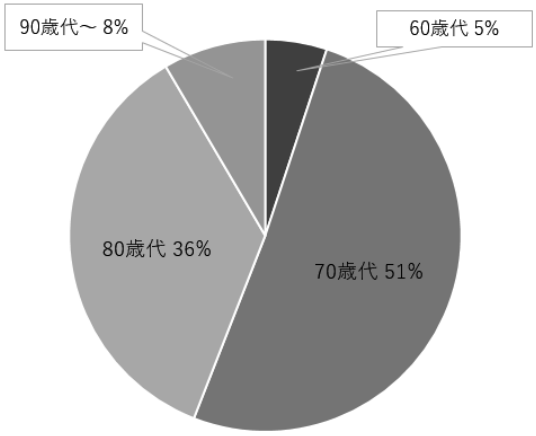
①7月9日（火） 三里文化会館（参加者数68人）

○アンケート結果

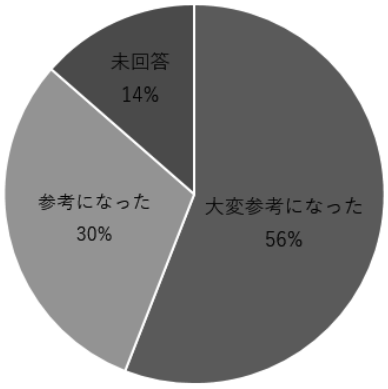
Q1　あなたの性別を教えてください。



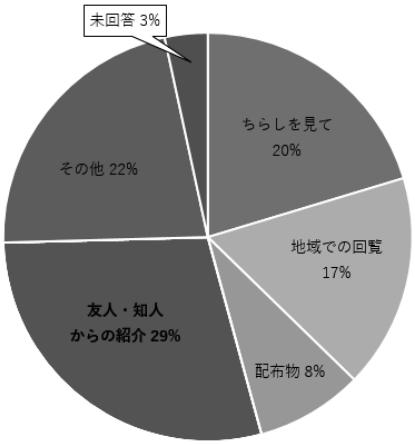
Q2　あなたの年齢を教えてください。



Q3　セミナーの内容はいかがでしたか。



Q4　今回の体験型セミナーはどのような方法で知りましたか？



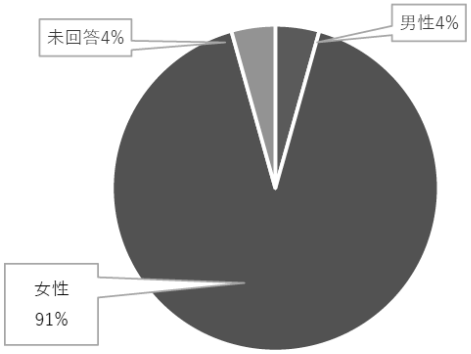
○自由記述

・マンネリ化していますので、変わった体操をよろしくお願いします。
・新聞棒体操を参考に家で行います。この暑い夏を乗り越えることができると思います。
・ミニゲームが他の地域の方と知り合いになるキッカケになった。
・時間もちょうどで楽しくできました。地域の皆にも伝えていきたいと思いました。

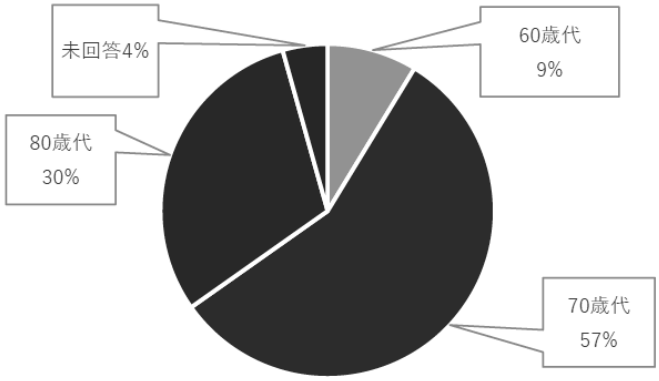
②9月10日（火）高知県立大学池キャンパス（参加者数36人）

○アンケート結果

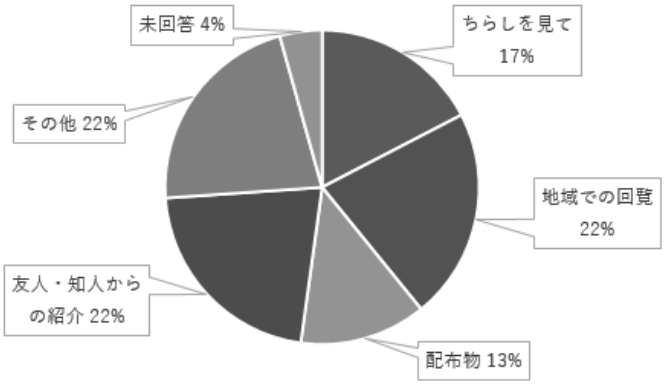
Q1　あなたの性別を教えてください。



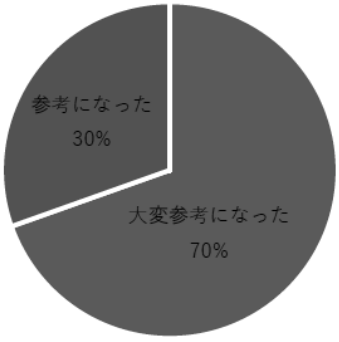
Q2　あなたの年齢を教えてください。



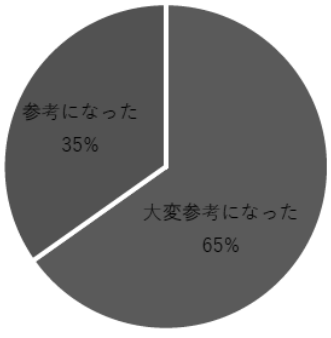
Q3　今回の体験型セミナーはどのような方法で知りましたか？



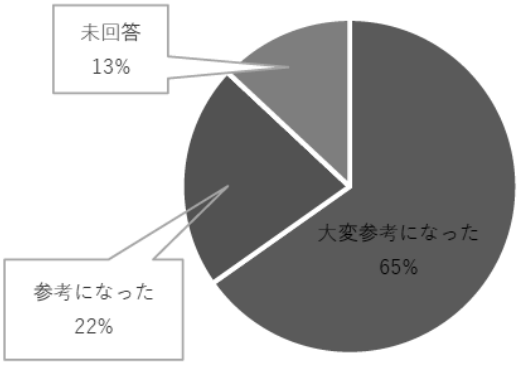
Q5　転倒予防講座の内容はいかがでしたか。



Q6　災害食試食（パッククッキング）の内容はいかがでしたか。



Q7　避難所体験の内容はいかがでしたか。



○自由記述

・大学が避難所になっているとは知らなかったので、良かったです。

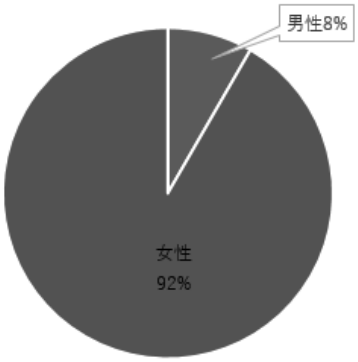
・災害の講座に初めて参加しました。帰って家族と話し合いたいと思いました。話を聞いて少し気持ちが楽になりました。

・今回習った以外のパッククッキングの色々な調理方法を知りたいです。
・見学出来て勉強になりました。体育館で体験もでき、夏の暑さを意識することができたことがとても良かったです。

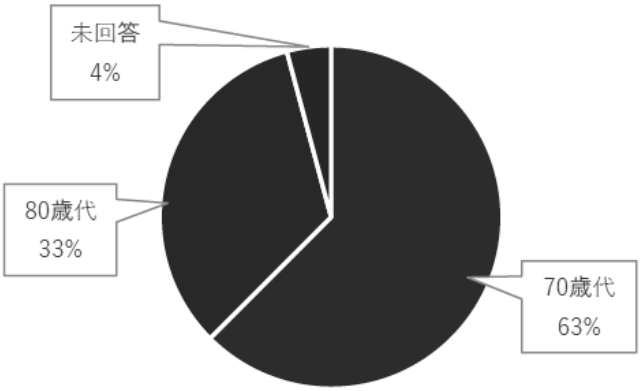
③ 10 月 8 日（火）船倉避難センター（参加者数 44 人）

○アンケート結果

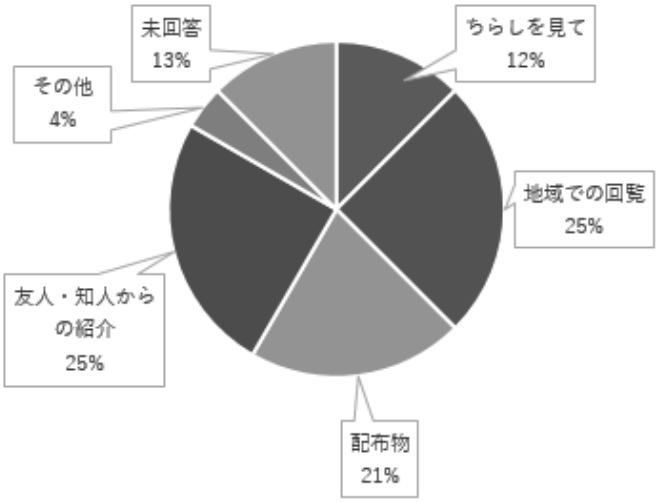
Q1-①　あなたの性別を教えてください。



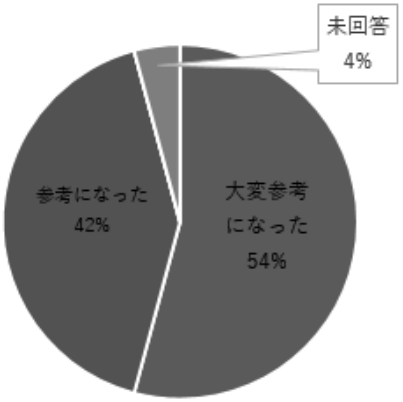
Q1-②　あなたの年齢を教えてください。



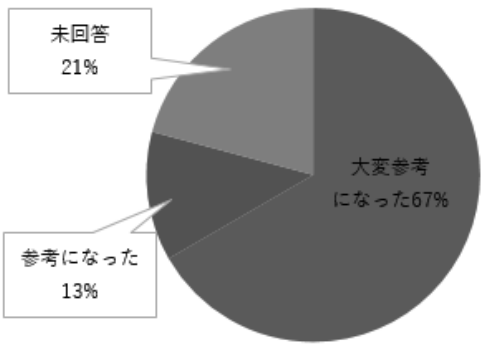
Q2　今回の体験型セミナーはどのような方法で知りましたか？



Q3-①　講義（体操の効果等）の内容はいかがでしたか？



Q3-②　レクリエーション（足漕ぎ・ボール等）の内容はいかがでしたか？



○自由記述

・とても有意義な交流会ありがとうございました。
・他の地域の事が聞けてよかった。楽しい一日でした。
・地域との交流をもっと進めたい。
・各体操会場の内容が聞けた事はとても参考になりました。
・身体を動かして、人と会話をしてリフレッシュをした。
・ゲームが大変楽しく良き運動になりました。
・とても楽しい時間でした。皆さんの日々の生活が参考になりました。

（4）サロン活動の様子

①講演の様子（三里文化会館）

②新聞棒体操（三里文化会館）

③新聞足漕ぎゲーム（高知県立大学）

④学生スタッフと三里地域の方々（高知県立大学）

⑤災害食試食の様子（高知県立大学）

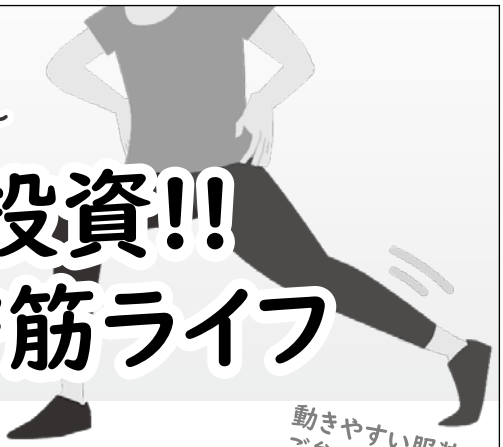
⑥体育館での避難所体験（高知県立大学）

⑦車での避難所体験（高知県立大学）

⑧ボール体操（舟倉避難センター）

～いきいき百歳体操応援プロジェクト～

将来の自分に投資!!
今からコツコツ貯筋ライフ



動きやすい服装でご参加ください

教室01

日時：7月9日(火) 午後1時30分～3時(受付1時～) 定員70名
会場：三里文化会館（高知市仁井田1652-1）

持ち物
飲料、タオル

・座学＋体操～個人、ペアでできる転倒予防体操～

教室02

日時：9月10日(火) 午後1時30分～3時30分(受付1時～) 定員50名
会場：高知県立大学池キャンパス（高知市池2751-1）

持ち物
飲料、タオル
室内履き

・座学＋体操～個人、ペアでできる転倒予防体操～
・パッククッキング試食
・避難所体験(段ボールトイレ・簡易テント・段ボールベット・車中泊の紹介等)

教室03

日時：10月8日(火) 午後1時30分～3時(受付1時～) 定員30名
会場：舟倉避難センター（高知市仁井田1646－14）

持ち物
飲料、タオル
室内履き

・座学＋体操～個人、ペアでできる転倒予防体操～
・交流会＋新聞棒づくり

三里地域のみなさん、
新聞棒を使って
無理なく・楽しく♪
体を動かしましょう

お申込・お問合せ先

お申込はうら面

高知市三里地域包括支援センター
TEL 847-7200 FAX 847-7210

高知県立大学健康長寿研究センター 令和６年度高知市三里地区サロン活動継続支援プロジェクト
【高知市社会福祉協議会・三里地域包括支援センター・高知県立大学】

Ⅶ　健康長寿に係る研究等一覧

⑴　事業概要

健康長寿に係る研究や、学会発表等をここに示す。

⑵　活動成果

【学会発表・シンポジウム等】

1.　第 83 回日本公衆衛生学会総会 (2024.10.29)；札幌市
「小中学生の夜更かしと生活習慣病予防健診の健診データの関連」
健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行、看護学部 助教　田之頭 恵里、德岡 真由

2.　第 83 回日本公衆衛生学会総会 (2024.10.30)；札幌市
「中山間地域住民の社会的活動参加による 主観的健康感と幸福度向上への効果」
健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行

3.　第 44 回日本看護科学学会学術集会 (2024.12.7)；熊本市
「小中学生の生活習慣病予防健診データと幸福度の関連」
健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行、看護学部 助教　田之頭 恵里、德岡 真由

4.　公共選択学会第 28 回大会 (2024.12.15)；同志社大学
「中山間地域高齢者における社会とのケア関係とウェル・ビーイング向上との関連」
健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行、看護学部 助教　源田 美香

5.　第 70 回四国公衆衛生学会総会 (2025.2.7)；松山市
「中山間地域高齢者の自分らしい暮らしの実現」
健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行

6.　公益財団法人生協総合研究所 2024 年度公開研究会 (2025.3.14)；東京都
「子どもの社会経済的状況が発育不良や不健康リスクに及ぼす影響～健診データと健康行動国際指標との関連の検討」
健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行、看護学部 助教　田之頭 恵里、德岡 真由

【研究論文】

1.　新人訪問看護師対象フィジカルアセスメント学習で活用するシミュレーショントレーニングシナリオの開発：発熱している高齢在宅療養者の対応／日本看護シミュレーションラーニング学会誌 ,2(0),30-38,2024
山本 かよ , 小原 弘子 , 森下 幸子

Ⅷ　付録

１．高知県立大学健康長寿研究センター規程

（目的）

第１条　この規程は、高知県公立大学法人高知県立大学組織規程（以下、「組織規程」という。）第２条に基づき、本学における地域の人々の健康長寿の推進及び健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の最新の知識・技術の向上に努めるとともに、これらの研究を関連学部等が連携して円滑に推進するため設置する、高知県立大学健康長寿研究センター（以下「センター」という。）の組織及び管理運営について必要な事項を定める。

（所掌事項）

第２条　センターは次の各号に掲げる事項を実施する。

（１）健康長寿社会を推進する調査・研究及び社会実装の提案に関すること

（２）健康長寿を目指す県・市町村との連携に関すること

（３）医療機関・社会福祉施設などの健康長寿に関連する機関との連携に関すること

（４）健康長寿に携わる専門職等の教育・研修に関すること

（５）地域共生社会の実現に係る施策・事業の科学的評価に関すること

（６）地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関すること

（７）その他学長が必要と認めた事項に関すること

（組織）

第３条　センターは、次の各号に掲げる教職員（以下「センター員」という。）をもって構成する。

（１）センター長

（２）健康長寿の教育研究に従事している関連学部から選出された教員各２名

（３）地域連携部健康長寿研究センター担当職員から１名

（４）その他センター長が必要と認めた者

（センター長等）

第４条　センターにセンター長のほか副センター長を置く。

２　センター長は、組織規程第６条に定める業務のほか、第５条に定めるセンター運営会議（以下「運営会議」という。）の委員長を務める。

３　副センター長は、前条第２号のセンター員の中からセンター長が指名する。

４　副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代行する。

（センター運営委員会）

第５条　センターの円滑な業務の推進及び連絡・調整に関する事項を協議するため運営会議を設置し、必要に応じて運営会議を開催する。

２　運営会議は、センター長が招集する。

３　運営会議は、第３条第１号から第４号までのセンター員で構成する。

４　運営会議の議長は、センター長が務める。

５　運営会議は、構成員の過半数の出席がなければ開くことができない。

６　会議の議事は、出席した構成員（議長を除く）の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

７　運営会議は、センターが行った活動内容を自己点検・評価しなければならない。

（任期）
第６条　第３条第２号のセンター員の任期は、２年とする。
２　第３条第２号のセンター員は、再任することができる。
３　第３条第２号のセンター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
（事務）
第７条　センターに関する事務は、地域連携部において処理する。
（雑則）
第８条　この規程に定めるもののほか、センターの運営に関する必要な事項は別に定める。

附　則
１　この規程は、平成２３年４月１日から施行する。
２　ただし、高知県立大学の最初の健康長寿センター長の任期は、平成 24 年 3 月 31 日までとする。

附　則
この規程は、平成 26 年 3 月 26 日から施行する。

附　則
この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

附　則
この規程は、令和２年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、令和３年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、令和６年４月１日から施行する。

２．令和６年度健康長寿センター運営委員会実施状況

（開催場所：高知県立大学池キャンパス）

- **第１回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年４月22日（月）　10時30分～11時50分
- **第２回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年５月27日（月）　10時30分～11時30分
- **第３回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年６月24日（月）　10時30分～11時50分
- **第４回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年７月29日（月）　10時30分～11時30分
- **第５回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年８月28日（水）　メール審議
- **第６回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年９月30日（月）　10時30分～11時50分
- **第７回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年10月28日（月）　10時30分～11時20分
- **第８回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和６年11月25日（月）　10時30分～10時55分
- **第９回　健康長寿研究センター運営会議**　**未実施**
- **第10回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和７年１月27日（月）　10時30分～12時
- **第11回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和７年２月17日（月）　10時30分～11時45分
- **第12回　健康長寿研究センター運営会議**　**日時**：令和７年３月（予定）

３．名簿（令和６年度）

委　員

健康長寿研究センター長	久保田　聰　美
健康長寿研究副センター長	小　林　秀　行
看護学部　　准教授	中　井　寿　雄
看護学部　　助教	徳　岡　麻　由
社会福祉学部　講師	辻　　真　美
社会福祉学部　助教	乾　　由　美
健康栄養学部　教授	近　藤　美　樹
健康栄養学部　助教	隅　田　有公子
看護学部　特任教授 （寄附講座、入退院、糖尿の３事業スーパーバイザー）	森　下　安　子
看護学部　准教授 （寄附講座、入退院、糖尿３事業学内責任者）	森　下　幸　子
看護学部　特任助教（寄附講座）	井　上　加奈子
看護学部　特任助手（入退院）	横　川　奈　知
企画調整課課長	三　本　雅　宣

事務局

企画調整課	谷　　映　美
企画調整課	中　澤　雄　也
企画調整課	森　田　吹　生
企画調整課	松　下　哲　子
企画調整課	福　重　彩　音
企画調整課	千　頭　小百合

健康長寿研究センター キャラクター
ウルクさん

■発　行
高知県立大学 健康長寿研究センター

■発行年月
令和７年(2025年) ３月

高知県立大学 池キャンパス
〒781-8515 高知市池2751番地1
TEL 088-847-8815
FAX 088-847-8579
http://www.u-kochi.ac.jp/site/wlrc/